麻原彰晃の世界 PART7

仏教真理・八正道

第一章 麻原彰晃尊師説法集

第二章 二千六百年前の経典が、今明快に解き明かされる！

『南伝大蔵経』

「道に関係づけられた経典」

麻原彰晃



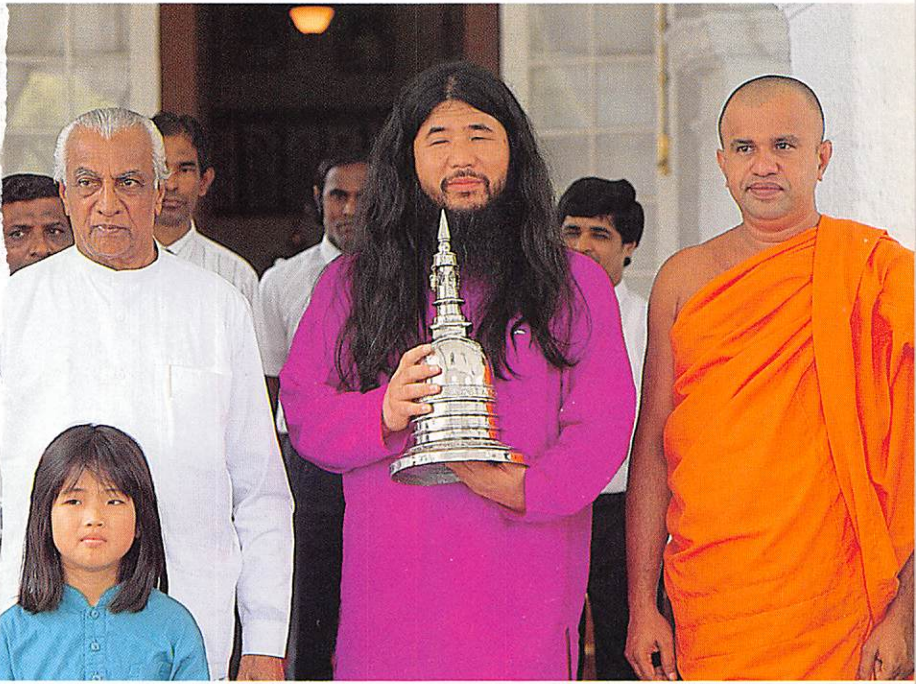
麻原彰晃の世界 PART7

仏教真理・八正道

麻原彰晃







はじめに

近日、数多くの仏教書が出版され、いにしえの覚者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）のお説きになった「八正道（オウム訳・聖なる八段階の道）」についても論じられています。しかし、それらは、真実とは大いにかけ離れたものがほとんどです。

その理由の一つとしては、日本の仏典そのものが、インドの言葉であるサンスクリット語を中国語に訳し、さらにその漢訳を基に日本語に訳すという、二重の人的介入がなされていることが挙げられます。

本書『仏教真理・八正道』は、日本でただ一人の最終解脱者であられる麻原彰晃尊師の説法と、二千六百年前のサキャ神賢の教えである『南伝大蔵経』「道に関係づけられた経典（道相応）」の現代語訳で構成されています。

説法集に関しては、大部分を説法が行なわれた日付順に配列してあります。それは、本来説法というものは対機的に行なわれるものであり、オウム真理教がたどってきた変遷を、そのままの言葉でご覧になっていただこうという意図からです。

初期のころには初期なりの、一般的な仏教用語をそのままに、そして最近のものは、『南伝大蔵経』の原文であるパーリ語を一語一語忠実に調べあげたものを、麻原尊師の瞑想体験に基づいて吟味された、オウム流の非常にわかりやすい表現を用いて説かれています。その比較検討に関しては、言語対比表をご参照ください。

経典に関しては、原文に忠実に、意訳を交えず、現代的なわかりやすい日本語に訳されていますので、今まであまり経典に触れたことのない方でも、興味深く読んでいただけることと思います。

なお、仏典というものは読むためだけのものではなく、それを実践し、少しでも高い世界へ、そして今生でも真の意味での幸福にな

るためのものです。

八正道は、一般的には出家をしないと完璧に実践することは不可能だとされています。本書には、八正道に絡めて説法の全容が掲載されていますが、サキャ神賢が初転法輪で説かれた「四つの絶対的真理（四聖諦）」「十二の条件生起の段階（十二縁起の法）」では、苦しみというものの本質が述べられています。

また、麻原尊師の言葉に置き換えられた「六つの極限（六波羅蜜）」や「四つの真理の流れに入る段階（四預流支）」は、一般の方でもすぐに実践していただけるものと思います。

この書を手にされた皆様が、八正道の真の意味を理解され、真理の道に沿って歩まれんことを願います。

一九九一年十一月　広報編集部

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間地獄
叫喚地獄→号叫地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる地獄
阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天
楽変化天、化楽天→創造満足天

他化自在天→為他神以神通創造欲望満足従事天

悪魔→破滅天

色界→形状界

梵天→神聖天

梵衆天→神聖衆愛欲神天

梵輔天→神聖臣天

大梵天→大神聖天

浄天→美天

遍浄天→総美愛欲本質神天

広果天→偉大果報愛欲本質神天

浄居天→清潔居住天

無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天

善現天→善安楽愛欲神天

善見天→善現象愛欲神天

色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界

空無辺処→空間無辺境

識無辺処→識別無辺境

無所有処→無所有境

非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山

東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸

南贍部洲、閻浮堤→南のバラリンゴの大陸

西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者
善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）

調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）

菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟
声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者

遊行者→托鉢修行者
バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々-八つの宗教的特
　性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→(愛欲界に)一度だけ再生するこ
と
不還→不還(変更なし)
阿羅漢→供養値魂

四預流支→四つの真理の流れに入る段階
四聖諦→四つの絶対的真理
　苦聖諦→苦しみの絶対的真理
　集聖諦→苦しみの生起の絶対的真理
　滅聖諦→苦しみの滅尽の絶対的真理
　道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の
　　絶対的真理

四念処→四つの記憶修習述

四正断→二正断二正勤
　断断→現在悪業断
　律儀断→未来悪業断
　修断→現在善業勤
　随護断→未来善業勤

四如意足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習覚醒段階
択法覚支→検討覚醒段階
精進覚支→精進覚醒段階
喜覚支→喜覚醒段階
軽安覚支→静寂覚醒段階
定覚支→サマディ覚醒段階
捨覚支→無頓着覚醒段階

言語対比表

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみ
苦苦→苦苦（変更なし）
行苦→悪い構成要素の苦しみ
壊苦→悪化の苦しみ

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心→四無量心（変更なし）
慈→慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の興奮による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉挙蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状-容姿
声→声（変更なし）
香→香り
味→味（変更なし）

触→接触

五下分結→五つの下位に結び付けるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の興奮
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結び付けるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八離解脱
八勝処→八勝境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素-形状-容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ

有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→減少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一種者（変更なし）
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

殺生→殺生（変更なし）
偸盗→窃盗
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→虚言
綺語→軽薄語
悪口→悪口（変更なし）
両舌→中傷
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス



麻原彰晃の世界 ❖ PART 7

仏教真理・八正道

——目次——







第一章 麻原尊師が説く！明解「八正道」

◆第一話　一切曖昧さのない仏陀釈迦牟尼の法

「これぞ具体的八正道だ！」

◉正見――四つの真理を背景として

はい、それでは、今日はね、八正道について少し語ろう。

わたしは以前、『イニシエーション』の中で、過去の遺物であると八正道を説いている。その理由は、この現代において八正道を行じることが、あまりにも難しいからだと。しかし、これだけの出家の修行者が集うオウム真理教では、その八正道のね、まず一部を取り入れて、取り入れられないことはない。そのためにね、今日このようにして八正道を説こうと考えた。

まず、正見とは何だと。いいかな。まず正しく見る、正見とは何だと、ね。こ

れは四諦であると、四つの真理であるということができる。この世の中を、すべては苦であると、そして、その苦というものは、ね、必ずわたしたちを苦しめるものなんだと、ね。そしてその苦を滅するために、滅することはできるんだと。そして、その滅するための方法があるんだと。これが正見である、ね。

だから、仏陀釈迦牟尼の法というものは、いいかな、決して中途半端なものではない。中途半端なものではないとはどういうことかというと、そしてもう一つは、抽象的ではないと。抽象的ではないとはどういうことかというと、一切の曖昧さがないということだ、ね。ところが、例えば正見、正しく見ると、世の中を正しく見るためには云々という話があるとするならば、何を基準として正しく見るのかわからないと。わかるね、言ってることは。

ところが、例えば正しく見るイコール、四諦であるといったらどうだ。はっきりわかるよね。この世の中を必ず苦として見なさいと。その苦というものは、必ずわたしたちに巻き付いてくると。そして、それは滅することができるし、滅する道があるんだと。どうだ、これは。はっきりしてるだろう。

◉正思惟――縁起の法に即して

では次、正思惟とは何ぞやと。正思惟とは、縁起の法であると。いいかな。縁起の法であるとはどういうことかわかるか。まず、無明というものを根本としていると。わたしたちがコーザルとつながってないということを根本としてると、ね。

そこから行が生じ、識が生じると。行によって識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生・老・死、愁・悲・苦・憂・悩が生じると。そして、この苦を根本として、ね、智慧ある者は信が生じると。信が生じて、修行に入り、クンダリニーの覚醒を行なうと、ね。そして、悦、喜、軽安、楽、三昧、如実知見、遠離、離貪、解脱のプロセスを歩くと。これが、正思惟であると。これについて深く考えること、あるいは苦の内容について深く考えること、四諦について深く考えること、これが正思惟であると。

◉正語――四つの口の戒に沿って

では、正語とは何ぞやと、ね。正語とは、嘘をつかず、真実の言葉を語ると、ね。そして、悪口を言わず、人に優しい言葉を語ると、ね。そして、必要のない言葉を語らず、ね、要件を足すに足る言葉を語ると。互いを和合させる言葉を語り、ね、決して仲たがいさせる言葉を語らないと。いいかな。これが正語であると、ね。正語、正しく語るとよくいわれているけど、その内容はわからないと、ではないんだよ。これは、十戒の中の四つのことを指していると。いいね。

◉正業――精神集中

では、正業とは何ぞやと、ね。これは、瞬間瞬間を、ね、瞬間瞬間というのは、行為の瞬間瞬間を、精神を集中して、ね、生きると。例えば、動作の一挙手一投足にね、精神を集中するわけだ。ね、これが、正業であると。いいかな。じゃあ、この一挙手一投足に精神を集中するということは、一体どういうプラスがあるだろうかと。さあどうだ。わたしたちの成就は、まず第一には何からくるか。精神

集中から生じるラージャ・ヨーガだったね。どうだ。そうすると、一挙手一投足に集中していると、ラージャ・ヨーガの成就は起こるか起きないか。これが正業のもともとの意味合いだ。

◉正命――未来際の平安のために

そして、正命というのは、正しい一生という意味であると。正しい一生とはどういうことかというと、わたしたちのこの生というものは、瞬間かそれとも永遠のものか。もし大いなる生命の流れがあって、その流れの瞬間がこの人間の世界だとするならば、わたしたちは未来際にわたる福のために、この瞬間を利用することは、ね、智者の行為だと思うか、それとも愚者の行為だと思うか。智者の行為だね。よって、この正命の背景にあるものは、この一生というものを、いいかな、その未来際の福のために、未来際の平安のために使おうと、ね。

では、無智、凡夫、愚者はどういうふうに考えると思うか、それに対して。ああ、少しの徳があると。この徳を使って、使い果たしてしまおうと考えないか。

どうだ。智者はどう考えるか。この喜びは高い世界の喜びに比べたら、愚者の喜びであると。そして、今わたし自身は真理に巡り合っていると。そうだな。そしてこの短い期間を、真理に費やすとするならば、少なくとも高い世界へ生まれ変わると。そしてそれだけではなく、涅槃(ねはん)することだってできると。どうだ。そう考え生きる、これが正命だ。だから、この正命の命というのは、生きるという意味があるんだね。いいかな。

◉正精進――正しい努力

そして、わたしたちがこのようにして五つの過程をマスターしたならば、六つ目、正精進。この正精進とは何だ。正しい修行ということになる。ね。つまり、生活規範がしっかりしたならば、その後正しい修行に入っていくわけだね。いいね。

では、この正精進とは何かというと、例えばワーク、これはもう君たちの今のプロセスだ。これは正精進だよ。例えばマントラ、例えば瞑想、このようなもの

に対して精神を集中し、限界まで行なうと、ね。だから、どういうことかというと、精進イコール、努力だと置き換えてよろしい。いいね。だから正しい努力と。つまり、君たちが高い世界へ生まれ変わるための、あるいは神秘的な力をつけるための正しい努力と。これが正精進だ。いいかな。

◉正念——四念処を根本として

じゃ、正念とは何ぞやと。正念というのは、ね、まずオウムの成就というのは小乗から入っていくか、大乗から入っていくか。つまり、四念処(しねんじょ)がね、根本なんだよ。いいかな。四念処とは何かというと、はい、「我が身これ不浄なり」と、ね。男の肉体も女の肉体も、糞尿の製造機であると。それ以外の何ものでもないと。そして、わたしたちは、この肉体があるがために苦しまなければならないと。あるいは、幻影を味わわなければならないと、ね。こんな不浄の肉体が離れなければならないと、ね。よって、この肉体が滅びたとしても、それに対して苦悩を味わう必要はないと。これが、ね、「我が身これ不浄なり」だ。

じゃ、「受は苦なり」とは何だと。すべての感覚器官のお蔭によって、わたしたちは苦楽を味わっていると、ね。そして、楽は楽しいけども苦は苦しいと。そうだな。よって、苦を離れなければならないと。

「心は無常なり」と、ねえ。自分の心の無常さ、これはわかるよね。絶えず心は変化すると。どうだ。そして、自分の心が変化すると同時に、ね、自分の愛するものの心も変化すると、ね。よって、この自分の心の無常さ、あるいは他の心の無常さからも離れなければならないと。

「法は無我なり」と。これは観念そのものが、自分自身ではないと。わかるね。しかしわたしたちは、小さいときから培った観念を自分のものと思い、勘違いすると。じゃあ、その典型は何かといったら、まず現代人の宗教観だ。現代人の価値観だ。これは、十人が十人そう考えているよね、だいたい。どうだ。ということは、わたしたちは他にそういう宗教観、価値観を叩き込まれたと考えていいんじゃないか。どうだ。じゃ、それは何からきているんだ。学校教育、それから雑誌、そして新聞、そしてラジオ、そしてテレビと、ね。あるいは、それを真に受

けている大人たちと。いいかな。
しかし、それはわたしたちを正しい方向に、わたしたちを真理に導くものか導かないものか、ね。よって、「法は無我なり」と。これが正念だ。念というのは何かというと、正しい集中ということになる。つまり、四つを絶えず思うと。集中し続けると。

◉正定——正しい瞑想

そして、それを完全にマスターした後に、正定に入っていくと、ね。正定とは正しい瞑想だね。オウムでは、マントラ瞑想、あるいはツァンダリーの瞑想、グル・ヨーガの瞑想、いろいろあるから、これがこの正定に当たるだろうと、ね。よって、八正道の真の意味とはこういうことだ。理解できたかな。ということは、出家行者である君たちは、この八正道を行じることは？　できるよね。在家行者であるわたしは、この修行を修行することはどうだ。難しい答えだね。
一般の人はどうだ。例えば、奥さんがここにいると。「我が身これ不浄なり」

とね。「ああ、わたしの妻は糞尿の製造機である」と。あるいは、旦那さんを奥さんが見て、「ああ、この人は糞尿の製造機だ」と。家庭はどうなるか。よって、方便が生じるわけだ。方便という意味はわかるかな。方便というのは、要するに、条件に合わせて真理を変えていくんだよ。だから、在家には在家の修行法があると。出家には出家の修行法があると。そして、より厳しい方を採れば採るだけ、解脱は早いか遅いか。わかるね。

はい、全力で頑張りなさい。

一九八九年四月十二日　富士山総本部にて

◆第二話　本質的な苦しみからの脱却の道

「そして死を超越せよ！」

◉第四解脱――喜楽禅

今日は第一回目にも行なったが、なぜわたしたちはこの世に生まれ、転生とはどういうものか、そして、そこから抜け出すためにはどうしたらいいか、それについて話したいと思う。

いわく、『阿含経（あごんきょう）』には、わたしたちがこの世に生まれる根本的因は無明（むみょう）であるといっている。

この無明とは何か。この中で何人か経験があると思うが、サマディの第四段階、歓喜に満ちあふれた解脱がある。これを、わたしは喜楽禅と呼んでいるね。喜と

楽が一緒にきた瞑想だ。「シャンバラ新聞」（オウム真理教の初期の機関誌）では第四天禅、あるいは第四解脱という書き方をしてある。第四解脱の状態というものは、有我想三昧とも呼ばれ、いいですか、有我想三昧、有るに我がある三昧とも呼ばれ、「わたしはシヴァである」、あるいは「わたしは仏陀である」、こういうことがね、心からわき起こってくるんだ。いいですか。

そして、初めのうちはグリーンのエネルギーが帯状に見えてる、目の前をね。それが徐々に徐々に上方に向かう。そして下方に向かっていく。そのときのグリーンというものは、本当のグリーンだ。つまり青も入ってない。黄色も入ってない。純粋なグリーンだ。そうすると、サハスラーラ・チァクラからね、俗にいわれてるネクターだね、不死の甘露が落ち出す。ポトッ、ポトッとね。そして、それが終了すると、次はその内側がね、真っ黒な、いいですか、本当に汚い色で包まれていることがわかる。そして、その内側が青緑だ。この三重の層がある。これが第四天禅、あるいは第四解脱、喜楽禅といわれているもんだね。

◉無明、イコール無智

それで、なぜここでいきなり第四解脱から入ったか。それはね、その、真っ暗闇、真っ黒い壁、いいですか、それが無明なんだ。よく言ったものだとわたしは思っている。なぜか。その無明の中に入っているときは真っ暗だから。だから無明なんだよ。あなた方が読んでいる本の中で、こういうことが書いてあるだろう。無明、イコール無智。無智とは仏教の本質を知らないこと、あるいは魂の本質を知らないことと書かれている。しかし、実際はそうじゃない。無明は無明だ。見えないから無明なんだよ。いいか。そして、この無明の中に入っているとき、わたしたちは無智だ。何もわからない。それはなぜか。

ここにあなたがいて、ピラミッド好きか、あなた。

(信徒) ええ。あの、嫌いじゃありません。

あなたをピラミッドの中に入れたとしよう。わたしは興味ないけどね。そうするとね、彼は外側は見えない。見えないだろ。

(信徒) ええ。

だから無智なんだ。外側の世界が見えない、内側の世界も暗いから見えない。だから無智なんだ。わかるか。それが有我想三昧の状態、歓喜禅の状態だ。いいか。で、大切なことはここだ。それを、まず釈迦牟尼如来は根本とすると言っていらっしゃる。それはなぜか。その内側にあるのは真我しかないからだ。正確にいうとね、真我と連動しているエレメントがあります。それは、神素と訳しているけどもね、普通は。それしかないからだ。つまり、もし彼が、わたしはピラミッドが嫌いだと、ピラミッドを自分でぶっ壊したとしよう。そこには真我しかない。そして、そこは光である。慣れない人間には、初めにね、黄金色に見えてくる。いいか。これは、わたししか知らないことだよ。ちゃんとメモしておいて。次に白銀色、そしてミックスされて黄色が見えてくる。いいですか。

その真我だけの状態になったとき、あなたは本当の幸福に至ることができる。そしてそのとき、すべては四つの流れによって動いてることを知る。それは、どんな綺麗な服も、いいですか、綺麗な服というのは先程のピラミッドだ。どんな綺麗な服も、輝いてる服も、一切は苦だ。つまり、この世の中すべてが一切が苦

である。苦というのは何か。安定していない、そして不安の材料だということだ。そしてね、次に気付くのは、それは、わたしもあなたもあなたもみんな生起する、起き上がる、いいですか。そして、その起き上がった苦というものは、ま、起き上がったものは必ず倒れる。それと同じように倒すことができる。つまり、滅尽することができるんだね。滅することができる。そして、それは正しい八支の道を歩けば、滅尽が可能だということに気付く。

◉一切は苦である

ではね、その八支の道とは何か。よくみんな知っている言葉だ。八正道、知ってるか。

（弟子）ええ、一応読んだことありますけど覚えてません。

覚えてないか。知ってる人、だれか言ってごらん。八正道とは？　はい、言いなさい。

（弟子）よくわかりません。

いいからいいから、気にしないでいいから。あとは、わたしが付け足す。はい。

（弟子）正見、正語、正業、えー正精進、正命、正念、正定で、あと一つ……。

正思惟。

（弟子）正シンでしたっけ。

正思惟ね。正しい思索。それで八つ。これを実践することによって、苦というものを滅することができる。つまり、わたしたちの覆いを取り払うことができると言っているわけだ、釈迦牟尼は。

その一つ一つを詳しく説明してあげよう。

まず正見。正しく見るということだね。これは、一切が苦である。そして、それは触によって生じる。触とは何か。接触のことだ。もしあなた方が接触しなければ、一切の苦は生じない。だから、だれかが困ってる、苦しんでるのを見る、そのとき、あなた方はね、それは触によって生じると理解できるかどうか。これは第一、第二のポイントだ。

それはどういうことか。この森羅万象、一切が苦である。そして、その苦とは

触によって生じる、ね。一切は苦であるという見方が正見だ。そしてそれは、触によって生じる。触とは何ぞや。いわく、わたしたちは十門を持っている。十門って知ってるか。あなた方は九門しかない、わたしは十門持っている。十の門だ。〇、言ってみろ。十の門だ、入り口だ、出口だ。わからないか。

(弟子) わかりません。

まず、目が二つ、耳、これで四つだね。それから鼻、六つ、ね、口、七つ、そして性器と肛門だ。これが九、そして、あなた方が完成すると、サハスラーラ、マハー・ムドラーの門、十門を生じる。わたしたちは、この十門によってエネルギーを吸収したり排泄したりしている。いいですか。

それと意識は連動し、六処をつくる。六処とは、今の十門を言い換えたものだね、目、耳、鼻、口、そして身体、そして意識だね。これを六つ、六処。この六処によって外界と接しているわけだ。どんな事象についても、この六処を抜きにして考えることはできない。いいですか。よく聴きなさい。つまりあなた方が、もしこの六処をだ、外界から一切シャットアウトしたら、あなた方は解脱するだ

ろう、それだけで。だから、バグワンは何もやるなと言っている。ところが現実的には不可能だ、それは。いいですか。まあいい、それは。

それが正思惟、正しい思索だね。一切は苦である、そしてその苦というのは六処を媒体として起きる。これが正しい思索だ。他のことを正思惟とはいわない。そこから出てくる言葉がある。

あるね、アホな僧侶がこういうことを書いていた。正語というのは丁寧な言葉だ。ばかばかしい、違う違う違う、そうではない。あるいは、ある宗教団体の霊能者、これは四十八歳で亡くなっているけどね。こういうことを言っている。正語というのは神の言葉だ。違う違う、一切が違う。

◉八正道——無明を滅するために

では、正語とは何だ。それは法にかなった言葉だ。法とは何だ。いわく、十二縁起にのっとって、いいですか、十二縁起、それを語ることだ、これが正語だ。あるいは、施戒天（せかいてん）を語ることだ、これが正語だ。

いわく、十二縁起とはね、まず無明あり。無明なるがゆえに行が生じる。行生じるがゆえに識が生じる。後で質問しなさいよ、メモとっといて。識生じるがゆえに名色が生じる。名色生じるがゆえに六処が生じる。六処生じるがゆえに触が生じる。触生じるがゆえに受が生じる。これは感覚だね。あるいはイマジネーションだ。感覚、イマジネーションが生じるがゆえに愛着が生じる。そして取著、とらわれる。いいですか。とらわれるがゆえに、三界、欲界、色界、無色界に生まれ変わる。それによって、わたしたちはボディを持つ。これが生だ。生まれたがゆえにわたしたちは苦を持つね。それを、苦を、『阿含経』では心の問題、そして老化と病気、死、これをいっている。これが十二だ。まず第一に、これが語れるかだ。

あるいはもう一つ、この世に執着している凡夫は——いいですか、これは在家のことをいう——そんなに修行ね、修行ばっかり、一日十七時間も二十時間もできない。だから最低二時間ぐらい瞑想しろ、まず。それが第一だ。そして、五戒を守りなさい。五戒とは、殺生、偸盗、ね、言い換えよう、人、生き物を痛め

付けるなかれ、盗むなかれ、そして愛のないセックスをするなかれ、嘘をつくなかれ、知らない世界のことを言うなかれ、この五つだ。それと、深酒をしてはいけない。できたら飲まない方がいい。そして、仏陀と仏陀の弟子たちと仏陀が説きたもうた法に従いなさいと。それをやることにおいて、あなたは天界へ行けるだろうと。この二つ、この二つを正確に語ること、これが正語だ。他のことを言わない、一切他のことを言わない。いいですか。

そして、修行者たるものは、カルマによって修行者となった。ところがそれは、悪いカルマもまだ残っている。だから、そのカルマに対して正しい見解を持つ。例えばだ、ここに僧侶がいた。修行者がいた。子供がばかにして棒で殴った。そのときにね、「このやろう」というのは正しいカルマに従っているのではない。わたしがここで棒で叩かれたのは、意味もないのに過去世において小さな子供を棒でぶん殴ったカルマだろうと、そう考えなさい。そして、それを実践する。そのことによって、あなた方は正業というものがね、何であるかわかるだろう。それが、正業の実践だ。

そして、正命がくる。正命とは何ぞや。これは、日々の生活の中で、釈迦牟尼が説きたもうた正しい行為がある。いいですか。例えば女性の比丘尼はね、水浴をするときも臀部を出してはいけないとか、決まりがあるわけだ。あるいは、一日に二度食事をしてはいけないとか。それを実践すること、それが正命だ。

そして、正精進がある。これは何か。これはね、わたしは今全力で修行しているだろうか、絶えずそれを考え、一分でも一秒でも空いた時間、修行すること。それが正精進だ。

そして、正しく思念する。"Who am I ?" だね。わたしとはだれだ。真我とは何だ。解脱とは何だ。ニルヴァーナとは何だ。これが正念だ。

そのすべてが終わると、正しい瞑想に入る。そしてすべてを知ることができる。それが正定だ。いいですか。よく聴きなさい。

いいですか。この八正道を行じることによって、あなた方はこの世というものが苦の世界であることに気付く。そして、この世は一切無意味だということに気付く。いいですか。それによって無明を根本的に滅することができるわけだ。

ところがだよ、今のプロセスというものは漠然としている。今のプロセスというものはね、やり方なんだ、やり方。やり方その一、ものを正しく見ましょう。その二、ものをよく考えましょう。こういうことになるわけだね。

◉上昇のプロセス——解脱へ

じゃあだ、解脱へのプロセスはどうかということになる。わたしは先程、一切が苦であるという話をした。それは、生まれるから苦が生じるという話をした。いいですか。ところがね、もうわたしたちはここに生まれている。苦の中にいる。だから、これはどうしようもない。じゃあ、あきらめるかということになる。

ところがだ、苦あるがゆえにわたしたちは信じることができる。それはだよ、例えばあなたたちが病気をしたとしよう。例えばガンだ。ガンのときは、ガンが治りたいがために必死に医者を信じる。あるいは、医者で治らなければ霊能者、超能力者を信じる。いいですか。つまり、あなた方が本質的にこの世はすべて苦だと気付いたとき、あなた方は、逆にそれを抜け出すために強い信を持つことが

できる。そして強い信を持って修行する。

修行するとね、クンダリニーが覚醒するんだ、ね。これはどんな修行やってもクンダリニーは覚醒します、まともにやっていれば。真剣にやっていれば。いいですか。ではクンダリニーが覚醒した。これを何といっているか、釈迦牟尼は。悦といっている。喜びだ、それは。悦によって何が生じる。喜が生じる。本当の意味で喜びが生じる。悦というのはね、背中をスーッとクンダリニーが上がる、サハスラーラに到着する、いいですか、このとき背骨に快感が走るんだ。これを悦という。

そして喜とは何か、これはね、頭頂から甘露水が落ちてくる、先程言った。ネクターだね、ネクターが落ちてくる。ビンドゥーでもいいだろう。そして、それがアージュニァーを通過して、アージュニァーは何も感じない。ヴィシュッダ、アナハタ、マニプーラ、それからスヴァディスターナね、これを通過する。このときに大変な喜びが生じる。これが喜だ。

この修行を繰り返していることによって、軽安が生じてくる。軽安というの

は何か。身体が非常に軽やかな状態だ。座っていて、あまり体を感じない状態だ。いいですか。

軽安生じるがゆえに、楽が生じるわけだ。座っていること、定に入っていることが大変気持ち良くなる。それはマインドの状態だね、心だね。あるいは魂だ。よくメモしなさいよ。楽が生じたらね、長く座れるから、精神集中もできているから、三昧に入れるんだ。だからそれを、精神集中、精神拡大、それから三昧ね――主体と客体が同一化した状態――これを一緒に三昧とここではいっている、釈迦牟尼は。いいですか。

そうするとね、三昧に入ると、すべての事象がわかるわけだ。例えばここに、今愛している人がいる。その彼女は、ね、過去においてだれかと付き合ってヴァージンじゃない。いいですか。そこであなたが引っかかったとしよう、例えばだよ。そうすると、三昧に入って彼女を見ると、彼女が今まで、いかにたくさんの結婚をしたかわかる。その段階で、そのこだわりはなくなるだろう。ま、三昧に入ったら結婚しないだろうけどね。ちょっとこれは矛盾だけどもね。つまり、それを

如実知見（にょじつちけん）といっている。すべての世界のことを正確に把握する力だと。
すべての世界を正確に把握した段階で、離れることができる。これは苦であって楽ではない、いいですか、これはわたしを本質的には喜ばせるものではない、それに気付く。気付くと貪（むさぼ）りから離れる。わたしは、あした食べる米のお金さえあればいいんじゃないか。別に、一千万も、一億もためる必要はない。そういうことを思い出すようになる。
そうするとね、その状態が解脱なんだよ。一切の覚（かく）がね——覚というのは、この六つの場所が外側と関係しなくなった——例えば、ある人が、お金を持っていれば幸せよと、車も買えてと、ね、それを聞いても何にも感じない。彼女はどうだったこうだった、それを聞いても何にも感じない。つまり情報、インフォメーションというものがね、全く役立たない状態がくる。これが解脱だ。いいですか。
解脱すると、こう思う。わたしは、今まで迷妄の世界に入っていた。だから、わたしは迷妄の世界から出ようと努力した。そして出た。もうわたしには、欲界もない、色界もない、無色界もない、わたしにはニルヴァーナしかない、わたし

の生命は永遠である、わたしは生もなければ死もない、ということになる。これが全プロセスだ。わかりましたか。

◉六道からの脱却――二つのポイント

じゃあだ、転生はどこで行なうか。凡夫の転生は。それは、最も執着しているものが最終ヴィジョンとなって現われる。例えば、あなたが亡くなる、ね。そうするとだ、まず、透明光が射し込んでくる。法界（ほっかい）のエネルギーだ、これは。それに飛び込めば、法界に入れる。ニルヴァーナの一つだ、これは。次は、白透明の色が射し込んでくる。白銀じゃないよ。これは報界（ほうかい）だ。これは供養を受けるに値する世界だ。そして、赤紫の色が入ってくる。これが、応身（おうしん）、つまり変化身（へんげしん）の世界だ。

しかし、普通の人は、あまりにも透明で何が何だかわからない。通り過ぎる。そうするとね、次は、大日如来（だいにちにょらい）を中心とする救済者たちが現われるんだよ。まあ、前半は優しい神様が現われる。それで済度できなければ、後半は恐ろしい形相を

した神様が現われる。いいですか。

それでもし済度できなければだ、次はあなた方がよく知っている六道輪廻（ろくどうりんね）だ。地獄、餓鬼、動物、ね、念仏みたいだね、人間、それから阿修羅、神、これに生まれ変わることになろう。そして、ポイントとなるのは、この六道のことがポイントとなる。なぜかというと、ほとんどの人、この中の八割の人は、そのバルドーに落ちるだろう、おそらく。だから、わたしはここでアドバイスをしておくよ、わたしの経験から。皆さんはよく覚えておきなさい。

まず、あなた方がこの世でね、愛着していた人が現われる。いいですか。その愛着していた人のヴィジョンというのはね、必ずあなた方にとっては人間の形で見える。実際はそうではないよ。そして、それが非常に艶（なま）めかしく見える。そしてその周りには、あなた方の大好きなごちそうが待っている。そして、あなた方が飛び込んだ際の一生のヴィジョンが見えてくる。しかし、それはでたらめだ、実際は。ただ、それに愛着しているとその人の世界には行ける。例えば、その人が動物界にいたら、あなた方は動物となって生まれ変わるだろう。人間界だった

ら、いいですか、人間界となって生まれ変わるだろう。神だったら、神となって生まれ変わるだろう。

そこでだ、じゃあそれから逃げる道はあるか。一つだけある。それはね、まず宗教的なヴィジョンを選びなさい。これは覚えておきなさいよ。宗教的なヴィジョンを選びなさい、まず。なぜか。猫には宗教はない。犬にも宗教はない。一切の動物に宗教はない。餓鬼にもない。地獄にもない。宗教的なヴィジョンがあるのはね、人間界以上だ。いいですか。そして次にね、国土の貧しさ豊かさよりも、人々の安らいだ顔、それを選びなさい。この二つがポイントだ。

あなた方がこのヴィジョンに飛び込むと、たとえだよ、初めにあなた方の好きな人のヴィジョンが出てきても打ち消して、その二つをポイントとして選ぶと、必ずあなた方は人間界以上に生まれ変わる。いいですか。そして、まあ、ある程度、動物から比べるとね、幸せな生活を送ることができるだろう。これがあなた方のバルドーのからくりだ。

一九八六年八月二十六日～九月六日　丹沢・集中セミナーにて

◆第三話　オウム真理教独自の修行システム

「八正道の現代的実践法」

◉苦の根本「無明」を滅せ

話はかわって『阿含経』のことに移ろう。『阿含経』は仏典の一つだよ。その中にこう書かれている。

「この人生というものは一切が苦です。何ゆえに苦が生じたのでしょうか。それは、わたしたちの無明が根本的な原因です。無明とは、真実を理解していないということです。

例えば、愛着。愛着の根というのは大変おいしい。わたしたちを喜ばせてくれます。しかし、これは真実ではありません。怒りというものは、わたしたちを守っ

てくれます。わたしたちのエゴを満足させてくれます。しかし、これは真実ではありません。嘘をついても、そのとき逃れられればとても楽です。しかし、これは真実ではありません。愛欲が生じたとき、だれでもいいからセックスしてしまう。その愛欲は一時的に収まることでしょう。しかし、それは真実ではありません。」

数え上げたらキリがないくらいの真実でないものがある。そして、それを言い換えると無明だといっているんだよ。この無明あるがゆえに、わたしたちは苦しんでいるんだと釈迦牟尼如来は言っているんだ。真実のほどは、あなた方が体験してくださいよ。

じゃあ、その無明を滅するにはどうしたらよろしいかとね。釈迦牟尼如来はこう言っていらっしゃる。

「まず、この世の苦を知りなさい。一切この世は苦であることを知りなさい。」

「苦というものは、わたしたちが生きている限り、粗雑な肉体、微細な肉体を持つ限り、起き上がってくるものです。」

と言っていらっしゃる。いい言葉だねえ、起き上がるというのは、ね。普段は眠っているわけだ、苦はね。しかし、わたしたちが歩いていて、つまり生きていて、けつまずくと起き上がるわけだ。それを苦の生起といっている。そして、
「苦の滅尽を知りなさい。」
と言っていらっしゃる。じゃ、その方法は何かというと、ここで登場するのが八正道なんだね。
しかしねえ、これは在家の修行者では無理だ。この日本の環境では無理だ。でも、あなた方の中で挑戦してみたいという人がいるかもしれないから、一応説いておくよ。いいかな。

◉時代錯誤――八正道

今まで、多くの宗教家が八正道について説いた。そして、これは実践できるものだと言っている。
しかし、わたしはこう思うんだ。ある程度実践できるかもしれないけど、これ

は正確にやることは不可能だ、とね。それは、今から説く八正道の正確な意味合いを考えたらわかるはずだ。

◇正見

まず、第一に正見だ。正しく見る。メモする人はしても構わないよ。この正しく見るというのは何か。これは、すべてのものを縁起の法によって見なさいよ、すべては苦なんですよ、ということだ。

しかし、わたしたちは日本という一つの社会の中で生きているんだよ。生きるためにはお金も稼がなければならない。食べていかなければならない。あるいは、家庭生活を営んでいる人はね、妻や子を慈しまなければならない。そうなると、ここで既に、正見は不可能と見なければならないんじゃないかな。だって、そうだろう、俗世を離れた出家行者だったらいざ知らず、わたしたちは、俗世にどっぷりとつかっているんだから。俗世はすなわち錯覚の世界、誤った世界なんだ。その中にいて、いくら目を凝らしても無駄だと思うよ。

まあ、八正道を説くと言ったんだから、一応苦の生起に触れておこう。苦というものは十二縁起の法によって生起しているんだよ、正見によってそのことに気付きなさいよ、と八正道はいっている。十二縁起の法については前にも説明したけどね、ここでざっと復習するよ。

独存の状態にあった真我は、三グナの干渉によって錯覚を起こし、間違ったプロセスを歩み始めた。そして、コーザル世界、アストラル世界を経験した後、苦界に生まれ出て苦を味わうと、ね。そして、愛着しとらわれて生まれ変わってはいっそう苦を増大させていると。これが縁起の法だったね。

◇正思惟

そして、縁起の法の一つ一つのプロセスを正確に理解する修行、これが正思惟だ。どういう修行かというと、まず、一般的なものや、あなた方の周りの事情を分析しなさいよ、それが正見につながるかどうか分析しなさいよ、と言っている。

そして、次はあなた方の行為、ものの考え方を分析しなさいよ、と言っている。これが正思惟だ。これはできるかもしれない。しかし、この正思惟へと進む前提

条件が正見だから、正見ができなかったらこの正思惟も駄目だということになるね。

◇正語

次は正語。これは以外とやさしい。真実のみを語りなさいよ、とね。優しい言葉を使いなさいよ、とね。

◇正業

そして正業。これは日々の生き方についてだ。一日一日を大切にして努め励めよ、と釈迦牟尼は言っていらっしゃる。しかし、これじゃ漠然としすぎているね。実は、これは仏道修行についていっているんだよ。修行以外はやるなというに等しい。しかし、これも不可能だろうね。

強いてあなた方在家の修行者に当てはめたら、こういうことだろう。仕事は仕方ない。家庭生活の楽しみは最小限に抑えて修行しなさいよ。アーサナ、プラーナーヤーマ、ムドラー、あるいはグル・ヨーガ、ツァンダリーの瞑想、これらを一生懸命やりなさいよ、とね。

なぜなら、人というものはいつ死ぬかわからないんだからね。あした死ぬかもしれない。あさって死ぬかもしれない、ね。しかも、死んだって来世の保証はないんだよ。来世での幸せを願うんだったら、一日一日を大切にして努め励めよ、と、こうなるだろう。

◇正命

正業が日々の生活のことをいっているのに対し、こちらはライフ・ワークだ。一生を通じて真の解脱、真の悟りに目覚めるような生き方をしなさいよ、と言っていらっしゃる。これは出家を意味している。しかしね、これもなかなか難しいよ。わたしたちは働かなければならないんだよ。家庭生活も営まなければならないんだよ。子供を放っておいたら不良化するだろうよ。親を放っておいたら悲しませることになるだろうよ。

しかし、釈迦牟尼は、そういうことはどうでもいい、出家し解脱を目指し励みなさい、一切の執着の根を断って、ただひたすら解脱に邁進しなさい、と言っていらっしゃる。これが正命だ。

◇正念

次は正念ね。これは何か。これはね、出家というものは非常につらかろう。しかし、それにまず耐えて、自分自身に精神集中し、悟りの思いを絶えず持ち続けなさいよ、ということだ。これを正念といっている。これは心のプロセスだ。

◇正精進

正精進が実際のアクションだ。たとえ雨が降ったとしても、このマニプーラ・チァクラの下までしか水がたまらなければ、瞑想をし続けなさい、とかね、ただひたすら瞑想修行に打ち込みなさいよ、ただひたすら正法の流布を実践しなさいよ、といろいろな規定、これが正精進だ。正念と正精進は順番が逆でも差し支えはないよ。

◇正定

最後に正定だ、ね。正定というのは何かというと、正しい瞑想という意味なんだよ。正しい瞑想というのはね、わたしが先程言ったように、一切の潜在意識を止滅させる瞑想だ。死ぬの「死」じゃないよ。止めるの「止」ね。止めてその根

を焼き払ってしまう。この修行を全力でやりなさい、と。これが正定だ。

正見、正思惟、正語、正業、正命、正念、正精進、正定、この八つだ。この八つの実践を八正道といっている。さあ、この日本の社会においてだ、わたしたちが八正道を実践することができるか。できないね、当然。

◉大乗仏教誕生

さて、釈迦牟尼如来が入滅され、その高弟たちが亡くなられた後ね、みんな怠慢になった、ね。仏教の弟子たちは怠慢になったんだよ、アホだから。なぜ怠慢になったかわかるか。

釈迦牟尼と高弟たちはね、素晴らしいスーパー・パワーを持っていらっしゃったんだ。そして、ひたすら修行をし、真理を知っていらっしゃった。それほどに高レベルの人たちだったから多くの信者を持っていた。そのため、それ以外の仏教の修行者も、仏教の名に支えられて困ることもなかった。信じられていたから

ね。そして、まだ修行中で力もないというのにね、ぬるま湯につかったような生活を味わってしまったんだ。だから、本格的に修行をしたことのない怠慢な彼らは、釈迦牟尼の入滅後、ただ教えしか述べることができなくなったわけだね。
「わたしはかように聞いた。ある時世尊（釈迦牟尼）は、サーヴァッティーのジェータ林なるアナータピンディカの園にましました。……」
とね。単に教えしか話すことができなくなってしまったんだ。
一方、ヨーガの源流であるバラ・モン教はだよ、仏教が広まったとき、その勢いに押されてすたれてしまった。しかし、バラモンたちは「これではいけない」ということで昔からあった古いタイプのヨーガを改良し、それを武器として仏教に対抗したんだ。
時代は移り、仏教は今言ったように堕落した。それとは逆に、バラモン教から発達したヨーガは力を持つようになった。だから、「ヨーギ（ヨーガ行者）の方が力がある。わたしたちを高い世界に連れて行ってくれる」と感じた信者たちは、仏教を見捨て出した。僧を見捨て出した、ね。

今度困ったのは、仏教の僧たちだ。これじゃ生きていけないものね。そこで、一部の非常に優秀な僧たちは、それこそ一生懸命に修行をしたわけだよ。そして、信者たちの要求をどうしたら受け入れることができるか考えたわけだ。そうして、最終的に大乗仏教が誕生する。

◉君には六つの極限しかない

大乗仏教には、八正道がない。七科三十七道品もない。しかし、大乗仏教が劣っているとはいえない。なぜなら、六波羅蜜（ろっぱらみつ）があるのだから。これが、わたしがいつもいっている六つの極限の修行だ。この六つの極限の修行の偉大な点は、在家の人たちでも解脱できるプロセスが含まれていることだ。これは、出家できない、特に日本の社会にあって解脱を望む人たちにとって、ぴったりの修行法だといえるだろうね。

中には初心者もいらっしゃるようだから、もう一度ここで六つの極限について触れておこうと思う。

◇布施

まず布施だ。ここで皆こう考えるかもしれない。「どの宗教も布施のことを言うよ。あれは金を集める為の手段じゃないか」と。まあ、そう思って金を集めているところもあるかもしれないよ。しかし、布施の本質的な意味は、物質的なものにこだわらない。あるいは心の安らぎにこだわらない。あるいは間違った観念にこだわらない。これが布施の原義なんだよ、ね。

凡夫というものは、ものに対するこだわり、自己の安定に対するこだわり、あるいは観念に対するこだわりがあるわけだ。だからそこで布施の実践が必要なんだよね、こだわりを消していくために。

だから、例えば全財産を布施できる人、自分が苦しいのに他人に安らぎを与えてあげようと手を差し延べられる人、真理の法を理解して他に真理を説ける人は、別に布施の実践をしなくても、こだわりがないので大丈夫だということになる。

◇持戒

これはグルがね、「これはやってはいけないよ。これをなしなさいよ」と言っ

たことに対して、いつもハイハイと二つ返事ですべてを実行できる人、この人はもう持戒を守る必要はないよ。しかし凡夫は、それを守ることができないから、この修行があるんだ。また、エゴによって、自分の欲求によって、いろんなことを求めるから、ね。それを抑え込むために持戒があるんだよ。いいですか？

◇忍辱

そして三番目の忍辱(にんにく)だ。これも、たとえ身体がちぎれようがね、たとえ血を吐こうが、たとえ死のうがだ、自己の極限に絶えず挑戦している人、この人はもう忍辱波羅蜜を実践する必要はないんだね。これも当たり前のことだよね。

しかし、わたしたちの意志の力は大変弱いから、そこで忍辱波羅蜜の実践が、忍辱の実践が必要となった、ね。

◇精進

最後に精進だ。世事のことと修行とを比較して、絶えず修行の方を採っている人にとってだ、精進波羅蜜というのは必要ではないんだ。しかし、凡夫は修行よりも世事のこと、快楽、こんなものを求める。だから精進波羅蜜が大切なんだよ、

ね。極限の修行が必要なんだよね。

ほら、ここでは在家を否定してないよ。どこに一切を苦と見なさいと言っているか。どこに愛着を捨てなさいと言っているか。持戒はパタンジャリの『ヨーガ・スートラ』を見てごらん。初めに、やってはいけないこととやらなければならないことが書いてあるじゃないか。

忍辱波羅蜜は意志の強化だよ。ラージャ・ヨーガのプロセスと同じだ。そして修行に入りなさいよ。これが精進だ。六波羅蜜では精進の次に瞑想の極限、そして最後にすべてを知る極限がくる。これはヨーガでは精神集中、瞑想、三昧のプロセスと一致している。

このような一致は、仏教とヨーガが歴史上競い合って、互いにいい影響を及ぼしたということだろうね。それだけじゃなく、同じ真理に至る道だから同じになったということもあるだろうね。

◉確信を持て

八正道、七科三十七道品は素晴らしい修行法である、とわたしは思っている。しかし、現代では使えない。使えるわけがないんだよ。例えば八正道の正見。それはわたしたち日本人にとって、正見のマニュアルがないんだ。真理の見方については、わたししか示すことができないだろう。また、この錯覚の世の中にあり、しかも真我がいまだに暗に落ち込んでいっている人にとっては、苦を感じることはできないだろう。楽しいことだっていっぱいあると思ってしまうだろう。正しく見ることなどとてもおぼつかない。

マニュアルがない。正見の実践は自分だけでは不可能だ、となったら、もう既に八正道の第一プロセスで引っかかってしまったことになる。

だからこそ、オウムではわたしたちにぴったりの、独自の修行システムをつくっているんだよ。必ず悟る、解脱するというね、それだけのシステムがオウムにはあるんだ。だから皆さんは確信を持って修行してほしい。

一九八七年四月二十九日〜五月五日　秩父・集中セミナーにて

◆第四話　絶対的な幸福・自由・歓喜のために

「八正道から四諦十二縁起の法へ」

◉三グナの本質――すべては苦

それでは、今日の説法に入りましょう。今日は、四諦十二縁起の法について触れたいと考えています。

この四諦縁起の法というのは、仏陀釈迦牟尼が成道なさったときに発せられた、最も素晴らしいお経、教えの一つであると。この内容は何かというと、この現象界の要素、構成要素三グナ、ね、ラジャス、タマス、サットヴァといわれている三つのエネルギー、このエレメントは、総じて、すべては苦であると、苦に至るための要素であると。

では、なぜ苦に至るための要素なんだと考えたとしようじゃないか、ね。そう

すると、それはどういうことかというと、三苦というものをこの三グナというものは構成しているんだと。はい、三苦というのは何だったっけ。まず第一は、一緒にいこうね、痛みとか心の苦悩とかいう本質的な苦、どうだこれは。そして第二番目は、今まで得ていた楽しみが崩れさるときに生じる苦。そして三番目の苦しみは、そこに、それを得ればすごく楽になる、あるいは幸福になるわけだけど、得ることができなくて生じる苦。求めても、その求めたものが手に入らないという苦。この三つだね。いいですか。そして、その構成要素を三グナはつくっていると、ね。エレメントはつくっていると。いいかな。

よって、ね、まずこの世は苦であるという定義が生じると。そして、真我がニルヴァーナから落下し、その三グナの干渉を受けたと、ね。そして行（ぎょう）――行というのは何かというと、身の行ない、口の行ない、心の行ないといった三つの行だね――この行が形成される、ね。それによって、わたしたちは苦を生起せしめるのだと。生起というのは何かというと、その苦が起き上がってくるんだと。いいかな。

例えば、ここにある人がいて、彼の中に貪りの心が生じたと、ね。そして、自分は優位な立場に立ちたいと考えたと。そうすると、例えば他の人とかとぶつかると、ね。もし貪りの心が生じなければ、他の人とぶつかる必要はないと。わかるかな、これは。よって、その苦の原因を生起せしめたのは、心の働き、身・口・意でいったら、ね、意の働きによって苦悩が生起しているんだと。わかるかな。

そして、君たちの苦悩そのものは、その三つの行ないのどれかの要素によって生じるんだと、ね。そして、当然苦というものは離れることによって、あるいは超えることによって、ね、滅尽することができるんだよと、ね。これをヨーガ的な言葉を使うならば、三グナからの干渉を受けなくすることによって、滅尽はできるんだよと。いいかな、これは。そして、その滅尽をなすための法、それは聖なる八つの正しい道である。これが八正道だと。

◉正見――四諦を根本として

実は昨日、わたしは大阪へ行ってきたわけだ。それは、大阪のポアの集い、あ

るいは凡夫・外道をね、今オウムは多くの人に真理を知ってもらおうと、多くの人に入信していただいて真理を実践していただこうということで、あちこちでいろんな催しをやってるわけだけど、ね、その中の一つポアの集いというのがあって、そこへ行ってきたわけだけど。で、ある人が高橋信次の本をたくさん読んでいたと。で、

「わたしは、高橋信次先生の八正道というものを根本としていきたいと考えている。」

と。

はい、よく聞きなさいよ、これは、君たち。大切なところだから。

「そうですか。ではあなたに質問しよう。あなたは現世において、出家をしないで八正道が行じられると思うか。」

「いや、それは思います。」

「あ、そうか。では、もう一つ質問しましょう。一体、正見とは何ぞや。」

「正しく見るでしょう。」

「そうか。じゃあ、その正しく見るとは何ぞや。」

――沈黙。ね。

でも、この正しく見るというのは、四諦にのっとって見る、これが正見だよね。わかるよね、言っていることは。つまり、この世は苦である。苦は必ず生起すると。そして、それは滅尽することはできるんだと。離れたり超えたりすればと。その超えたり離れたりする道、それが聖なる八つの道であると。いいね。

「じゃあ出家するしかないのか。」

「そうだね。」

そこで頭を抱えたと。面白いね、この人はね。八正道を行じたいといって、それで出家するしかないのかと、頭を抱えたと。ね。

つまり、正見というのは、そのような目で見なさいよということだ。

◉真我の落下――身・口・意のけがれ

じゃあ、正思惟とは何ぞやと。正しく思惟する、正しく思索するとは何ぞやと

いったら、これは、ね、すべてのものというものは、無明から始まり、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生・老・死、愁・悲・苦・憂・悩という苦悩と、ね。そして、苦悩、信、ね、修行、クンダリニーの覚醒、ね、そして、悦、喜、軽安、楽、三昧、如実知見、ね、遠離、離貪、解脱なんですよと。でね、正思惟というのはそのように思索すると、ね。そのように思索する、これが正思惟なんだよ。

じゃあ、何だと。無明とは何ぞやと。無明というのは、わたしたちのこの身・口・意のけがれによって、わたしたちは純粋なわたしたち自身を見ることができなくなっていると。それによって、身・口・意の正しくない行ないが生じると。これはちょうど、ね、けがれた鏡がここにあって、光を正しく反射することができないのと同じであると。あるいはここにレンズがあって、そのレンズが正しく光を通すことができないのと同じであると、ね。これが無明です。そして、行です、ね。

そして、その正しくない身・口・意の行為によって、わたしたちは六つの識、

ね、これは、眼の識、眼識、耳識、ね、それから鼻識、舌識、身識、意識という六つの正しくないデータを放り込まれると、ね。難しいでしょう、結構。小乗の経、『阿含経』といっても、その本質の縁起の法というのはなかなかわかりづらいと。ところが、ね、無智に覆われている現代人は、小乗より大乗が偉いんだといってると。もちろんそのとおりだ。しかし、その大乗はあくまでも、いつも言っているとおり、どうだ、小乗の上に立脚するものでなければならないと。わかるね、言っていることは。ね。

◉正しくないデータ――曇った鏡

そうすると、その正しくないデータによって、わたしたちは名色を形成すると。で、この名色の「名」というのは、五蘊の中の受・想・行・識を表わしていると。そして、「色」というのは四大エレメント、地・水・火・風を表わしていると、ね。これに影響が生じてくるわけだね。その正しくない六識によってだよ。ね。

そして、六処がそれによって感応し出すと、ね。つまり、こちらの受け手側が、

それによって正しくない反応をし出すわけだ。

例えばだよ、ここに、ね、彼がいると。そうすると、彼は人間であって、例えば手足を持っていて、顔があって、顔には目と鼻がついていると。しかし、ある人は美しいと見るだろう。ある人は醜いと見るだろう。ある人は美しくも醜くもないと見るだろう。なぜかといったら、先程言った、もう既に六識の中で正しくない情報が入っていて、それが名色に影響を与え、いいかな、その名色の影響によって六処が動き出すと、ね。

そうすると、わたしたちは外界と接触することによって、これは触だ、ね――その外界との接触の対象物は何かというと、要するにこの現象界、目に対する視覚の対象物と、耳に対する聴覚の対象物と、鼻に対する嗅覚の対象物と、味覚に対する、ね、舌に対する対象物と、それから感触に対する対象物と、それから、わたしたちの意に対するね、つまり心に対する対象物、法だね、観念と、これとぶつかり合うと、ね。

そうすると、もともとはだよ、君たちが成就をすれば、百人中百人、あるいは

千人中千人、同じような目で見ることができるはずだ。それはちょうど、このように表現できると。ここに、ね、鏡があって、百枚の鏡があってだよ、その百枚がピカピカに磨かれたとしようじゃないか。一切の曇りのない状態と。どうだ、ここに物があって、それを同じように映し出すと思うか、違うように映すと思うか。どうだ。同じように写し出すよね。それと同じ状態になるんだよ。その鏡の大きさ小ささは関係ないよね。どうかな。

　ところが、ね、けがれている部分が違うと、あるいは色合いが違うとどうなる。その百枚ともすべてが違うように映し出すよね。わかるかな。そして、ここのところがポイントなんだね。これが先程言った六処の働きと。もう既に、だから見る側に問題があるわけだよ。そうすると、当然接触によって生じた、見られる側との関係というものは、ズレが出ていると。これはOKかな。

　それによって愛着が生じると、ね。それは、ね、この色（しき）に対する、つまりわたしたちの視覚的な対象物に対する愛着であったり、あるいは音に対する愛着であったり、ね、あるいは匂いに対する愛着であったり、ね、あるいは味覚に対する愛

着であったり、あるいは触覚に対する愛着であったり、あるいは観念に対する愛着であったりすると。それが生じるんだと。いいね。

◉四つのとらわれ——有の世界の形成

そして、愛着が生じることによって、次はとらわれるわけだ、ね。例えば、いいかな、この煩悩(ぼんのう)は、ね、この欲望はわたしたちを幸福にしてくれると、ね。いいか。例えば、ね、ここに一個のミカンがあると。このミカンを見て、このミカンはわたしを喜ばせてくれる、このミカンはおいしいと。どうだ。ところが、ある人はこのミカンに対して酸っぱいと。酸っぱいのが嫌いな人は、当然、このミカンはわたしを苦しめると考えると。わかるかな、言っていることは。これが、欲の限界であると、ね。

そして次、例えばここにミカンがあってだよ、ミカンを食べると、例えば体を害するという見解を持っていたとしようと、ね。そうすると、そのミカンを見たときに、これはわたしの食べてはいけないものであるという見解が出てくると。

どうだ。そうすると、それを戒のとらわれ、ね、あるいは禁戒のとらわれといっているると。いいかな。

そして、例えばこの法は素晴らしいと、ね、あるいはこの法は素晴らしくないというとらわれと、ね。これは、どうだ、法のとらわれということになると。

そしてもう一つ、例えば、わたしは正しくて彼は正しくないんだと、ね。例えば、わたしの言っていることは正しくて、彼の言ってることは正しくないんだとか、ね、わたしの行為は正しくて、彼は正しくないんだというとらわれが生じてくる。これは、我見ね、我に対するとらわれといったようなものが生じてくると。

あるいは、ね、単に美しい、美しくないといったようなものに心が縛られる場合もあると、ね。いいかな。そして、このようにとらわれるがゆえに、ね、当然三グナは心の働きによって世界を形成しているわけだから、そのような世界があちこちで形成されていると。これが有の状態であると、ね。有というのは何かというと、ね、実存していないものが実存していると。

◉すべては滅する――老死の苦悩

そして、その有というものは、当然生じて、維持されて、どうなる、滅せられると。わかるよね。そしてその中に、わたしたちはわたしたちのカルマによって生を受けるわけだ。生まれるわけだ。どうだこれは。大変素晴らしいね。ところが、これは有の世界だから、当然、生じ、維持され、滅せられるわけだね。そうするとどうなる。わたしたちは、そこで経験するのは老死であると。わかるね。滅せられる前というのは、必ず破壊されるよね。どうだ。

で、一つここで考えなければならないことは、いいかな、例えば飛行機だって金属疲労で落ちてしまう。よく聞くよね、金属疲労がどうこうって、ね。一見金属というのは、変化しないように見えると。しかし、必ず変化するんだと。あるいはステンレスというのは、久遠に錆びないと、永遠に錆びないといわれていると。しかし錆びると、例えば。

つまり、この世で無常でないものというのはないんだね。半永久的なものというのは、インチキだと思わないか。半永久というのは、絶対的な永久ではないわ

けだから。どうだこれは。そして、この世には半永久という、つまり寿命の長いものは存在するけども、絶対的な滅のないものは存在しないんだと。いいね。よって、老死という苦悩を味わうと、あるいは病という苦悩を味わうと、あるいは生活をしているときに、心に憂いだとか、悲しみだとかね、焦燥感だとか、いろんな心の苦悩を味わうということなんだ。

◉身・口・意の浄化——透明なる世界へ

じゃあ、それを滅するためにはどうしたらいいんだと。生を滅すればいいんだと、ね。つまり、この世に生まれてこなければいいんだと。生を滅するためにはどうしたらいいんだ。有を滅すればいいんだと、ね。有を滅するためにはどうしたらいいんだ。とらわれを滅すればいいんだと。とらわれを滅するためにはどうしたらいいんだ。愛着を滅すればいいんだと。愛着を滅するためにはどうしたらいいんだ。六処を滅すればいいんだと。

そこで、ヨーガの修行者たちは、例えば、ね、五感を滅するプラーナーヤーマ

とかやるわけだね。目を閉じ、耳を閉じ、鼻を閉じて修行を続けるとかね、例えば。これは何かというと、視覚のとらわれ、嗅覚のとらわれ、あるいは、ね、聴覚のとらわれといったものを滅するための一つの修行なんだね、例えば。いいかな。

そして、ね、六処を滅するためにはどうしたらいいんだと、ね。名色を滅すると。名色を滅するためにはと、ね。識を滅すると。識を滅するためには行を滅すると。そして、その行を滅するという、ね、この行を滅するというのは、止めるのではなくて、行を最も清らかな状態に、最もクリアな状態にしてと。で、そこで生じてくるのが八正道なんだよ。あるいは十戒なんだよ、ね。

例えば、殺生をしない、偸盗(ちゅうとう)をしない、邪淫(じゃいん)をしない。これは身の行ないの浄化と。でしょ、ね。あるいは、嘘をつかない、意味のない言葉を話さない、あるいは仲たがいさせる言葉を話さない、悪口を話さないと。これは口の浄化でしょう。心の中に貪(むさぼ)りの心を生じさせない、ね、嫌悪の心を生じさせない、あるいは真理を否定する心を生じさせない。これは、心の浄化でしょう。わかるかな、言っ

ていることは。ね。

そして、それを日々行なうと。その日々行なうための体系が八正道なんだよ。そして、行が滅すれば無明が滅せられる。無明を滅すれば、完全に滅すればね、透明な状態になる。そして透明な状態になったとき、わたしたちは絶対的な幸福、自由、歓喜を得るんだと。なぜならば、すべてのものをありのままに見るからと。これが縁起の法です。

◉小乗の完成――貪・瞋・癡の止滅

じゃあ、その方法論はわかったと。じゃあ、どうしたらいいんだというところに出てくるのが、ね、その苦から信が生じて、修行して、クンダリニーを覚醒させて、ね、そして悦に入って、喜、軽安、楽、三昧と入っていくわけだ。なぜ三昧に入ればいいのかといったら、三昧というのは、この、まず少なくともこの肉体的な働きと、それから口の働きを停止した状態であるからと。そして、すべてを知り、ね、これは如実知見だね、遠離、離貪すると、ね。遠離、離貪すること

によって、心の三つの浄化が起こる。これは何かというと、貪り、無智、ね、それから嫌悪といった三つの感情が完全に止滅すると。そして、三つの感情が完全に止滅した段階で、わたしたちは解脱したんだというわけだ。これが真の意味です。簡単だね。

はい、今日はね、君たちがまず小乗の完成をするために、絶対的な必要な縁起の法について説いた、ね。そして、この教えを君たちが実践するしないはそれは君たちの自由だけども、しかし実践すればそれだけ価値のあることだと。いいですか。

一九八九年四月三日　富士山総本部にて

◆第五話　解脱・悟りへ到達する第一の道

「この道を行けば辟支・独覚に」

◉悟り・解脱、幸福に至る四本の道

今日は、少しね、難しい話をしたいと思います。では一体、その難しい話とは何かというと、あなた方がね、最終の地点に到達するための道しるべの、まあいろいろな道があるわけだけども、それについての詳しい話をしたいと考えているわけです。

まず、悟り、あるいは解脱、あるいは幸福へ至る道といってもいろんな道があると。それを真理では、ね、一応三本の道があると、ね、最終に到達するためには三本の道があると。そして、それ以外に、幸福になるためには別に一本の道を

設けていると。つまり、四本の道を設けているわけだね。

　これはどういうことかというと、まず一般にいわれている辟支とか、あるいは独覚といわれている、個が一生懸命グルについて修行し、そして悟り、解脱していく道と。これが第一のパースであると、ね。次に、第二の道は何かといったら、これは多聞といわれているもので、要するにたくさんの説法を聴き、そしてそれによって真理を悟り、そして解脱していくという道と、ね。この多聞というのは、学僧の道ともいわれていると。そして、もう一つは菩薩の道であると。これは未来において、いつの世かに大乗の仏陀に生まれ変わるための道であると。これが第三の道であると。そして、第四の道は何かといったら、これは天界へ生まれ変わる道であると。そして、この四本の道、これをわたしたちは幸福へ至らせるための四本の道といっている、ね。

　では一体、辟支の道とは何かと、独覚の道とは何かと考えるならば、個が独自の修行によって——まあ独自といっても、もちろんグルは必要だけども——修行によって、心と、それから真我とを解放していく道であると、ね。これには、例

えば、ね、わたしの本をよく読んで学んでいる人は理解できるかもしれないけども、例えば五蘊に対する観想の法とか、あるいは十二縁起の法とか、ね、あるいは七覚支の法とかいわれている、俗にいうところの七科三十七道品の修行であると。しかし、これは出家をしなければできないと。これが第一の道であると。だから、未来において出家を考えている者は、まず、この辟支・独覚の道があるということを理解しなければならない。

そして、第二の道は多聞であると。この多聞とは何かといったら、ね、できるだけグルのそばにいてたくさんの法話を聴き、まあ今ではね、わたしのテープとか、あるいは書籍とか出ているから、これを聴くと。出家修行者に対しては、富士では、まあだいたい月のうち十日くらいね、夜三十分から一時間ぐらいの説法をしているから、それを聴いて、そして何が真理で何が真理でないかということを悟る道と。これが多聞の道であると。

そして、第三番目の菩薩の道、これは在家にいながら、あるいは出家して真理を学びつつ、そして真理のために一生涯を捧げて生きる道と。これが、第三番目

の菩薩の道であると、ね。
そして、第四番目の道は何かといったら、それは天界へ至る道であると。これは、昨日のね、水戸、あるいは横浜でも説いたけども、要するに、三つの布施、それから十の戒めを守り、ね、あとそれに二つ付け加えると。何かというと、粗末な寝床で寝るということと、そして貪りを離れるということ。それから、できるならば一日一食をとると、ね。これをなすならば、楽々と天界へ至ると。
これが、四つの正しい道であると。
はい、これでみんなに質問だけども、今日はこの四つの道の中のどれについて聴きたいと思いますか。どうですか。菩薩の道。他には？ 多聞。他には？ 出家。他には？ うーん。これは分かれてしまったね（笑）。
分かれてしまったということは、時間的制約があるから、表面をサラッと流すしかできないね。ではまず、早口でしゃべろうか。そうすると、大量のデータが入るから（笑）。どうだ。わたしは、早口でしゃべること得意だからね。それとも、ゆっくりと浅くしゃべるか。じゃあ、中間ぐらいでまあ適当にね、ほどほど

でしゃべりましょう。でも、いつもよりはちょっと速いペースでしゃべるようにしましょう。いいね。

◉五蘊から離れよ——辟支の修行

まず、辟支について、ね。まず、わたしたちを構成している身体的な要素といったら五つあると。それは何かというと、色・受・想・行・識であると。色というのは何かというと、肉体、ね。受というのは感覚。それから、想というのは表層意識と。行というのはわたしたちの意志、willであると。それから、識というのはわたしたちのデータ、あるいは意思、意に思うという意思ね。この五つであると。

そして、この五つを我と感ずるからこそ迷いの生を受けるんだと、欲の世界に生まれ変わるんだというのが、この辟支の修行の第一歩であると。よって、五蘊から解放されなければならないと。

ということはだ、例えば在家にいてうまい物を食って「ああ、おいしい」と、

もしこう考えたならば、この人は感覚にとらわれているよね。どうだ。ということは、この人は感覚にとらわれていることによって、解脱はないと。

「ああ、わたしは美しい」と、「わたしは若々しくありたい」と、こう考えている人は、色にとらわれているよね。どうだ。よって、この人に解脱はないと。

あるいは、「ああ、わたしはなんて心の綺麗な生き物なんだろう」と考えていると。これは、ね、表層にとらわれているよね。よって、この人に解脱はないと。

あるいは、いつも自分の意のままに世の中を生きることができると。この人は、行についてとらわれているよね。よって、この人に解脱はないと。そのとおりだね。

では、「なんてわたしは知性に富んでるんだろう。わたしの知識といったら、それは世界のコンピュータを合わせたよりもすごい」と、こう考えている人はどうだ。識について——識というのは意識の識ね——識についてとらわれてるから解脱はないと。

よって、これの、ね、色・受・想・行・識のだよ、まず無常性——無常性とい

うのは何かというと、例えばここに意志があったとして、その意志が達成できないときの苦しみ、ね。あるいは、肉体というものは必ず滅び去っていくものなんだという思い、ね。わかるかな。この、まず無常性について瞑想すると、ね。そして、無常なものは苦であろうか楽であろうかと考えると。どうだ。苦だね。

だから次は、この五蘊について、苦について瞑想すると、ね。そして、真我の定義がだよ、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜と、それから不変という定義があるとするならば、例えばわたしたちの肉体というものは、その条件を満たしているだろうか満たしていないだろうかと。どうだ。満たしていないと。

ということは、実体が本当に存在するんだろうかしないんだろうかと考えたら、どうだ。夢みたいなものだよね。わかるかな。よって、空について考えると、ね。そして、この無常、苦、そして空、これによって、これは果たして我であろうか、あるいは我でなかろうかと考えたら、どうだ。難しくなってきたでしょう、少し。どうだ。絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜を我だとしたら、我ではないよね。よって、無我、あるいは非我について考えると。これが、簡単にいうならば、辟支の

修行であると。

◉八正道――瞑想へのプロセス

ただ、これだけではないよ。ね。もちろん、八正道の正見についても考えなければならないし、ね。例えば、この世の中において、一体無常、これを超えるものはあるんであろうかとか、あるいは、苦しみを超えるものはあるんであろうとか、あるいは、ね、わたしたちに絶対的な幸福をもたらすものがあるんであろうかと考えると。これが、ね、物事を正しく見るという見方だね。

そして、それによって、いやそれは存在しないと。では、なぜ存在しないんだというふうに正しく思索していくと、ね。これが正思惟であると、ね。

そして、わたしたちは縁起の法によって、つまりカルマの法則から脱却することができるかできないか、どうだ。できないとするならば、まず高い世界に生まれ変わらなければならないと。ということは、身(しん)・口(く)・意(い)の三つの行について、ね、正しく思い、正しく語り、そして正しく行じなければならないと。その中の

正しく語ると。人に優しく真実のみを語るという、正語の実践が出てくると、ね。
そして、正しい瞑想生活をするために、瞬間瞬間を精神を集中して生きると、ね。これが正業であると。一日一生という言葉があるけども、これは何かというと、瞬時を全力で、瞬時を集中して生きなさいと。
そして、それは次に、正しい生き方につながると。正しい生き方とは何だ。悪業を積まないで、善業のみを積んで生きる生き方だ、ね。これが正命であると。
そして、ね、この世の中で最も素晴らしいもの、それは何かといったら、修行であると。修行に全力を傾けると。これが正精進であると、ね。
そして最後の二段階、これは辟支仏の根本をなしているものだね。四念処観というものがあると。それは、我が身、わたしの身体は無常で汚いと。だからこの肉体から離れようと、ね。わたしたちの感覚というものは、ね、苦しみの原因であって、決して楽をもたらしてくれないと。だから離れようと、ね。人の心、あるいは我が心というものは絶えず転変すると。だからそこから離れようと、ね。
そして、わたしがわたしだと思っている考え方、観念そのものは、ね、これは、

実際は単なるデータであって、我がものではないと。だからこれにとらわれることは、わたしを苦しめるものであると。だから離れようという四つのプロセス、四つの念処——念というのは思いを凝らすところという意味だね。

そして、最後の正定、正しい瞑想に入っていくわけだね。そして、表層意識を落とし切ったら、次は潜在意識を落とし切って、そして辟支仏となって解脱すると。

ただ、ここでは、負荷がかけられていないんだね、負荷が。負荷というのは何かというと、個が自分の道に沿って歩いていけばいい生き方だから、負荷はかかっていないと。だから、できるだけ人里離れた、例えば富士山の道場みたいなところでね、絶対的な修行環境のもとで修行し、落としていくと。でないとだよ、例えば一方ではデータを消すと、一方ではテレビ、ラジオ、週刊誌、人との会話によってデータを入れているとしたら、どうだ。表層意識、潜在意識は浄化されると思うかされないと思うか。だからここでは、ね、離貪（りとん）、あるいは遠離（おんり）、ね、すべてから離れるということが必要なんだよ。よって、辟支の条件というものは、

絶対的な修行空間でなければ成就しないと。
はい、これで一つ終わった。どうだ。理解できましたか。はい、次いこう。

◉多聞――真理のデータの入れ替え

では、次は多聞だ。多聞というのは、ね、どちらのデータが多いかで決まると。これは何かというと、わたしたちを動かしている原動力というのは、潜在的なデータであると、ね。すると、例えば邪淫に関するデータ、あるいは綺語に関するデータ、あるいは楽しみに関するデータとだよ、修行に関するデータと二つあるとしようと。一方は、ね、わたしたちを三悪趣に生まれ変わらせるためのデータというものは、一日のうちのね、例えば十五時間聞いてると。で、ある人が一生懸命修行して、一日一時間、正しいデータを入れたと。これはどうだ。どちらのデータが勝つと思うか。三悪趣のデータが勝つよね、当然。わかるね。だから、そうではなくてね、徹底的に正しいデータを入れると。一日五時間、八時間、十時間と説法を聴くと、ね。あるいは、いらぬデータを入れないで、その説法のデータ

だけを入れると。

例えば、一時間は現世的なデータと、三時間は修行に関するデータが入ったら、どちらが優位になると思うか。これが、多聞で成功する条件であると。そして、そのたくさんの教えの中から自分に合ったものを選び、一つずつ瞑想していくと。ということは、現代ではどうだ。この多聞というのは？　しづらい。そのとおりだね。これが、第二のわたしたちを幸福にしていく道であると。暗くなるなよ。第二番目に付け加えるならば、これも出家の方が有利だというのはわかるよね。どうだ。

◉菩薩――救済にすべてを捧げる

そうすると、第三番目の道、これは何だと思うか。これは菩薩の道。これは、できるだけ善行を積み、これは現世にいても一応できるよね。そして真理を学び、そしていいことを語りながら、ね、救済のお手伝いをすると、ね。そして、今生では達成できないけども、未来際において必ずや大乗の仏陀として生まれ変わり

たいという発願をなし、例えば身体までをも布施してしまうと。どうだ、この菩薩の道は。これはもちろん、在家でもできないことはないよね。どうだ。仏陀釈迦牟尼の「本生経（ほんじょうきょう）」では、よく妻や子供を布施したという話があるけどね。あるいは自分の肉体を布施したと。

では、オウムの修行システムを見て、マハー・ムドラーの成就後の修行、これはどうだ。自分たちが今まで培ってきたプラーナ、純粋なエネルギー、あるいは心の清らかさと、それから、どうだ、けがれ切っているエネルギー、あるいは心のデータとを入れ替えるという布施を行なってるよね。

で、大乗イコール菩薩の修行と考えたらよろしいから、この四つ目の修行（大乗のヨーガの修行）にね、わたしがなぜシャクティーパットを含めたエネルギー移入を加えたかという意味がわかるよね。それによって一気にステージは落っこちるわけだし、肉体の状態だって悪くなるわけだから、ね。それと同じことを、あなた方が、ね、例えば在家において行なうと、ね。これが、第三番目の菩薩の道であると。で、菩薩は、在家でも出家でもできると。しかし、かなり厳しいも

のがあると、ね。

◉天界に至る道——七つの善行

そして第四番目、これは楽だね、案外。まず、一生懸命三つの布施を行なうと。皆さんは、三つの布施というのは知ってるかな。はい、じゃあ一緒に。財施、安心施、法施。はい、そうだね。そして、十の戒めとは？ 不殺生、不偸盗（ふちゅうとう）、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪（ふけんどん）、不瞋恚（ふしんに）、不邪見（ふじゃけん）というね、十の戒めだね。

で、もう一つ、七つの善行、ね、これは先程も言ったけども、まず、生き物を殺さないで慈しむ、第一。いいかな。第二、人のものを盗まないで施す。そして第三、愛のないセックスをしない、あるいは、夫は妻、妻は夫以外とセックスをしないという、ね。あるいは、精を漏らさないと、厳しくなってくるとね。第四、嘘をつかないと。

第五、一日一食と。はい、なぜ一日一食だと思うか、君たちは。——この話は

イニシエーションと同じくらいの価値があると考えていいよ。――エネルギーを下げる、それもあるかもしれないね。貪りを滅するもあるかもしれないね。しかし、本当の理由は、いいかな、わたしたちが食事をたくさん食べるということは、それだけプラーナを使うと思うか使わないと思うか。ん？　使うよね。ということは、プラーナが欠乏した状態になると思うかならないと思うか。

ものを正しく見る、あるいは神通の源はプラーナを蓄えることなんだね。そして止めることなんです。そして例えば、わたしはコンディションのいいときは、一日にまあ六〇〇カロリーとか七〇〇カロリーで過ごしているけど、その理由というのはね、もうそれだけであとは簡単な瞑想をすれば、呼吸が停止してしまうんだよ。つまり、プラーナを使わなくて済むわけだ。ということはどうなりますか。プラーナを使わないで済むということは、修行の進み具合は非常に速くなるよね。それから心は静止してくるよね。どうだ。よって、一日一食がいいというわけだね。

これは、後世の大乗の修行者は、食事はあまり関係ないと。で、二食、三食と

してきたけども、これには大きな問題があるとわたしは思います。なぜかというと、仏陀釈迦牟尼自体がね、一日三食、これは獣の食事であると、一日二食、これは人間の食事であると、一日一食、これは聖者の食事であると言っていらっしゃるところからわかるとおり、この中には深遠な意味が含まれているわけだね。だから生き物、動物たちはたくさん食べることによって、それを消化することのみにプラーナを使っていると。それは意味がないと、ね。人間は、それよりも少し心を乱さない訓練をするために、二食にすると。そして、聖者は一日一食をとることによって、心は安定すると。で、呼吸は停止すると。いいかな。そういう意味があるから一食がいいんだよと。いいね。

そして第六番目、これは、できるだけ粗末な布団に寝ると。あるいは、在家であっても、できるだけ粗末な生活をすると。これはどうだろうね、わたしたちが欲を満足させればさせるほど、徳はすり減るだろうかすり減らないだろうかと。そして、わたしたちはそんなにいい格好をしなくとも、どうだろうね、生きてはいけるだろうかいけないだろうかと、ね。そしてまあ、経典ではね、これは硬い

布団に寝なさいとなってるんだけど、ね、わたしたちが安楽な布団に寝るということは、それだけ長く睡眠をとることになるんだね。そして心に緊張がなくなり、魔が入りやすくなるわけだ。だから、できるだけ粗末な寝具に寝ると。これが、第六番目の条件であると。

◉貪りを離れよ――エネルギーの純化

そして、第七番目の善行は、いつも貪り、これはね、辟支もそうだし、多聞もそうだけども、喜貪や欲貪をしたら駄目なんだね。喜貪というのは何かというと、貪りを喜ぶと。あるいは、欲を貪るような生き方は駄目なんです。それを絶えず意識しながら、わたしは貪っていないかなと、貪りを喜んではいないかなと、わたしは貪りを喜んでるとしたらそれは無智だなと、それを早く脱却したいなと思いながら貪っていると、そのうちに弱まってくる、貪りというのは。

ところが、「ああ、貪った。幸せだ」とね、「ああ、食った食った。幸せだ」と、「ああ、性欲を満足させた。幸せだ」と、「ああ、わたしは怒りを発散して満足し

たぞ」と。これをなしていると、少しずつ少しずつエネルギーは下降して、あるいはエネルギーはけがれてくるんだよ。いいかな。よって、貪りを離れる訓練をすると。この七つ——そして先程言った、布施、十戒を守る、そして七つの善行を行なうことによって、わたしたちは間違いなく天界へ生まれ変わるんだよ、ね。

じゃあ、君たちに聞こう。天の寿命はどの程度あると思うか。はい、まず第一天界、四天王衆天はどの程度の寿命だと、ね、インド哲学ではいってると思うか。まず、人間の五十年が神々の一日であると。そして五百年生きると。長いねえ。どうだ。次に、三十三天はどうだ。人間の百年が神々の一日であると。そして何年生きるんだ。千年生きると。第三天界の夜摩天(やまてん)は、人間の二百年が神々の一日であると。そして二千年生きると。次の兜率天(とそつてん)は、人間の四百年が神々の一日であると。そして四千年生きると。楽変化天(らくへんげてん)は、人間の八百年が神々の一日であると。そして八千年生きると。他化自在天(たけじざいてん)は、人間の千六百年が神々の一日であると。そして一万六千年生きると。

このどの世界に生まれ変わるかはわからないけども、君たちが先程言った実践

を今日これから行なうならば、間違いなく天界へ生まれ変わるだろうと。どうだ。
　そしてね、これは君たちには絶対に実践してほしくないんだけども、仏陀釈迦牟尼の弟子たちはだよ――エピソードとして伝わっているんだけど――あるとき、お釈迦様がね、弟子たちに説法をしていて、弟子に聞いた。
「なぜ近ごろこんなに弟子が減ってるのか。この弟子たちは在家に帰ったのか。」
「いや、そうではございません。お釈迦様の説法をお聴きになった弟子方は、みんな自殺したんです。そして、神々の世界へ生まれ変わろうと言って。」
　だからあなた方も、わたしは、例えば今日から三年間善行を実践して、その後自殺しようなんていうことは、絶対に考えないように。いいね。しかし、間違いなくオウム真理教の真理の実践を行なっていれば、必ず天の世界へ生まれ変わるでしょう。しかしそれは、真剣にね、実践しなければならないよ。

一九八九年四月二十三日　東京本部にて

◆第六話　八正道と六波羅蜜の共通点

「寂静と観照」

はい、それでは、今日は先に質問を取ろうね、まず。

▼質疑応答

（質問者A）「道相応」についての八正道で、ちょっといろいろと疑問を生じましたので質問します。

そこには、八正道を修習して何度も繰り返して修行するならば、三つの有が断じられると。三つの有というのは、欲有、色有、無色有――これは、欲界の生存、色界の生存、無色界の生存ではないかと思うんですが、それを証知、悟り知って、あまねく知って、あまねく滅尽して、断じることができると書かれてあります。

それでまた、上分結に関しても、やっぱり断じることができると。つまり、小乗のニルヴァーナを断じることができるとそこには書かれているわけで、そうすると、八正道というのは大乗の教えではないかと、そういう気がしてならないのです。

そして、八正道の中を見ると、例えば正念というのは四念処観ですから、大乗の教えがどこにあるのかというのも、ちょっと引っかかっているところなんです。そのへんのところは、ちょっとわたしの推測の範囲を出ないんですが、誤ってる誤ってないを含めて、ちょっとお聞かせ願いたいんですが。

（尊師） まず、Ｖに質問をしたいことがあります。それは、小乗と大乗のどこが違うんだということ。その差異ね、それを聞かせてほしいんだけど。

（質問者Ａ） 単純に、到着地点というか、それで考えたんです。つまり、小乗のニルヴァーナの到着地点ってありますよね。非常に帰ってきやすいというか、不安定なニルヴァーナですけども。八正道というのは、そこを最終の地点にしてるのではなくて、つまりマハーヤーナと、そういう地点を目指しているんではな

いかという感じがしたんです。その小乗と大乗という言い方は、そういう意味の小乗と大乗です。

（尊師） じゃあ、もう一つ質問があります。その最終地点に到達する、当然道のスタート、道の中間があるわけだけど、その差異は何ですか。

（質問者A） まあ、小乗と大乗の差異といったらば、やっぱり、利他ということとなるかと思います。四無量心ですね。

（尊師） では、次に質問があります。八正道の、例えば正見というのは、貪・瞋・癡という三つの煩悩について正しく理解するというか、まあ要するに、それを正しく見つめるということだったと思うんだけども。で、例えば、まあそれは正思惟についてもそうだし、正語についてもそうだし、まあそこで書かれてる一応内容があると。これはいいですね。

で、例えば、まあオウムの言葉を使うならば、二正勤二正断という正業の実践があるとしましょう。で、釈迦牟尼の弟子にはいろんなタイプがいて、即、山にこもって修行するタイプ、あるいは、この現世にいて法を説きながら修行する

タイプ、いろいろいると思うわけだけど。どうだろうか、例えば、山にこもる人にとっての正語というのと、それから山にこもらないで、この現世の生活の中にいて修行を進めていく人たちの正語というのは、同じだろうか違うだろうかという質問についてはどうでしょうか。

（質問者A） はい、違うと思います。

（尊師） ということは、八正道というのは、単なる八つの聖なる、要するにプロセスであって、その中に含まれている言葉一つ一つの意味合いというものを正確に理解し、そして検討しないと、そこで当然誤った見解が出てくるんじゃないかと思うけど、それについてはどうだろうか。

（質問者A） ええ、そのとおりだと思います。

（尊師） 例えば、正念という内容があって、まあそこには、一応四念処が、普通は説かれていると。しかし、その四念処だけではなくて、例えば、それから一歩進めて、例えばまあツァンダリーとか、あるいは大乗のツァンダリーとか、あるいはまあヴァジラヤーナのザンゲになったとしようと。

もともと正念という意味は精神集中だから、その精神集中を正しく行なう、聖なるものに対して正しく行なうということが狙いなわけだよね。そうすると、例えば、その修行を正念といえないこともないと。これについてはどうだろうか。

(質問者A) そのとおりだと思います。

(尊師) だとすると、最後にくる正定についても、当然到達するプロセスが違うんじゃないかと。つまり、道の初め、道の中間、道の終わりがあるわけだけど、もう既に、小乗の歩き方と大乗の歩き方とでは、その歩く道が違うと思うわけだけども、どうだろうか。

(質問者A) はい、そのとおりだと思います。

(尊師) ということは、行法の、例えば八正道イコール、一応はヒナヤーナのプロセスであると説明をしていると。それは、例えば『阿含経(あごんきょう)』に載っている八正道の、しかも今日本で知られてる八正道の説明をするときの、一つの方便であると考える。それについてはどうだろうか。

(質問者A) そのとおりだと思います。

（尊師）現に、例えば十戒の戒めの中に、これは大乗の十戒にしろ、小乗の十戒にしろ、例えば、嘘をついてはいけないとか、悪口を話してはいけないとか、仲たがいをさせる言葉を話してはいけないとか、曖昧な言葉を話してはいけないとか、必要のない言葉を話してはいけないとかいう内容があるわけだよね。これは正語に属すると思う。そうすると、それはヒナヤーナの修行であると、ヒナヤーナの人たちは断定するだろう。ところが、それは大乗の六つの極限のベースにもなっていると。これはどうだろうか。

（質問者A）はい、そのとおりです。

（尊師）ということは、先程も言ったとおり、八正道というのは、単なる修行法の分類、それにすぎないんではないかと考えるけど、それはどうだろうか。

（質問者A）はい、そうです。

（尊師）だとすると、そこで、八正道イコール、ヴァジラヤーナの修行といえないこともないと。あるいは、マハーヤーナの修行といえないこともないと。あるいは、ヒナヤーナの修行といえないこともないと。

要するに、例えばここに、ね、ラーメン屋があって、そのラーメン屋の中で、例えばカレーライスを売っているところもあると。そうだよね。あるいは、うどん屋で、例えばおにぎりを売っているところもあると。そうだよね。でも、その店はラーメン屋であり、うどん屋であると。それと同じように、例えば正見、あるいは正思惟、あるいは正語と、こう一つ一ついくわけだけど、それは単なる、要するに店屋を表わしていると。その中身については、例えば、まあいろんな方便、いろんな比喩によって、若干内容が違うと思うんだね。それはどうだろうか。

（質問者A） はい、そのとおりです。

（尊師） だとすると、八正道が大乗の道であるといえないこともないと。しかし、一般に日本で知られている八正道の内容は、明らかにヒナヤーナの内容であると。これはどうだろうか。

（質問者A） はい。

（尊師） そして法を説くとき、八正道の説明をするならば、まず皆さんの知っている八正道の内容について検討をすると。これはどうだろうか。

（質問者Ａ）　はい、そのとおりです。
（尊師）　納得していただけましたか。
（質問者Ａ）　はい。どうもありがとうございました。

◉八正道と六つの極限における寂静と観照

まず、今日の講話は、寂静（じゃくせい）および観照（かんしょう）についてお話をしたいと思います。

よく経典を読むと、「涅槃（ねはん）」「寂静」「ニルヴァーナ」という言葉が出てきます。そしてもう一つ、「無明欲（むみょうよく）を断じ」という言葉が出てきます。あるいは、これは「無色欲を断じ」という言葉でも置き換えることができます。そして、これが八正道の中の正定、このステージにおいてどんどん純化されていくと。

ところが、大乗の六波羅蜜の修行の中において、五番目の禅定（ぜんじょう）波羅蜜、瞑想の極限、このときに、同じように「止」と「観」、つまり、寂静および観照という言葉が出てきます。ということは、先程Ｖが問うたように、同じなのかと。八正道と、それから六つの極限は、同じなのかという疑問が出てくる。

しかし、この八正道と六つの極限の到達点は、つまり、八正道における一つ一つの課の内容、例えば正見、正思惟、正語、正業という、この一つ一つの課の内容を入れ換えていけば、確かに八正道と六つの極限とは同じ地点に立てるといえないことはないでしょう。しかし日本では、一般的には八正道イコール、ヒナヤーナの教えであると説かれています。

では、その違いは何かというと、要するに八正道の実践は、ぶつ切りの修行ができるんだという特徴があると。そして、例えば沈黙の行を、山にこもり、行なうことにより、正語の実践をする必要がなくなると。つまり、しゃべらないということによって悪業を積まないと。善業も積まないと。そして、正語の実践をそれによって行なうと。そしてニルヴァーナへと至ると。

ところが、六つの極限においては、布施、奉仕という、まずベースがあり、そして、この布施、奉仕のもともとの狙いは、例えば布施というものは、自己の執着を捨てるという寂静の部分と、それから徳を積み光を増すという観照の部分とに分かれることができます。奉仕の場合についても同じで、自己の目的によって

生きるということを捨てるという寂静の部分と、それから徳を積むという、同じように観照を強めるという、二つのパートが存在すると。

ということは、Aを目的にして、例えば結婚願望のために布施を行なう人にとって、寂静を得ることはできないと。そのかわり、光――観照智を増すことはできるといえるでしょう。同じように、奉仕についても、例えば「この奉仕によって何々がかないますように」というような願望を持った場合、当然、寂静の状態を得ることができない。しかし、逆に観照の力、つまり光を増すことはできるでしょう。

これは、十戒についても同じことがいえます。例えば、殺生をしないと。生き物を殺さないがゆえに心は安定すると。そしてその反対に、生き物を慈しむことによって、心の光を増すことができるといえます。

では、偸盗(ちゅうとう)はどうかと。あるいは邪淫(じゃいん)はどうかと。このような形で検討していくと、このすべてが、一つは寂静、心を静めていく働きがあると。そして、もう一つは、観照する働きがあると、光を強める働きがあるということに気付きます。

◉二つの大きな武器

そして、この修行によって、第三段階の意志力強化の修行、そして四段階の修行に邁進する修行、これを達成していく段階において、心は静まり、観照する智慧が増大します。そして、その二つの大きな武器をもって、正定の、あるいは精進、禅定といったプロセスに入っていきます。ということは、もともと布施、あるいは奉仕、あるいは持戒、あるいは意志力の強化、あるいは大きな功徳を積むために流布するというような修行を行なっていない人が、いくら瞑想を行なったとしても、そこには光も存在しないし、あるいは心の静けさも存在しません。

心の静けさと、それから光が存在しない場合、ね、ここに例えば湖があったとして、それがものすごい波を打っていると、かき回されていると。そうすると、湖底の、例えば土、例えば藻、ね、こういうものがうねり、湖底を見ることはできないと。その上に、それを見るための光がないとするならば、どうだろうか君たち、そのものの本質を見極めることができるだろうか。例えば、この湖は湖面には何々が存在していて、湖中には何々が存在していて、湖底には何々が存在し

ているということを理解できるだろうか。

そして、デーヴァに至る神々の修行は、これは阿修羅もそうだけどもね、この欲界の修行というものは、特に高い世界へ生まれ変わるためには、これらの中の寂静を無視し、そして光だけは強いと。ということは、うねりの途上のものを見ることはできるが、最終地点を見ることはできないといえるわけです。

◉目的を認識せよ！

そして、この八正道の修行は、あるいは六つの極限の修行は、最終地点を同じくしていますと言ったのは、その一つ一つの内容そのものが、寂静、そして観照する、光を強めるという点において共通しているからであると。

例えば、わたしたちの根本、これが貪り（むさぼり）・嫌悪・無智といった三つの心の働きであるということが理解できない人がいたとしましょう。もしこの人が、貪り・嫌悪・無智という三つの心の働きというものを理解できないとするならば、例えば二正断二正勤を行ずるとき、何に対してザンゲを行なうのかと、あるいは何に

対して功徳を積むのかということが、当然理解できなくなるはずです。それはどうですか。

同じように、例えば正語、正しくものを語るという場合においても、何のために正しくものを語るのか、あるいは何をもって正しいとするのかということについて、当然理解ができなくなるはずです。これはどうですか。

そして同じように、何のために出家するのかと、何のために修行するのかということについても、その人は曖昧な答えしか出すことができないでしょう。なぜならば、その人はもともと問題というものを持っていないからであると。

つまり、修行の目的というものは、自己の内側に問題があり、その問題に解答を与えるために修行をしているんだという認識がなされていないからである。そしてこれが、下から上昇するための修行をしている人たちのプロセスである。

◉救済者と修行者の違い

では、救済者は何を考えるのだろうかと。救済者は、一応寂静、あるいは観照

の力を得たと。そして、何が実態で何が実態ではないのか、あるいは、何が魂を本当に幸福にさせるもので、何が魂を不幸にさせるものなのかということを十分に知り尽くしていると。そして、他の魂が本当の意味での幸福な道を歩くために生きると。

当然、本当の意味で幸福な道を歩くために生きるわけだから、修行者が涅槃に至る道、あるいは観照する光を強める道と、また違った道を歩かなければならない。なぜならば、それはあなた方もよく知ってのとおり、自分自身の寂静を得るということと、それから周りを寂静の道へ入れていくということは、全く別物だからである。

つまりそれは、修行者の目的は、自分の心を完全に寂静、そして観照する光を強めるということ、これが問題の答えとなってくる。じゃ、その問題とは何かというと、心の本質、貪り・嫌悪・無智といったものを消滅するということ。その答えというのは、寂静、観照する力を強め、如実智見（にょじつちけん）となり、そして遠離（おんり）、離貪（りとん）し、解脱するというプロセスを当然歩くことになると。

では、救済者は何を考えるのかと。一般の人たちがなしている心の貪り・嫌悪・無智から生じるいろいろな口の業、あるいは心の業、あるいは身の業に対して、それをなさないように、そして未来において修行し、その貪り・嫌悪・無智といったものを完全に断じ尽くさせる道筋をつくると。つまり、これが問題である。ということは、当然答えはまた違ってくる。

そして、問題の違うものに対する同じ答えというのは存在しない。ということは、今わたしの中にある世界、わたしの中にある問題、わたしの中にある答えと、それから、今ここで修行を行なってる方々の問題、そしてその答えとでは、おのずと変わってくると。

◉すべては寂静と観照から

そして、あなた方が早く、まず本当の意味での寂静を得、そして光を強め、観照する智を増大するならば、そこで二つの道が分かれてくる。

それは、この世はもともと貪り・嫌悪・無智といった三つの煩悩で構成されて

いる世界だから、この世に存在するということは苦であると。よって、この世から早く離脱し、そして絶対的な自由・幸福・歓喜の空間に自己を置こうと。これがマハー・ニルヴァーナへ至る道である。そして、すべてを完全に知り尽くした人は、一切の煩悩のけがれというものに対して、そこから離脱するだろう。出離するだろう。

逆に、本当の意味での救済、特に四つの無量心を中心とした救済というものが中心となった場合、相手の煩悩を多く受け、そして、その人が近い将来において解脱していく、あるいは修行に入っていく道を選ぶ。ということは、その人は煩悩にまみれる道を選ぶだろうと。

しかし、ここでのポイントは、その人が、これは貪りであると、これは嫌悪であると、これは無智であるということをはっきりと理解し、これは悪業であると、これは善業であるということをはっきりと理解した上で、その行為を行なっているかどうか、その言葉を発しているかどうか、あるいは、その心の働きを生じさせているかどうかということがポイントとなってこよう。

そしてこの道は、先程も述べた、完全にその人が「止」――止まっている状態、寂静の状態、「観」――光が強くて、そのすべてを見通す力を得た状態、この状態に立たなければ、理解できないんだということをここに付け加えておきたい。

そして、オウム真理教の修行は、その六つの極限をベースとし、あなた方の心を止める、そして光を強めることが修行であると。そして、心を止める最も素晴らしい方法、これがヴァジラヤーナのザンゲであるということがいえよう。

破戒をする人、この人はマハーヤーナのコース（当時の直弟子の修行法の一つ）で救済されることはない。なぜならば、この人はもともと煩悩に弱いからである。煩悩の本質を理解していないからである。よって、例えば性欲の戒を破った人、例えばどうしても食欲の戒が守れない人、この人たちはヴァジラヤーナのコースに入り、落とす必要がある。もし、この人たちがマハーヤーナのコースを選ぶならば、いつかつぶれるだろう。そして三悪趣に生まれることは間違いないとわたしはここで断言しましょう。

一九九〇年三月十九日　富士山総本部にて

◆第七話　人間を超え、神の世界、マハー・ニルヴァーナを知れ！

「ベクトルを高い世界へ向けて」

◉身・口・意を使った〝連想ゲーム〟

すごく涼しいね。いや、これぐらいの涼しさだと、裸だとちょっと肌寒いという感じだな。わたしが本栖湖で修行したときは、氷点下一六度とか一七度になっていたから、まあ、これぐらいちょうどいいんじゃないか。ひょっとしたら、それぐらいまでなるかもしれないね。実は、わたしはこういう寒い場所を探していたんだよ。いや、というのは、今日の説法の中にもあるけども、四聖諦と関係あるんだね。四つの絶対的真理と。君たちは無智だから、まあ要するに、温暖な気候を望むかもしれないけど。

君たちは、「修行」という言葉、これをイメージしたならば、一体どのような連想が生じるであろうか。例えば、苦しい。修行？　大変だ。修行？　何のためにあるかわからないと。あるいは、修行？

少し、わたしの修行についてのイメージを話すことにしよう。修行、それは真の楽へ至る道である。そしてそれには、十四の段階があり、その十四の段階のベースとなるものは布施であると。そして持戒と上がっていくと。そしてこの修行の最終地点は、広大無辺、絶対深遠なる心をつくり上げることであると。

そして、それこそが、本当の意味での絶対的歓喜や幸福、自由をもたらすものであると。その途上で生じるいろいろな苦しみは、修行によって生じる苦しみではなく、それは自分自身が本来内在している苦しみであると。よって、修行によって落とすということは、その修行のメリット、プラスそこでのカルマが落ちるわけだから、両方のメリットがあると。ところが、例えばこれを君たちに質問する、あるいは外道、凡夫に質問すると、一体どのような答えが返ってくるだろうかと。

そして、これが生起なのである。

では、別のイメージゲームをしよう。例えば「本」と。君たちは、何をイメージするだろうか。例えば、スパイもの、マンガ、雑誌、あるいはアニメの本、あるいはグルメの本、あるいはセックスに関する本、あるいは、専門職の人は、専門職の、例えば機械の本や建築の本といったものをイメージするだろう。わたしの場合、本というと要するに経典、しかも、その経典は解脱へ至るための経典、あるいは解脱を補助するための経典ということになる。これが生起なのである。

では、もっと別のものを連想してみよう。例えば「自由」。君たちは、いろんなことがわがまま勝手にできるということを連想するであろう。例えば、自由のためにはお金が必要だし、自由のためには、そうだね、時間が必要だし、自由のためには空間が必要であると。ところが、わたしにとっての自由というのは何かというと、一切のわたしを束縛するものから自由でありたいと。その束縛というものは外的束縛ではなく、内的束縛である。

例えばどういうことかというと、目の前に食べ物があると。その食べ物を見て心が動くと。心が動くということはその食べ物に支配されているわけである。あ

るいは、目の前に異性がいると。異性がいることによって心が動くと。心が動くということは異性に支配されているわけである。いや正確な言い方をするならば、食べ物や異性というものを使った悪魔に支配されているわけである。そういったものから完全に自由になりたいと。これが、わたしにとっての自由である。

ではなぜ、一つ一つの言葉において、その連想される意味合いというものが違うのであろうかと。それがカルマなのである。そして、それが来世を決定するのである。そしてそれが、今生を決定するのであると。つまり、わたしたちの瞑想というものは、その連想ゲームを、身(しん)・口(く)・意(い)を使った連想ゲームを完璧に高い世界へと移行させる、完璧にベクトルを高い世界へと向かわせることが狙いなのである。

では、一つ一つ分析してみようじゃないか。その典型的な例は、先程言った十四の徹底、あるいは八つの聖なる実践方法。まあ、君たちは十四の徹底についてあまり詳しくないだろうから、ここで『マハーヤーナ』でも取り上げた八つの聖なる実践方法、一般には八正道といわれてるものを検討してみよう。

◉高い世界への修行法

まず、正見解。この正見解とは何かというと、正しい見解を持つと。正しい見解を持つとはどういうことかというと、この世の諸行はすべて苦であると。ここでいう苦というのは何かというと、死を超越できないものであるというふうに考えなさいと。これが正見解の根本であると。ということは、この正見解ということを聞いたときに、あるいは考えたときに、即座にその思いが出てくるかどうかであると。あるいは、そういう思いで現象を見ることができるかどうかであると。つまり、現世的なものの見方ではなくて、出家修行者として、あるいは真理の実践者としての目で、ものを見ているかということである。

そしてそれにのっとり、次は思索すると。この思索は、例えばこれは殺生に当たらないだろうか、これは偸盗に当たらないだろうか、これは邪淫に当たらないだろうかと思索すると。ということは、この正思惟の実践過程は、心における殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れといったバックボーンを完成していく道である。当然、心が殺生、偸盗、邪淫から遠離するわけだから、行為においても、

殺生、偸盗、邪淫から遠離することになる。

では、次の正語はどうであろうか。これは妄語・綺語・悪口・両舌という口の四つのカルマを離れ、心に真実を語り、真理を語り、そして優しい言葉を語り、和合させるような言葉を語り、必要のない言葉を語らないという実践過程である。これはまさに、デーヴァ界の神々、あるいは梵天界（ぼんてんかい）の神々の言葉である。だとするならば、これは同じように、高い世界へと移行する言葉の統御をすることになる。

では、次の正しい生活、この正しい生活とは何であろうかと。これは、勤精進（ごんしょうじん）をするということである。勤精進とは何かというと、日々の生活において、とにかく必要でないことをやめ、そして七覚支の実践を行なうと。覚支の目的は、もともと仏陀に至るための道であるから、当然これも高い世界へのベクトルを表わすことになると。

では次の、正しい行為とは何であろうかと。これは、まずグルに対する絶対的帰依の修行、あるいは真理に対する絶対的帰依の修行、あるいはサンガに対する

絶対的帰依の修行、あるいは、生き物を殺さないで慈しむと、偸盗しないで布施の実践を行なうと、そして、邪淫を離れ、人と親和するといった実践であると。ということは、これは何の世界を表わしているかというと、当然梵天の世界を表わしてると。ということは、これもまさにベクトルを梵天界へ向けた修行法ということになる。

◉善法を増大させ、悪業を断じる

では、次は正二正勤二正断ということになる。これは何かというと、今なしている善法を増大をさせ、そして、今まだ実践できない善法を増大させることができるように思念すると。例えば、例を挙げるならば、これは詞の修行がある。詞というのは何かというと、あなた方が唱えている詞章のことである。例えば、その中にはマントラも含まれていると。今帰依マントラを唱えている人が、その帰依マントラを、一日例えば三千回唱えてる人が、一万回、二万回と唱えるように努力すると、ね。これが、今なしている善法を増大させるということである。そ

して、この今帰依マントラ、ヒナヤーナの帰依マントラをなしている人が、例えば、次の大乗の発願を二週間で終らせるぞ、十日で終らせるぞ、早く今の帰依マントラを終わり、次は大乗の発願の詞に入ろうと。これが、善法を増大させるということである。今なしてない善法を増大させるということである。

そして、今なしている悪業、これを滅すると。これは例えば、ドンブリ飯をたらふく食って、その他にいろんなものに食い物に心が動くと。これを例えば、少しずつでもやめると、ね。そして、十の戒め、あるいは三つの布施に対してできてない部分を検討し、できるだけできるように努力すると、ね。これが、今なしている悪業を断ずるということである。

そして、未来おいて生じるかもしれない悪業を断ずるとはどういうことかというと、例えばステージが高くなり、慢に陥り、プライドに支配され、グルの意思がわからなくなり、結局真理から逸脱するような、そういう心の働きが生じる、ね、例えば先輩を見ると。先達を見た場合、その先達を恥じると。そして、それは自己の内側にあるプライドに対する教師であると見つめ、そして、そういう行

為が起きないように、例えば努力すると。

これが二正勤二正断である。ということはこれも、当然カルマの統御となるわけだから、そして功徳が増大するわけだから、高い世界へのベクトルということになる。

◉最高のデータの入れ替え

では、次の正記憶修習とは一体何であろうかと。これは、例えば経典を徹底的に記憶すると。そして、それを何度も何度も繰り返すと。あるいは、少し複雑な思索を何度も何度も繰り返すと。ということは、これは智慧の増大、そして思索の発達ということになるわけだから、これは他の日本仏教と違い、オウム真理教の教えでは知性の優秀性というのは、高い世界への転生の条件となっている。それは当然である。動物と例えば人間を比較したらどうであろうかと。あるいは、餓鬼のカルマを持っているアフリカの難民と今の日本人との知性を比較したらどうであろうかと。歴然としていると。つまり、この知性というものは徳の現われ

であると。ということは、この今の人間のレベル以上の思索の力、智慧の力を有するということは、これも同じように、ベクトルを戯忘天界、あるいは梵天界へと向ける道であると。

そして最後の正サマディ、この正サマディとは、完璧に人間を超え、神の世界を知り、そして梵天界の世界を知り、ニルヴァーナを知り、マハー・ニルヴァーナを知るということになるから、これもまさに上方へ向かったベクトルということになる。ということは、例えばこの聖なる八支の道、これはまさに最高のデータの入れ替えということになると。

◉成就――その意味合い

実は、わたしは去年から、野球のイメージがずいぶんと出てきている。例えば、勝手に足が上がってピッチングフォームのまねをしたりとか、手首の返しがどうこうとかいうデータが出てきたりとか。まあ、近ごろはかなり収まってきているけども。それは何かというと、よく考えてみると、わたしは野球というものを成

就しているわけだね。それは小学校一年生から始まって、例えば野球を聴く、あるいは自分でやるといったようなことが約二十年間続いたと。平均三時間それに費やしたとして、二万時間以上の時間を、要するに野球という身・口・意の行為によって瞑想しているわけである。

では、一つの瞑想で、わたしは二万時間達成したものがあるであろうかと。それはまだないと、今生ではね。ということは、わたしが最も、人間として生まれて成就したものは何かといったら、野球であると。そしてそれが、どんどんどんどん瞑想が深まって、深い深い潜在意識にデータとして根付いてると。

実は、わたしが今死んだ場合、わたしは人間の世界か阿修羅の世界へ転生することになっている。そして、わたしが人間の世界へ転生したら、来世は巨人軍のエースとして登場することになってる。いやそうなんだよ、これは。そのときの顔がどういう顔であるかまで、しっかりとわたしは覚えています。まさに情けないと。阿修羅の世界へ生まれ変わったら、修行者として、そして王として君臨するようになるだろう。これが成就なんだよ。

そして、わたしはそれを知ったとき、しまったと思った。これは、今のその野球のデータ以上に、人間界へ転生するときも、修行者として転生するためにデータの入れ替えをしなければならないと。つまり、人間、転生となったとき何が生起するのかと、野球じゃしょうがないと。まあ、一つの瞑想を二万時間する必要はないから、とにかく瞑想のトータルをもっと多くの時間、例えば三万時間、四万時間、五万時間とやらなければ、これは勝てないなと考えました。

今日、わたしが話したかったことは何かというと、ちょっと難しい話だけど、すべてはあなた方の内側にあるものが生起するんだと。例えば、わたしは今日、ね、下はパンツとこのクルタと。上はジャケットとクルタとTシャツと。で、まあ外を少し歩いたわけだけど、大変涼しい気持ちいい空間であったと。ところが、君たちは寒い寒いというデータがあると。これも同じように、例えば氷点下何度に対して心がどう動くかということなんだね。

つまり、自分の内側にあるデータしか生起しないんだということだ。そして、その内側のデータを、苦しみから楽しみに、苦しみから楽に転化していくことが

修行なんだよ。そして、それを達成することができるのは修行しかないんだよ。そして君たちはその絶好のチャンスを得てるんだよ。これが今日、わたしが君たちに話したかったことだ。

◉驚くべき布施の効果

最後に、布施の重要性、これについて一つお話をしましょう。実は、Tのお父さんが大ケガをなさったと。これはどういうことかというと、仙台支部のわたしの説法会に、まあ、あまり信のない信徒が四人来たと。その中の一人がお父さんであったと。そして、まあわたしはそのお父さんと、それからもう一人の女性にね、布施を勧めたと。でまあ、お父さんは、その日仙台支部に干し柿を持ってきてたわけだけど、それを祭壇に上げようかどうかということを聞かれて、いや、それはわたしが受けようと言って、わたしが車の中に乗せて、まあ東京本部の方に運んだわけだけど、その途上、十一時ごろ、いきなりわたしの心臓と呼吸が停止して、バルドーに放り出されたんだね。そのバルドーが性欲のバルドーであっ

たと。

で、それから東京本部に着いてだったかな、着く前だったかな、多分着く前だね、自動車電話に電話があって、その四名が事故に遭って三人が即死と。そしてお父さんだけが重体だね。で、即、Tに電話をして、お父さんのところにウパーリと一緒に行かせたわけだけど、意識がまだあまりはっきりしないと。

で、わたしは欲如意足を聞かせなさいといって、欲如意足を聞かせたわけだ。その理由というのは何かというと、どうも死にかかっている人に欲如意足聞かせると効果があるんだね。例えば、名古屋の信徒のガンの末期の人で、もう死にかかって駄目だと言われた人に欲如意足を聞かせたら、それから復活して、まあ、完全かどうかわからないけども意識はかなり戻っているとかね。その今回のTの例もそうであると。で、それと同時に、即、お母さんが布施したわけだけども、そういうことがあって、お父さんの意識は戻ってきているんだね。

つまり何を言いたいかというと、布施というのはそれだけ効果があるんだということ。それから、修行というのはそれだけ効果があるんだということだね。わ

かるね。そして、君たちはより強烈なデータを入れているわけだから、事故に遭っても死なないはず。ところが、近ごろ事故があってケガをする人が出てきているけど、その人たちは修行してないんだとわたしは思います。わかるね。修行したら、死なないし、ケガをしないはずです。いいね。

◉まず土台から

今日から布施、持戒の徹底を行ない、クンダリニー・ヨーガの成就をしている者はマハー・ムドラーに向かって全力で進みなさい。いいね。それから、ラージャ・ヨーガの者はクンダリニー・ヨーガに向かって全力で進みなさい。いいね。それから、まだ成就していない者はラージャ・ヨーガに向かって全力で進みなさい。いいね。

じゃあ、戒が守れない場合は、どうしたらいいんだと。それは守る必要はないと。また、妙なこと言い出したね。そのときには、わたしが信徒に対して説法している八つの功徳の順番でいきなさいと。

それは何かというと、まずグルに対する帰依、これを実践しなさい。グルに対する帰依とは何かというと、要するにグルの言っていることを徹底的に実践するということだ。それができたら、次は真理に対する帰依。これは、真理に対する帰依とは何かといったら、要するに教学をし、そして法施をするということだね。真理を広めるということだ。それができたら、次はサンガに対する帰依。サンガに対する帰依とは何かといったら、このサンガをできるだけ良くしようと、そして多くの成就者を出そうと、そして、ね、布施、あるいはアドバイスその他の多くの功徳を積もうと。これがサンガに対する帰依である。この順番で進めていくと。

そして次は、殺生をしない、偸盗をしないと。ここまでくると、みんなが引っかかっている、例えば邪淫も乗り越えられる。邪淫が乗り越えられると、次は妄語が乗り越えられる。妄語が乗り越えられると、酒やタバコが乗り越えられるということになる。

ここで面白いと思うだろ。なぜ、例えば邪淫をしないと妄語が乗り越えられる

かわかるか、君たちは。妄語というものは、心が弱い状態で生じる嘘じゃないか。どうだ。じゃあ、性エネルギーを保全して、そして、まあ帰依がしっかりできていれば、エネルギーは上昇し、エネルギッシュになるだろ。どうだ。そのときに嘘をつきたいと思うだろうか。どうだ。ということなんだよ。一つ一つはそういう流れになっているんだね。よって、できないときには土台から固めなさいと。いいね。

一九九〇年十二月二十六日　阿蘇・シャンバラ精舎にて

◆第八話　本当の意味での幸福を

「八正道と四無量心のすべて」

◉心をさいなます幻影

人の心というものは、幻影にさいなまれている。この幻影というのは、一体どういうことかというと、自己の目的、自己の利益というものと相反する方向にベクトルの向きをつくってしまうということである。そして、そのベクトルの向きを本当の意味で自分自身のために向けること、それが八つの実践、そして四無量心である。

スタートから、いきなり抽象的な話になってしまった。もっとこれを具体的に表現したいと思う。

まず、人はだれでも幸福にありたいと考える。そして、その幸福という意味合いは、チァクラの示す煩悩の満足度で決まる。そして、その煩悩を満足させるための心の働きは、自己の利益と相反する方向へ現象を動かせてしまう。
例えば、おいしいものを食べたいと、たくさん食べたいと考える者がここにいたとしよう。この者は、初めのうちはおいしいものを食べ、そしてたくさん食べるという行為に走ったと。ところが、この味覚というものは、年齢とともに退化し、そして、そのおいしさを味わうことができなくなる。ところが、もしこの魂が自分のおいしいと欲するものを布施したとしよう。すると、布施された対象の喜びの感覚がその布施した者の心に伝わり、そして布施した者の味覚は倍増し、人の味わえないようなおいしさを味わうことができるはずである。
例えばこれは、「ガティーカーラ経」というお経、これは『南伝大蔵経』の「中部経典」に入っている内容の中にもあるが、ずっとずっと以前に登場したカッサパ仏を供養したガティーカーラは、そのカッサパ仏に対して供養した功徳によって、二週間、歓喜の状態にあったといわれる。

では、量についてはどうだろうか。これも同じように量をたくさん食べるということは、ひたすら胃袋が下がり、そして下垂し、大量に食べないといられなくなる。つまり、それは、初めの段階では少しで満足した胃袋が、大量に量を放り込まないと耐えられないという状態なのである。もし、この大量の食糧の一部でも布施をするならば、その人の胃袋は死ぬまで健全な状態であり、ある一定の状態で満足を覚えることができるはずである。皆さんも知ってのとおり、この胃の下垂というのは、例えば副腎を圧迫したり、あるいは下腹部臓器を圧迫することにより、いろいろな病の原因ともなる。

◉自己の利益を離れよ

科学的に見ると、仏教の教えというものは、人を絶対的に幸福にする教えということができる。それは、自己の利益、この自己の利益を離れることにより、本当の意味では、自己に利益が還元されるんだということの教えでもある。

例えば、性欲の例を採ってみよう。本来、男性にしろ、女性にしろ、長い性的

快感を味わいたいと願望する。そして、その満足を得るために、いろいろなエロティックな本、あるいはビデオ等で情報を入れる。ところが、心はもう既にそこで頂点に達しているから、実際の交わりでは性的感覚を味わうことができない。もし、これが逆に真理の実践をし、徳を積み、そして、そういうデータのない状態で、本当に執着する異性と交わり、性的な行為を行なったならば、それは当然、現代の人の感じる何倍、何十倍といったような性的エクスタシーを感じることができるはずである。

つまり、これも、皆さんが求めている楽しみというものと、実際皆さんが行なっている実践というものとの間に、大きな隔たりがあることを表わしている。

◉嫌悪――悪魔の使い手

では、嫌悪はどうであろうか。本来人間というものは、人と、特に愛する人たちと交わり、楽しみ、そして語らい、それを喜びと考えるはずである。しかし、嫌悪の情は、自己の心を閉鎖し、そして、いいことにつけ、悪いことにつけ、ブ

ロックすると。そして、この嫌悪の念が強くなると、相手の優しさ、あるいは、あるいは相手の暖かさというものが伝わらなくなり、すべてが自分を痛め付けてるといったような被害妄想的な心の働きになり、結局自分自身を孤立させ、不幸にしてしまう。

もし、法をしっかりと学び、人の話をよく聞き、受け入れようとするならば、そのようなことはないはずである。そして、絶えず人の良さを学ぶことにより、心は成熟するはずである。つまり、この嫌悪こそ、悪魔の使い手といわざるを得ない。なぜならば、この嫌悪は、わたしたちが本来他の魂から学ばなければならない多くの利益というものを阻害するからである。

ということは、食欲、あるいは性欲、あるいは嫌悪といったもの、これらはすべて、わたしたちがこの修習をし、実践することにより、何の利益も与えず、逆にマイナスの方向に向かうんだなということが理解できるはずである。

◉愛着の思わぬ欠点

次は、アナハタ・チァクラに対する、愛着はどうであろうか。愛着というものは、自己と縁の深い者に対して、その者を独占し、そしてその独占する対象、この独占する対象にいろいろ近付いてくる者に対して、それを排斥したいと願う、つまり嫌悪とも絡んでくるが、そういう感情の働きを持たせる心の働きである。この愛着は、もっともっとその魂と親しくなりたい、もっともっとその魂を知りたい、もっともっとその魂と接したいというような心の働きが生じている。そして、それを根本として生起した心の働きが愛着である。

ところが、その愛着は、先程も述べたように、その愛着する対象と他とを区別する、あるいは、その愛着する対象を独占したいと思う心の働きによって、その愛着する対象に対して逆にいろいろな圧力をかける形になる。これはちょうど舟を岸に着けたいと考えていて、竿で舟を押すようなものである。つまり、力を強く入れれば入れるほど、舟は遠のいてしまう。

本来、一つ一つの魂というものは、自由でなければならない。ということは、

その自由を尊重されてこそ、本当の意味での和合というものが成立するはずである。ところが、例えば親子関係において、例えば兄弟関係において、例えば夫婦関係において、例えば友人関係において、この愛着のディフェクトというもの、欠点というものに陥りがちである。よくこれについては気を付けなければならない。

◉権力——その衣を脱ぎ捨てたとき

では、次に、権力に対する指向とはどうであろうかと。わたしたちの権力に対する思いは限りない。なぜならば、その権力というものは、権力によって多くのものを満たしてくれる。しかし、この権力は、わたしたちの着ている服にたとえることができる。つまり、これは、いつまでもその座に就くことができないということなのである。例えば、生まれ、王子として成長し、王様となり、死んでいくと。しかし、死んだときには、この王様という衣を脱ぎ捨てなければならない。その王様という衣を脱ぎ捨てたとき、果たしてその人が平常心でいられるかどうか。つまり、権力という乗り物を使わないでその人が幸福でいられるかどうかと

いうこと、これが最も大切なことなのである。

そして、権力とは衣であるということを、権力というものは乗り物であるということを理解したならば、その権力は、すべての衆生を利する最高の衣、あるいは最高の乗り物ということになるであろう。しかし、その権力と自分自身、服と自分自身、あるいは乗り物と自分自身とを同一であると考えるならば、この人はまさに死というものを直前にし、あるいはその権力から追われたとき、その苦しみは計り知れないものになるであろう。

それはちょうど、別の表現で表わすことができる。大変な寒冷地、例えば氷点下三〇度とか、四〇度といったような、例えば北海道の北端。この真冬を想像していただきたい。ここに、大変暖房の効いた家があると。そして、その中で生活をしていると。この人は、こう考えた。「わたしは、北端で、マイナス三〇度、四〇度のところで、平気で生活することができる」。しかし、本当にそうであろうか。この人が生活をしているのは、マイナス三〇度、四〇度という外界と違い、暖房に暖められた、二〇度、あるいは二五度といったポカポカの空間で生活して

いるということになる。権力とは、この家にたとえられる。そして、本当に幸福を願うなら、この家を取り払った状態、マイナス三〇度、マイナス四〇度といった中で、暖房を使わず生活できるかどうかということなのである。

そして、そういうことを培っていくこと、これが真理であり、これが仏教なのである。

◉捨の精神——ひたすら今をつくり上げよ

では、徳の現象についてはどうであろうか。この徳の現象は、わたしたちを現世において、いろいろと満足させてくれる。そして、現世的な願望というものは、すべてがかなうということになる。しかし、この徳もまた幻影なのである。なぜならば、徳を積まず、徳を使い続けると、必ずその徳は切れ、そして喜びから苦しみに転落するからである。

これはちょうど、冷暖房機にたとえることができる。ある時期、暖房を入れる。しかし、その暖房機が壊れて、次のスイッチが入るとき、それは冷房機となると。

しかし、もしこの暖房機を絶えず修理し、チェックし続けるなら、長い間、その暖房の恩恵に預かることができるであろう。これが、功徳の特徴なのである。よって、この功徳の現象に対して、頓着をすべきではないのである。

そして、四つの無量心の最高の心の状態は、無頓着、捨の精神だといわれている。真理でいう捨の精神とは、こういうバックボーンをもとに説かれた教えなのである。つまり、今味わっている苦楽というものは、過去、あるいは過去生のわたしたちの言葉、行為、心の働きという三つが重なり合って現象化しているにすぎないと。ということは、今味わっている喜び、あるいは苦しみというものは、今、この瞬間とは無縁なのである。つまり、これはあくまでも過去の幻影であり、現在の結果ではないのである。

よって、すべての魂を救済する大乗の仏陀になるためには、この無頓着、今なされている苦しみ、あるいは楽に対して、一切頓着せず、ひたすら今をつくり上げていくということが大切なのである。

◉仏教は未来志向

ここで、出てくるのが、二正勤（にしょうごん）二正断（にしょうだん）なのである。つまり、これはどういうことかというと、今、瞬間瞬間を全力で生きる、あるいは未来を全力で生きることこそ、仏教の真義だからなのだ。そうだね。だって、過去の幻影を今味わっているわけだけど、この幻影は、過去のあくまでも幻影であって、わたしたちの未来に何の恩恵もない。そうじゃないか。

それよりも、今、瞬間瞬間を二正勤二正断の実践により、今なしている善法を増大させる、そして今まだ徳がなくてできないけど、未来において徳が備わったら、絶対にこの徳を積むぞという、徳を増大させるように意識する。そして、今なしている悪業を断ずる。そして、未来において生じるかもしれない悪業を出ないように、心がけると。これは、どうですか。未来のわたしたちの楽を決定するものだと思わないか。ということなんだよ。つまり、仏教というものは未来志向なのであると。

◉覚者となるための七つの土台

では、そのためには、一体どういう行ないをなせばいいのかということになってくる。これは、まず、何が真理で何が真理でないかを、ひたすらデータを入れるということから始めなければならない。この、何が真理で何が真理でないかを何度も何度も繰り返し、データを入れなければ、わたしたちは過去世からの幻影によって、過去世からの錯綜によって、ものを正確にとらえることができなくなっている。よって、ひたすら記憶修習をすべきなのである。

そして、今何の修行をなしたら最もメリットがあるのか、これを次は選択しなければならない。例えば、初心者があまりにも難しい瞑想をなすとか、あるいは修行の進んでいるものが、簡単なマントラを唱えて、自分は修行しているんだと錯覚するとかいうことは、その人の修行を挫折させたり、あるいは進まなくさせたりする要因となる。よって、この二番目の何を選択するのか、これは最も大切な仏陀へ至る道の一つということになる。

そして、三番目は、決めた修行に対して勇敢に修行を進める。そして、たゆま

ず修行を進める。これが必要なのである。これを勤精進、あるいは勇気をもって精進するといわれている。これが、第三の仏陀の心を支える、仏陀の心をつくっていく修行なのである。

そして、第四番目は、「ああ、今日は疲れたな」と言いつつ修行するのではなく、「うれしいなあ、自分は修行してうれしいなあ」「自分は修行できることがうれしいなあ。自分は教学できることがうれしいなあ。徳を積むことがうれしいなあ」という、この修行に対して、ただひたすら喜びを持ち続ける修行、これを実践しなければならないのである。

そして、生活のリズムをしっかりとつくり、心身が軽快になるように、修行によって軽快になるように組み立てる修行。これが、第五のわたしたちの仏陀に至るための土台を培う修行なのである。

そして、この五つを達成し、ある程度固まったならば、次はしっかりと自分の内側を見つめる。そして心を鎮め、心を止め、観察する。そして、どういう煩悩があり、自分はどういう世界へ転生するのか、あるいはどういう、自分自身は思

考のパターンを持っているのかをしっかりと理解すると。これが第六番目のわたしたちが仏陀になるための土台となる修行なのである。

ここで、問題になってくるのは、例えば一番目の、何が真理で何が真理でないのかということを理解できていないと、この六番目、この観察の智においても当然ズレが出てくる。

例えば、現代人は、膨大な時間を使って、マンガ、アニメ、あるいはテレビ、映画、雑誌等のデータを入れている。そして、こういうデータは、わたしたちの知らないうちに深い意識に根付き、このデータをもとに判断をするという謬見解を培うことになる。よって、その前に、ひたすら何が真理で何が真理ではないのかの記憶修習をなさなければ、このサマディというものが、全く無効になってしまうということなのである。

そして、先程も述べた、例えば嫌悪、性欲、食欲、愛着、権力、あるいは現世の願望成就といったようなもの、こういうものに対して一切頓着をしない、頓着しないでただひたすら修行を続けるということ、これが七番目の大乗の仏陀に至

る土台なのである。

なぜかというと、先程も述べたとおり、現在という瞬間は、幻影である。これは、過去、あるいは過去世のわたしたちのカルマが生起し、現われている状態を表わしている。その現在の幻影にとらわれ、それにより再びまた悪業を積み、あるいはそれにおぼれ、功徳を積まない状態をつくってしまうならば、その人の現在から投影された未来というものは、また不幸ということになる。よって、現在を無視しなければならないわけである。これが、正生活、正しい生活なのである。

◉苦を与えれば、苦が返る

では、わたしたちの身(しん)・口(く)・意(い)における、まず身の行ないの統御については、何をなせばいいのであろうかと。例えば、わたしたちが殺生をする。例えば、相手に苦痛を与える。苦痛を与えると、その苦痛のヴァイブレーションは、シャクティーパットと同じで、自分の内側に内在される。ということは、苦の総量は一定なのである。苦の総量が一定だということは、相手を苦しめたそのデータとい

うものは、必ず自分に入ってくるわけである。すると例えば、小さな虫たちにも、当然苦しみというものはあるから、その苦しみの総量が、わたしたちに伝わってくる。もっと徳の高い大きな生き物は、その苦しみの量が多いから、その苦しみのデータというものは、わたしたちのコーザルに、しっかりと根付かされると。逆に、生き物を安らがせるということは、その生き物の喜びというものが、わたしたちの心に根付かされるから、これはわたしたちの喜びという形で返ってくる。この理法を理解するならば、殺生を離れ、すべての魂を安らがせることの偉大さに気付くであろう。

　次は、偸盗（ちゅうとう）である。人の心というものは、必ず、その人の所有してるものに対して愛着している。あるいは、執着している。ということは、他の者の所有を盗むということは、その人に、その執着からくる苦しみを与えることになる。よって、偸盗をした段階で、その持ち主の苦しみが伝わってくることになる。そして、これは、逆に自分の執着しているものを奪われるという形で苦しまなければならないのである。よって、他に対してものを施し、盗まないということは、これは、

だれの利益でもなく、自己の利益なのである。
同じように、邪淫（じゃいん）がまさにそれである。これには、正確にいうと二つの意味合いがある。
その第一は、性エネルギーを漏らすことにより、徳の消耗をし、疲弊するということである。
そして第二は、これは仏教的に、一般的にいわれている邪淫だけども、これは、他人の妻、あるいは他人の夫を寝取るということなのである。これは、先程も述べたとおり、他人の妻、あるいは他人の夫というものは、その夫婦関係において、必ず愛着し合い、あるいは独占し合おうという心の働きがある。その、独占し合おうという心の働きに対して、強烈なダメージを与えるわけだから、当然、その苦しみというものは、その対象者に向かってくる。そして、その苦しみをしょうことにより、未来において苦しまなければならないというカルマをつくるのである。
よって、正行為の原則というものは、殺生を離れ魂を慈しむ、偸盗を離れものを施す、邪淫を離れ、そして本当に心からの友情を培うということになる。

◉言葉の統御をなせ

では、言葉についてはどうであろうか。まず、妄語がくる。この妄語というものは、ものを覆い隠したいと考える心の働きが増大される。この心の働きは、わたしたちのカルマの顕現化を遅くする。つまり、一種の、そこで袋、あるいは箱をつくったような形になる。ということは、その嘘が多ければ多いほどカルマの現象は遅れることになる。カルマの現象が遅れると、カルマの理法が理解できなくなり、悪業を多く積む。そして、それによって、結局その悪業が現象化するときは、取り返しのつかないようなカルマの清算となっている。これが妄語なのである。

よって、真実を語るということは決していいことではない。このいいことではないとは何かというと、何かわたしたちにいいことが返ってくるということではなく、すべてのものの現象が、はっきりありのままに見えるということなのである。

では、綺語はどうであろうか。この綺語というものは、心の働き即言葉という、

つまり、コーザル即アストラルという、この流れを変えてしまう。つまり、心にもない言葉を大量に語ることにより、アストラルに心と関係のない、いらぬものがたくさん生じることになる。ということは、心で思ったことが現象化せず、屈折を生むわけである。ということは、この綺語は、わたしたちがものを達成していく上において最も大きな障害ということになる。

では、悪口はどうであろうか。これは、殺生と同じである。つまり、悪口を放つことにより、相手に苦しみを生起させる。そして、その苦しみのヴァイブレーションは、自分の心に返ってくるのである。

ということは、綺語を話さず、真実だけを語ると。そして、悪口を語らず、人に優しい言葉を語るということは、それだけでわたしたちに大きな恩恵があるのである。

仏典で、悪口により地獄に落ちたという例があるが、これはまさにそれである。つまり、これは殺生と同じ――形態は違うがね――カルマの返り方をするわけである。

では、両舌はどうであろうかと。この両舌においては、必ず嫉妬心というものが、心の背景にある。そして先程も述べた、その嫉妬心の背景には、また嫌悪という心の働きがある。ということは、どんどんどんどん自分の世界を小さくしていくということになる。そうだね。嫌悪は壁でしょ。ということは、この両舌の戒は、人と人とを仲たがいさせ、それと同時に自分の世界を小さくしていき、最終的には自閉症になるということになる。

ところが、人と人とを和合させる、この言葉の実践をなすならば、心が豊かになり、壁が取り払われ、多くのいろんな人と交わることができ、そして、いろいろなことを学び、魂が成長するということになる。

ということは、妄語・綺語・悪口・両舌というこの行為、この言葉の行為は、これはわたしたちを不幸に陥れるものであり、真実を語り、必要のない言葉を語らず、人に優しい言葉を語り、人と人とを和合させる言葉を語るということは、わたしたちの心の病を取り除き、わたしたちの心を広大にしていくということになる。そして、これを正語というのである。

◉教えを基に、検討する

では、八正道の原則である、正見解、正思惟とは何であろうかと。まず、この正見解とは、仏陀の教え、グルの教え、この教えをただひたすら学ぶということである。ここで、考えてはいけないということである。なぜならば、先程も述べたとおり、わたしたちがわたしたちと呼んでいる思考は、小さいときから両親によって植え付けられたもの、兄弟によって植え付けられたもの、あるいは社会的環境によって植え付けられたもの、例えばマンガ、雑誌、テレビ、アニメーション、映画等である。そして、これをわたしたちはわたしたちと考えている。

ところが、今から二千五百年前登場した仏陀釈迦牟尼の教え、あるいはそれより以前にあったインド・ヨーガの真実の教え、あるいは二千五百年から現在に至るまでの多くの聖者方が修行して得た結果の教えといったものは、これは普遍的な教えなのである。それは、なぜかというと、無常、だれが見ても絶対にそうだとわかる基本的原理を背景として教えているからである。

よって、まず、この正見解というものは、自分の考えを捨て、ひたすら学ぶこ

とから努力すると。そして、例えば、『マハーヤーナ』だったら、五回くらい必ず読み、そして熟読すると。これを熟読して、初めて正見解のベースができたということになる。

次はそれに基づき、自分自身の身の行ない、口の行ない、あるいは心の働きについてチェックを入れると。これが、正思惟なのである。つまり、正見解、正思惟というものは、仏典をもとに、あるいはグルの教えをもとに、自分自身を検討していくプロセスなのである。ということは、先程の正語、あるいは正行為、正生活といったようなもの、これが仏典の基本的な教えであり、そして、その背景というもの、バックボーンというものも、皆さんは理解できたわけだから、これから正見解に立つならば、それを実践しなければならないということが理解できるはずである。

◉そして、サマディへ

そして、その次の正記憶修習。この正記憶修習というのは、一度、二度、三度、

四度、五度ではなく、例えば自分がなさなければならない瞑想を、十万回、あるいは百万回といったレベルで、何度も何度も記憶すると。この、なぜ何度も何度も記憶するかというと、これが一定の回数になると、わたしたちの表層意識から潜在意識に入り、そして潜在意識から超潜在意識へとデータが流れていくからである。そして、この正記憶修習をなして、初めてわたしたちが深い意識へ到達したとき、その正記憶修習をなしたものが乗り物となり、わたしたちをいろいろな神秘の世界へと案内するわけである。

ということは、その前に、正記憶修習のなされないような禅の瞑想というものは、わたしたちに利益を与えないということになる。あるいは、単に勤行だけにいそしんで、つまり読経だけをしている場合は、これはその後の寂止、正観の正サマディというものがないから、これも正確に観察できないということになる。つまり、詞章、あるいはマントラの修行というものがあって、初めてその次の寂止、正観のサマディに入ることができるわけである。

そして、このマントラ修行、詞章の修行だけではなく、日々の生活において、

心、言葉、行為の統御をする。特に、言葉と行為の統御をすることが大切なのである。

これが、八つの聖なる実践、八正道と呼ばれるもののすべてである。

◉四無量心――広大で深遠な心を

では、次に四無量心、これはなぜ実践しなければならないかということになる。例えば、「ホー、湖面に映る虚像のような様々な幻影に引きずられ、輪廻の大海を浮沈する生き物たち。彼らすべてが絶対自由、絶対幸福なるマハーヤーナにて安住することができるよう、四無量心込めて大乗の発願(はつがん)をいたします」と。このマントラを十万回唱えると。すると、何かの現象があるとき、このマントラが浮いてくると。

そして、例えば、自分の妻、子供、あるいは夫、あるいは父母、あるいは友人といったものを見たとき、なんて哀れなんだろうと、いう思いが生じてくると。まず、これが心の生起、これが慈悲の悲なのである。そして、その哀れみを、強

く強く持つ。強く強く持つだけではなく、この人を本当に幸せにするためには、どうしたらいいんだろうかと考えなければならない。すると、おのずと結果は一つということになる。それは、真理を実践させるしかないなと。真理を実践していただくしかないなと。この人は、真理を実践してこそ、初めて今の苦しみから脱却することができるんだと。こう考える思い、これが悲なのである。

では、慈愛とは何であろうかと。この慈愛とは、例えば愛着する対象、あるいは好感を持つ対象に対して、その好感を持つ対象が、もっともっと幸福になってほしいと、本当の意味で幸福になってほしいと思う心の働きである。ということは、これも一つしかない。それは、絶対的自由・幸福・歓喜を相手に与えること、無常を超越した歓喜を相手に与えることなのである。たしかに、無常から常に至るときに、相当多くの苦しみを対象に与えることになるかもしれない。しかし、それは、ちょうど病を治すとき、手術が必要なように、あるいは注射が必要なように――多くのわたしたちの友というものは病んでいる。よって、その病を治すとき、そこに苦しみが生じたとしても、それは、逆に喜びとして、つまり、その

人の心の成熟の喜びとして、見守るべきなのである。そして、この慈愛、そして悲の実践、これはわたしたちの心を大きくしてくれる。そして、視野を拡大してくれることになる。

ところが、この慈愛、悲しみといったようなもの、悲といったようなものは、どちらかというと、対象が自分よりもレベルの下の者に向けられる心の働きなのである。自分より優れた者、あるいは自分と同等の者に対しては、どのようにしたらいいか。それは、称賛の瞑想、そして称賛の実践こそ、わたしたちの心を広大にしてくれるのである。

つまり、もし、対象を称賛することができるなら、自分より優れている者を称賛することができるなら、心は自然とその人の良さを学ぼうとする。そうだね。ところが、対象に対して闘争本能を持ったり、嫉妬心を持ったりすると、その人の欠点を一生懸命見つけようとし、そして、それと同時に心はどんどんどんどん屈折してくる。そうだね。よって、第三番目の実践、この称賛というのは、自分と同等、あるいは自分よりも優れた者に対して行なうべき、真理の実践者の実践

過程なのである。

そして、第四のパターン、これは、先程も述べた、この現実、この現象、今というものに対して頓着しないということなのである。この今というものは、だれも、どうすることもできないのである。つまり、それはどういうことかというと、この今というものは、過去世から、あるいは今生の過去において培ったわたしたちの善業と悪業との集積が今なのである。

◉六つの極限との関係は

そして、今から二千五百年前、原始仏教において、出家が称賛されたのはそこにある。つまり、出家というものは今の苦しみから逃れることができる。そして、ひたすら善法を増大させることができる。善業を増大させることができる。初めのうちは、逃れていてもカルマの返りにより、少しずつ少しずつ苦しみが現象化する。しかし、それがある段階になると、善業しか積んでいないから、あるいは善法しか実践していないから、その苦しみがなくなったとき、その魂の五蘊（ごうん）、つ

まり肉体、感覚、イメージ、意志、意識というものは、善の集積、功徳の集積になるのである。

そして、その段階でサマディに入り、そして高い世界をすべて認識し、この人間界がいかに低い世界であるかを認識し、この人間界に対する愛着を捨て、ニルヴァーナ、あるいはマハー・ニルヴァーナへと入っていくのである。これが、実践的八正道、そして四無量心のすべてである。

ということは、この八正道、あるいは四無量心というものは、六つの極限と何ら変わらないことになる。そうだね。これを六つの極限に当てはめるならばどうなるかというと、まず、三つの布施、財施・法施・安心施という三つの布施によって、功徳を積む。そうだね。次に、持戒を守ることによって、言葉、心、行為の統御をする。そうだね。そして、三番目の忍辱（にんにく）、ね、耐え忍ぶ修行によって、無頓着の心を培っていく。そうだね。四番目の精進の実践によって、今の善業よりもっともっと大きな善業を形成し、そして悪業を止滅する。そうだね。そして五番目の瞑想のステージ、サマディのステージによって、その培ってきたわたした

の悪業の部分、あるいは善業の部分をチェックし、そして悪業の部分はまたひたすら落とすと。そうだね。そして、最後、智慧、六神通に到達すると。そうだね。

ちの五蘊をじっくり観察し、そしてわたしたちの悪業の部分、あるいは善業の部分をチェックし、そして悪業の部分はまたひたすら落とすと。そうだね。そして、最後、智慧、六神通に到達すると。そうだね。

ということは、八正道、あるいは六つの極限、これは全く同じなのである。これが、わたしの悟り得た八正道であり、わたしの悟り得た六つの極限であり、わたしの悟り得た四無量心である。

一九九一年一月三日　富士山総本部にて

◆第九話　一つの事象を縦横無尽に斬る！

「聖なる八支の実践と四預流支」

◉真理にのっとりデータを入れる

聖なる八支の実践。これがわたしたちの五蘊（ごうん）形成に大きな影響を与え、そして、未来際において仏陀として生まれ変わるための土台をつくり、五蘊を変化させていくということを君たちは知っているだろうか。

この聖なる八支の実践。これは、正しい見解を具足するということ。この正しい見解を具足するとはどういうことかというと、わたしたちが生まれてから修行に入るまで持っている正しくない見解、つまり俗にいわれる現実的な見解を離れ、真理にのっとりそのデータを入れるということである。

この正しい見解とは何を意味するのかというと、これは、わたしたちを苦しみから真に解放するデータということになる。例えば、愛着は喜びであると一般的にいわれています。なぜならば、愛着する者が喜べば自分も喜ぶと。あるいは、愛着するものが多ければ多いほど、その人生は楽しいと。しかし、ここで考えなければならないことは、その愛着する対象がが強ければ強いほど、あるいは多ければ多いほど、ディタッチするとき、つまり離れるときに、苦しまなければならないという実体です。

この苦しまなければならないという実体を超越できるのは、ただ一つ、グルと弟子の関係だけであると。これはどういうことかというと、グルのステージが大変高く、そして弟子のステージが大変高ければ、輪廻転生を超え、いつでもどこでも一緒についていくことができると。しかし、そうではない関係においては、必ず死というものを境に、その苦しみは必ずやってくるということです。

◉ひたすら法を学べ

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。どんなに大きな家に住んでいても、どんなに大金持ちであっても、多くの恋人を有していても、あるいは一人の愛する妻を持っていても、あるいはどんなに高い地位に就いていても、どんなに権力を有していても、人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ。その死を境に苦しまなければならない。

そして、そのディタッチの際、つまり愛着から離れる際に、苦しまなくていい法があると。その法を学ぶこと、その法に基づいて考えること、これが正しい見解を具足(ぐそく)するということです。

よくサマナの中で、わたしは揺れていますという人がいます。その揺れていますという人の話を聞くと、生まれてからこの方の苦しみを因とするものの考え方に立脚し、その修習を行なっていると。例えば、オウムではオウム食だけしか食べられないと。外ではラーメンがおいしかった、そばがおいしかった、あるいはアイスクリームがおいしかったと。あるいはチーズケーキがおいしかったと、ね。

しかし、これらのおいしいといったもの、このおいしいといったものとも、必ず死を境に離れなければならない。ところが、出家し、その記憶修習を一生懸命行なっていると。あそこのラーメンはどうだった、ここのそばはどうだったと。

もし、ここで正しい見解を具足するならば、そのような執着、そのような味覚に対するとらわれというものは苦しみであると、しかも、それは、何々によってどのような結果を招くということが、しっかりと理解できるはずである。こういうとき、悩まないでひたすら教学をする。その教学も、同じものを三度、五度、十度、十五度と読み続けると。例えば、わたしの一本の説法を五回、十回、十五回と読むと。これをなすことにより、不思議と心が安定し、平安な気持ちを経験できるものである。

◉正しい思索とは

第二は、正しい思索ということになる。この正しい思索は四預流支の中の、まずしっかり学ぶと、その後に、それにのっとり思索するという教えがあるが、こ

れと全く同じ。聖なる八支の道、聖なる八支の実践においての第二番目は、四預流支の第三番目ということになる。

仏陀釈迦牟尼の教えというものは面白いもので、一つの事象を縦横無尽に斬って、それを弟子たちにわかりやすく説いていらっしゃる。例えば、今言ったとおり、正しい見解というのは、第二番目のひたすら学ぶ、多学の弟子になるという意味であると。第二番目の正しい思索、これは、四預流支の中の三番目、真理にのっとり考えるということである。そして、それから先の正しい言葉、正しい行為、正しい生活、正しい記憶修習、正しい精進、そして正しいサマディというのは、これはすべて真理の実践、第四番目の預流支ということになる。つまり、この四預流支は、聖なる八支の実践を含んでいるのであるということである。

わたしは、正月のセミナーにおいて、八正道と六つの極限が同じであるということを話しました。そして、今日は、四預流支と聖なる八支の実践というものが同じであるということを話しているわけです。

◉愛をもって真実を語れ

では、この三番目の正語。これは一体何を意味するのかと。ちょっとサマナ用説法だから難しい部分に立ち入りましょう。まず、この正語は、妄語・綺語・悪口・両舌という四つの口のカルマを積まないということです。この四つの口のカルマを積まないということはどういうことかというと、喉のプラーナを左でもない、右でもない、中央の気道に導くということです。ちょっとタントラ的な表現だけどね。

例えば、悪口・両舌といった怒りを含んだ言葉を連発していると、右の気道、喉の右の気道のナーディーが炎症を起こします。熱優位となり、そこで詰まると。ちょうどそれは、ゴムがあり、そのゴムが熱され、そして、それがピッタリとくっついた形を考えたらわかる。そこでナーディーは完全に詰まってしまいます。

逆に、妄語や綺語といったタマス傾向の言葉を発すると、左の気道、この左の気道のプラーナの流れがゆっくりゆっくり流れるようになり、必要なエネルギーが満たされないことになります。

そして、愛をもって真実を正しく語るなら、それは中央の気道を、スムーズにプラーナが流れるようになります。これが正語の意味合いです。

◉心に喜びを蓄えよ

では次に、正行為とは何でしょうか。この正行為とは、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れると。今日、今子供たちがね、まあ、わたしの子供たちが無智な動きをしているけど、これはまさに、今日着いて何をやったかというと、動物を見にいって、動物を触ったと。この影響によって、説法のときに動物的な動きをしている。これは、データの入れ替えが起きたわけだね。

　これと同じで、例えば殺生をすると、相手の、他の魂の苦しみのデータが入れ替わると、ね。というのは、この欲界の苦しみの総量は一定だから、AがBに対してなした行為によって、相手が甘受したカルマの清算は、そのなしたものに移行します。これはわかるね。同じように、偸盗、邪淫についてもいえるわけです。

　ということはどうなるかというと、結局、この殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫

を離れるという行為は、まずわたしたちが苦しみのデータを自分の五蘊に蓄積しないことを意味しています。そして、心において生き物を慈しみ、人にものを施す心を持ち、そして取引関係によるセックス、邪行を離れ、真に人を慈愛することができるならば、その心には喜びのデータの蓄積が当然始まるはずです。

◉七つの覚支の実践

そして、第五番目の実践、正生活ということになる。この正しい生活とは何かというと、これは日々七覚支の実践を行なうことと。つまり、ひたすら真理のデータを入れ、そしてニルヴァーナに向かってのベクトルを向けるということであると。

このニルヴァーナに向かってのベクトルを向けるとはどういうことかというと、例えば修行をなしていて苦しいと考えるのではなくて、楽しいと考える。経典を読んでいて、うれしいと思うと。これは、もうみんなよく知っている喜覚支（きかくし）だね。

あるいは、普段からリラックスをし、修行において心身の軽快さを感じると。

これは、軽安覚支だね。

あるいは、今何ができるのかということを絶えず考え、その時と場所に合った真理の実践を行なうと。例えば、ワークのときはワークに集中し、例えばマントラが唱えられるときはマントラに集中し、教学できるときは教学に集中するという実践を行なう。これが、択法覚支だね。

例えば、これは聖なる八支の実践の第一番目にもあるわけだけど、ひたすら一つの記憶を入れ続けると。これは、正念といわれている、まあ正記憶修習、つまりデータの入れ替えだね。

そして、どんなにつらくてもひたすら修行し続けるという精進覚支だね。

これらは、すべてサマディに導かれます。

そして、いかなる状況であろうとも、頓着しない心を身につけると。それは前回の説法であったとおり、今苦しんでることは、過去と過去世の幻影であるということを理解し、今にとらわれず、今なさなければならない修行に没頭すると。

この七つの覚支の実践を日々行なうこと。これが正生活です。

◉四つのチェックの修行

そして、次はチェックに入ると。チェックとは何かというと、今なしている善行、これをもっと増大したいと、ね。どこをどうしたら増大できるんだろうかというチェックに入ると。まだ、今徳が足りないけども、未来において徳が積めるとき、その徳を達成しようと願うこと。例えば例を挙げるならば、今ワークを実践していると。よって、ワークで徳を積もうと。どうしたら、もっと集中して徳を積めるだろうか、どうしたら、もっと多くの徳を積めるだろうかと考えること。そして、例えば極厳修行に入ったら、思い切って二十四時間修行できるように頑張るぞと。それを日々考えること。これが二正勤(にしょうごん)です。

そして例えば、今、ね、身の行ないと心の働きはいいんだけど、口のカルマを積んでしまうという人がいたら、よし、それをやめようと。特にわたしは悪口が多いからやめようと。あるいは、わたしは必要のない言葉をよくしゃべるから、これをやめようと考えること。そして、それを実行すること。これが、断(だん)の一つだね。断つ、一つ。そして、未来において、例えば師になって、ね、師を見ると、

ああプライドの修習をしているなと。わたしは、プライドの修習をしないように心がけようと。これが、随護断といわれている、未来の悪業をシャットアウトする修行。

この四つのチェック、つまり、今なしている善業を増大し、未来における善業を願望し、今なしてる悪業をシャットアウトし、未来において生じるかもしれない悪業の種をまかないようにするということ。この四つのチェックの修行を行なうこと、これが第六番目にくる、正精進といわれているものです。

◉すべてを経験し、理解する

そして、第七番目は、ひたすらデータの入れ替えを行なうと。しかもそれは、一つのことに絞ってデータの入れ替えを行なうと。例えば、「オーム、アー、フーム、金剛心をもってグルとシヴァ大神に帰依いたします。金剛心をもって真理に帰依いたします。金剛心をもって自己の霊性より少しでも高い人に帰依いたします」。こういうのはまさに、この正念に入るわけだけどね。正記憶修習に入るわ

けだけど、これを五回、十回、千回、一万回、十万回と繰り返すと。そうすると、心の中心の部分はそのデータが中心になってくると。これが正記憶修習であると。そして、それに基づき、サマディに導かれると。つまり、こういう七つの実践がしっかり行なわれないと、なかなかサマディには、導かれないんだと。

では、それはなぜであろうかと。サマディに必要なのは、心の寂静と、そして光です。つまり、正観です。この寂止、正観という、この二つを得るためには、大いなる功徳と、それから煩悩(ぼんのう)の滅尽が必要です。そして、この大いなる功徳と煩悩の滅尽により、わたしたちは、わたしたちの内側を、そしてこの世界の構成を、そしてすべてを経験し、理解することができます。

◉覚者の見る世界

例えばね、例を挙げるならば、今、イラクとそれから国連軍、多国籍軍といわれている軍隊が戦争をしています。これは、一月の十七日に始まったそうだけども、まあ、一つナンセンスなことがあると。それは何かというと、もう日本軍は

既に、かなりの金額をこの多国籍軍に、まあ要するに献金し、これからまた一兆数千億円のね、献金をするという話だけど。

例えば、この波野村道場の用地を検察側がいうとおり計算するならば、約二百億平方メートル、この土地の値段でいったら買えるんだね。で、この二百億平方メートルといったらどういうことかというと、まあだいたい、百キロ、二百キロの土地が買えるということになると。この百キロ、二百キロといったら、おそらく四国より大きいと思います。そして、もちろん土地の値段は、今のクエートよりも日本の方が当然高いでしょうから、世界が費やしているお金をすべてクエートに、例えば投資したならば、そのクエートは十分に買える値段であると考えられます。

ところが、こういうことを考えるのは麻原しかいないんだね。つまり、価値を転換し、そして何が正しくて何が正しくないのかと、一体、今は、世界で何が行なわれているのかというのを考える、そういう普通の人と違った視点で見る魂というのは、おそらくわたししかいないと思います。みんな、だいたい情報に翻弄

され、そして目をつぶったまま突っ込んでいくと。これはまさに、わたしが真理の実践を今まで行なってきた結果得られている一つの力だと、わたしは考えています。

このような形で現象を冷静に分析し、見つめ、そして正しい生き方をすること、これが聖なる八支の実践です。そして、ここに出家し、集っている魂は、その実践ができる数少ない魂であると思います。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。しかし、その死というものは、コーザルに意識が到達するならば、すべて見ることができ、聞くことができ、匂うことができ、触れることができる。そして、感じることができるものです。皆さんも、早くその境地へと到達してください。

一九九一年一月二十二日　阿蘇・シャンバラ精舎にて

◆第十話　四預流支を土台にマハー・ニルヴァーナへ

「十相——仏教のすべて」

◉十相——正見解から

はい、では今日の講話は、十相、十のステージと。これは、皆さんのよく知っている「道相応」の中に説かれているサーリプッタがアナータピンディカ長者に対してお説きになった法なんだけども、これについて今日は少し検討してみようじゃないかと思います。

まず、この十相とは何かというと、正見解、正思惟、正語、正行為、正生活、正精進、正記憶修習、そして正サマディと。これに加えて、正智、そして正解脱と。あるいは、正しい智慧の到達、そして正しい解脱という十相、十のステージ、

これが仏教のすべてであると。もちろん、わたしのいうすべてというのはいろんなトリックがあるわけだけども、例えば解脱にもいろんなステージがあるし、例えば正しい智慧にもいろんなステージがありますと。ただ、この道を実践するならば、必ずわたしたちは解脱することができると。

では一体、正見解とは何かと。この正見解とはまさに、皆さんに毎月お届けする『マハーヤーナ』に載っている記事、これをしっかりとまず理解すると。しっかりとまず読む、理解するということだと思います。

で、これをしっかりと読んだ後に、それに基づいて考えると。これが正思惟です。では、この正思惟は一体何を考えるのかと、ね。これはまず、現実というものの矛盾、それをどのように解いたら自分たちが本当に幸福になるのかと。あるいは、わたしたちの身の行ないについては、どのような実践をなせばわたしは幸福になるのかと。あるいは、口の行ないについては、何を話し、何を話さなければ幸福になるのかと。あるいは、心の問題としては、どのような心の持ち方をすればいいのかと、あるいはどのような心の持ち方をしてはいけないのかと。これ

が正思惟です、ね。

◉正語におけるヨーガ派と仏教派の違い

次にくるのが、正語、正しい言葉。ここで問題になってくるのは、ヨーガ派と、それから仏教派の違いがありますと。ヨーガ派というのは、しゃべることそのものがエネルギーを漏らすことであると。よって、沈黙こそ聖であると、ね。聖であると。あるいは、沈黙することこそ、正であると、正しいと。それに対して仏教的な見地は、しゃべる必要があると。その言葉については、妄語・綺語・悪口・両舌を離れ、そして正しい言葉遣いをなし、四無量心のこもった心によって話すべきであると。

もちろん、初めのだよ、正見解、正思惟ができていれば、三番目は仏教的見地の方が正しいと。ところが、正見解、正思惟ができていなければ、当然、沈黙した方がよろしいということになる。これは、信徒の皆さんがどちらの道を選ぶか、つまり「わたしあんまり教学好きじゃないの」という人は、できるだけしゃべら

ない方がいい。逆に「わたし教学好き」と、ね、「『マハーヤーナ』を読んで考えることと好きなの」という人は、四無量心のこもった心によってね、できるだけしゃべった方がよろしい、ね。

なぜかというと、この現代というものは、現実の生活というのは、悪趣に至るための道であると。例えば、最も煩悩的(ぼんのうてき)なアメリカに対して、日本はお布施をするような国になってしまったと、ね。こういう国のこういう情報網の中でわたしたちは生きていなければならないわけだから、当然、わたしたちの価値観というのは知らず知らずのうちに動物的、三悪趣的な傾向が強まっていると。だとするならば、しゃべらない方がいいと。

もしそうではなくて、そういう情報をシャットアウトし、しっかりと正見解、正思惟にのっとり、四無量心のこもった心によって、妄語を離れ、綺語を離れ、悪口を離れ、両舌を離れ、本当に親和のある優しい言葉で話すならば、それは話すべきであると。

つまりどういうことかというと、ヨーガは悪業を積まないと。仏教は善業を積

むと。この違いがあるわけです。いいね。

◉三つの身の悪業を離れる

で、次の正行為とは何であろうかと。この正行為というのは、例えば虫、ゴキブリ、ね、こういうものがわたしたちを襲ってくると。で、襲われた段階でわたしたちはそれを叩きつぶしてしまうと。これは確かに一見楽であると。そして、いかにも魔を払ったような気持ちになってると。しかしよく考えてみると、自分たちの前生は、あるいは来世そうかもしれないけども、ゴキブリ、ハエかもしれないと。そしてゴキブリやハエにも魂というものが存在している。そして当然、わたしたちとは違う段階で痛みを経験しているんだと、苦しみを経験しているんだと考えるならば、当然殺生を離れるべきであると。

同じように、人がセッセセッセと稼いだものを盗むということ、これは当然正しくないと。あるいは、できるだけ人にものを施すと、ね、あるいは真理のために布施をするということによって、心を成熟させ、餓鬼の世界から脱却すると。

あるいは、意味のない、必要のない、ストレスによるセックスをやらないと。あるいは、性的エネルギーのロスをやらないと。これをなすことによって、わたしたちは力強いエネルギーの状態になると。そしてその状態で、本当に親しい和合の心をもって人と接すると。これが正行為であると、ね。

◉正生活は七覚支の実践

では、五番目の正生活とは、一体何であろうかと。これは、もちろん出家と在家とでは違ってくる。そして在家の場合は、まずできるだけ意味のない不必要なデータをシャットアウトすると。そして高い世界に転生できるような情報を入れると、ね。その記憶を修習すると。

例えば『マハーヤーナ』、例えば「小学生の真理」、例えば「良い子の真理」ね、これも、今月からまた新しいヴァージョンで登場するわけだけども、これは本当に長らくお待たせしました。これについてはね、A面、いろいろなお話と、B面は真理学園で使う教材をもとに、算数の勉強ができるようになっています。

で、このようなものをデータとして入れながら、記憶修習しながら心を構築していくと、ね。そして、とにかく真理の実践については大いに喜び、逆に自分自身が悪業を積んだときは大いに苦しみ、悲しむと。この実践を行なうと。そして、真理の実践を行なうことによって、心身が軽快であるということを認識すると、ね。そして、いつもそのどの法を実践したらいいのかなということを、絶えず心の中で検討すると、ね。そして、夜眠るときには自分自身をサマディに導くように意識し、一切の現象に対してはすべてはカルマの現われであると、過去になした、あるいは過去世になした自分自身のカルマの投影であるということを認識すると、ね。

つまり、この正生活というものは、七覚支の実践であると。そしてこの正生活の実践によって、在家であっても不還（ふげん）に到達することができる、ね。

◉二正勤二正断の実践を

次は、正精進であると。この正精進とは何かというと、今なしている善法を増

大させると。例えば、布施の実践をなしてる人は、もっと多くの布施をするぞと。あるいは、今教学をやっている人は、もっと多く教学するぞと。あるいは、奉仕活動をやっている人は、もっと集中して奉仕活動をやるぞと、ね。あるいは、今カルマが落とされている人は、「うれしいなあ」と、「このカルマもっと落ちてくれ」と。こういう感じで、ね、今なしている善法を増大させると。

そして、今まだ徳が足りなくてなすことのできない善法については、それをイメージすると、ね。例えば、今わたしは大学生であるから布施の実践はできないと。しかし、卒業したらいい企業に入り、そして布施の実践を行なうぞと。あるいは、今試験勉強で忙しいとするならば、わたしは今試験勉強で忙しいと。よって、この試験が終わったらバクティーに励むぞと。こういうような形で、今なすことができない善法に対して希望を抱くと。そして、未来においてそれを達成するように努力すると。これが精進のまず二つの「勤（ごん）」であると。

そして次にね、今即やめられるものについては捨断すると。例えば、タバコを吸っている人がいたら、「わたしは絶対タバコを吸わないぞ」と、ね。そして捨

断すると。あるいは、お酒についても、「今まではお酒が好きだったけど、これをやめてしまおう」と。そして、「付き合いもそのうちやめるぞ」と、こう考えることが「断（だん）」の修行であると。この断の修行は、今なしている悪業の断滅と、それから今まだ断滅することはできないが、未来において生じるかもしれない悪業に対する断滅、あるいは今はシャットアウトできないけど、未来においてシャットアウトしようとする断滅との二つがあります。この二断がありますと。で、この二正勤二正断の実践を行なうと、ね。

◉正記憶修習をもとにサマディへ

そして、次はいよいよ正記憶修習であると、ね。この正記憶修習というのは、例えばわたしの説法を十五回、二十回とひたすら読み続けると。ここでは何も考えないと、ね。そして記憶すると。あるいは『南伝大蔵経』の、例えば「覚支相応」、例えば「道相応」、例えば「ガティーカーラ経」のようなね、お経を何度も何度も記憶修習すると、ね。

どうでしたか、あの「ガティーカーラ経」は。まさにジョーティーパーラ青年に対する、あの真理に対する導き方は、どうでしたか。もう皆さん読んだよね。あれぐらいの激しさがあっていいわけだね。そして、あれぐらいの激しさで初めて、奉仕者の第一人者であるといえます。まあそれはいいとしても、そういう経典が深く根付いていれば、真理の実践に対して躊躇なく行なうことができると。これが第七番目の正記憶修習であると。

そして、これをもとにサマディに入ると。サマディに入った場合、ね、今まで培ってきた心のリラックス、そして集中をもとに記憶修習したものによってね、自己の煩悩を見つけ、それを破壊していくんだね。初めは、わたしにはどういう煩悩があるだろうかと、ずうっとサーチすると、ね。実はこの正サマディの段階が、寂止、正観の段階といわれています。

そして、この正サマディによって、完全に自己の煩悩を滅尽していく過程において、いろんな正しい智慧が生じてきます。この正しい智慧というのは、別の言い方をすれば、正しい光です。これは仏典に載っていないことだね。正しい光が

生じてきます。そしてその光、これイコール解脱ではありません。

その次のステージ、第十番目の離解脱は、ちょうどこのアージュニァー球にね、煩悩が見えるようになります。そしてその煩悩が、スーッとちぎれていくんだね、ちょうど鞘(さや)から刀が抜き取られるような形で。それが解脱です。このプロセス、この十のプロセスをあなた方が実践するならば、必ずやね、あなた方は、未来においてあるいは今生において、悟りに到達することができます。

◉八正道の土台――四預流支

では、この十のステージ、あるいはその土台である八正道の、もっと土台は何かといったら、これは四預流支であると。もうわかってるね、四預流支は。

まず第一段階は、シヴァ大神の化生身(けしょうしん)である、諸々の仏陀の化生身であるグルに対して帰依をすること。第二段階は、真理に帰依をすること。第三段階は、向煩悩滅尽多学男女に対して帰依をすること。いくらサマナでもだよ――例えばわたしの弟子といっていても、その人が向煩悩滅尽でなかったならば帰依をする

必要はありません。いいね。これは信徒の先輩についても同じことがいえます。いくら古い信徒だとしても、その人が向煩悩滅尽でなければ、それは帰依の対象ではありません。いいね。だから、ポイントは、このビックサンガというのは向煩悩滅尽多学男女です。これに対して帰依をすると。これが第一番目の預流支であると。

そして第二番目の預流支は、記憶修習だね。つまり、多くの説法を聴くと。あるいは、多くの本を読むと。そして、それによって記憶修習し、ね、しっかりと自己の深い意識に根付かせると。でしょ。

で、第三番目は、これは如理作意といわれているものだけど、ね、その記憶修習したデータに基づいて思索すると。おかしいな、ちょっと待てよと。この記憶修習に基づいて思索するということは、先程の八正道の正サマディじゃないかと。でしょ。これは実はそうなんですと、ね。

そして、四番目の、それに基づいて真理の実践を行なうと。ねえ、随法行とかいろいろいわれているけども。これはどういうことかというと、要するにその

思索したものを土台として実践をすると。ということは、ここは、遠離（おんり）、離貪（りとん）なんですと。つまり遠離の行、離貪の行こそが、四番目の、随法行であるといえます。

　そして、この四つの修行をなすならば、皆さんは上流、上流とは、この人間界から欲の天界をぶち抜いて、神聖天をぶち抜いて、色究竟天（しきくぎょうてん）へ到達し、そして無色界に入り、マハー・ニルヴァーナへと到達する道を歩くことができます。これが、仏教のすべてですと。またすべてという言葉が出てきたね。

　どうですか、もうオウム真理教の修行体系、法というものはよく理解できたんじゃないかな。あとは皆さんがこれをね、しっかりと実践するかどうかで決まります。

一九九一年三月十七日　新東京本部にて

◆第十一話　サキャ神賢の初転法輪を再現！

「苦の超越に至る原則的な法」

◉真理勝者から真理勝者へ——受け継がれる法の輪

これから七十八億年後のこのヴァーラーナシーは、この様相とはまたかなり変わって、もっと近代的、そしてそれでいて華麗、そして寂静といった三つの要素を備えている土地となるであろう。

この、もともと場所は、偉大なる真理勝者であられる、また十力者であられるサキャ神賢が、初転法輪（しょてんぽうりん）を転じられたところである。その初転法輪の内容とは何かというと、苦、苦の生起、苦の滅尽、苦の超越に至る八段階の道と。それと、十二縁起の法をお説きになったところである。もともとこの地には、偉大なる真

理勝者方がよくいらっしゃり、そして法をお説きになった。例えば、ヴィパッシー真理勝者がそうであり、そしてカッサパ真理勝者がそうであり、先程述べたサキャ神賢真理勝者がそうであると。そして、これから七十八億という未来際に、マイトレーヤ真理勝者が、ここで同じように法輪を転じるであろう。

で、なぜその法輪を転じることができるのであろうかと。それは、ここに一筋のデータ、つまり真理を説き明かすためのデータが存在しているからである。では、なぜそれを、今説き明かしてはいけないのかと。それは、現代のわたしたちが、例えばその法を聴いたとしても、それについて理解することはできたとしても、それを体感する、体得するに至らないからである。

例えば、それはちょうど、絵のかき方をいくら学んでも、それを自在にかくようになるためには時がかかるのと同じように、わたしたちが今ここで法を聴いて、それを記憶修習したとしても、その法が完全に根付くまではそれだけ長きにわたる時が必要なのである。

そして、おそらくここにいらっしゃっているほとんどの人は、前生においても

この地を一度や二度は訪れたことがあるだろうし、それから未来際においても何度となくこの地を訪れ、そしてより真理に対する確信を深め、輪廻転生を続け、七十八億という長きにわたる時の後、ここで初転法輪を聴き、そして煩悩破壊していくであろう。それほど多くの時が必要なのである。

◉苦しみを知り、苦しみの生起を知り、苦しみの滅尽・破壊を知る

まず、ここで説かれる原則的な法とは何かというと、この諸現象、わたしたちが生活している一切の現象は楽しみの裏に必ず苦しみが隠されていると。

それはちょうど、ここにドブがあったとして、そのドブの水をすくうと。確かにこのドブの水の中には、魚の餌となるプランクトンも存在してるだろうが、それと同じように多くの科学物質その他が存在していて、わたしたちの体を害すると。これと同じようなものである。あるいは、例えばわたしたちは食事をとると。その食事の一部は栄養となるが、一部は糞尿となるというのと同じであると。

つまり、この現象界における楽しみの裏側には必ず苦しみが隠されているので

ある。これが、第一の真理における原則である。

第二は、それに対してわたしたちが求めようとすれば、必ずその苦しみ、隠されている苦しみというものが生起するのだということである。

例えば、この世の中に対して淡々ととらわれることなく生きるとするならば、その楽もわたしたちには強くアプローチしてこないかわりに、苦しみもアプローチしてこないと。そして、その楽というものも必ず苦しみに変化するわけだから、結局苦しみから出離することになる。つまり、わたしたちがこの現象の世界に強く縛り付けられれば縛り付けられるほど、苦しみというものは生起する、起き上がるのであるということである。

これは例えば、金を儲けたいと考えたり、事業を成功させたいと考えたりするのも同じである。淡々と自分自身の目の前にある事象に対して集中し続けていれば、勝手に成功するし、勝手に金は集まると。あるいは、例えば偉大な作家になろうと考えるのも同じである。いい作品を書こうとせず、自分のベストの限りを尽くそうと考え、筆を執れば、そこには当然成功というものが生じてくる。

しかし、人間はそう思わない。つまり、例えばいろいろなイメージを膨らませながら、あるいはいろいろな思索をしながら、あれやこれやとやりながら、結局そこでエネルギーをロスし、事業を失敗したり、あるいは経済的損失に陥ったり、あるいはいい文章が書けず、結局作家生命を断念しなければならないというようなことになってくると。

第三番目の苦しみの滅尽、苦しみの破壊と、これは何であろうかと。それについては、まず現象を正確に見つめると。そしてその裏側に、現象の裏側はすべて苦しみであるということを認識すると。そして、この認識した結果というものを正確にとらえ、そしてその原因を探り、その原因を取り除く作業を行なうと。これこそが苦しみを破壊する、滅尽する方法なのである。

例えば、過ちによって結婚したと。その妻や、あるいはご主人が自分にとって不幸をもたらすタイプのものであったとしたら、それはさっさと別れればいい。もちろん、大乗の修行、あるいはヴァジラヤーナの修行によって、その人を変えて真理を実践させようと、そしてその人を幸福にしてあげようという心を持つな

らば、それはもっとより崇高な心の働きとはなるが、それはなかなか大変である。このように原因をスパッと見つめ、そしてそれに対して対処すると。これが苦しみの破壊、滅尽であると。

◉高い世界へ至るための準備

では、その苦しみを超越するためにはどのような方法があるのかと。それは、聖なる八段階の実践であると。昨日も述べた、まず正見解。これは、教義をできるだけたくさん学び、そしてものを考えるときの土台を固めると。ヨーガ派と仏教の違いはここにある。ヨーガ派というものは、自分の考えというものを重んじる。よって、ズレることがあるし、魔境に落ちることも多いと。

しかし、仏教というのはもともと過去の仏陀、その過去の過去の仏陀等がお説きになった偉大なる教えというものが存在している。その教えをまずしっかりと記憶すると。その記憶することによって、次の正しい思索、思索ができるようになると。

つまり、どのように考えたらいいのか。これはちょうど、正確な図面をまず記憶し、その図面にのっとって何かを作り上げるというのと似ている。確かに試行錯誤することによって作り上げたものは、その努力というプロセスにおいて価値は存在するかもしれない。しかし、でき上がったものがベストであるかどうかは別問題である。

もし、最高の図面、今まで多くの人たちが練り上げた図面というものがそこに存在するとするならば、それを使って作り上げた方がよりいいものができるはずなのである。よって、正見解を第一とし、そして第二番目に、それに基づいて正思惟すると。

そして、この正思惟においては、愛著（あいじゃく）・邪悪心・迷妄といった三つの要素をできるだけ減少させることに努め、慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着といった四つの要素を培うと。これを日々修習しながら、第三段階の正語の実践に入っていくと。

なぜね、この正見解、正思惟、正語といったプロセスに入らなければならない

のかと。これは、高い世界の神々は、綺麗な言葉をお使いになり、綺麗な心をお持ちになっているということを考えたら、わたしたちが綺麗な言葉を使い、綺麗な心を日々修習する瞑想が、あるいは実践が何を意味するか理解できるはずである。つまり、高い世界の神々の心に心を合わせるだけではなくて、自分たちがその世界へ至るための準備をするわけである。

この正語においては、妄語・綺語・悪口・両舌という四つの口のカルマを捨断し、そして先程述べた四つの無量心にのっとった言葉を語ると、ね。

◉エゴからくる行為の捨断

そして、第四番目の正行為へと入っていく。この正行為は、わたしたちがエゴのために行動しているこの行動を捨断するということが狙いとなる。

つまり、生き物に対して哀れみを持ち、殺生しない、痛め付けないと。生き物に対して、その生き物の喜びの対象を盗むのではなく、施すと。生き物に対して、相手の嫌がるような、邪悪な心を持った性的交わりをなさないと。これらの三つ

の、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れることからスタートし、そして、本当に親切な、融和的な態度で接すると。これが、第四番目の正行為ということになる。

これは、例えば会社に勤めている人などは、前者と後者が自分にどういう結果を招くかよく理解できるはずである。あるいは家庭生活においても同じである。絶えず優しい態度、親切な態度で接するならば、当然信用というものは増大し、あるいは家庭生活というものは当然柔らかく、そして平和なものになるはずである。

◉一つ一つをクリアして

第五番目の正生活。この正生活は、在家は在家のなさなければならない実践、これをなすと。

一つ気付いたかもしれないが、これは順番である、あくまでも。もう正生活の、第五番目に入るときには、当然四つの段階をクリアしていなければならない。そして、生活全体を真理修行に徐々に徐々に傾けていくと。例えば在家の場合、在

家の実践である七つの方法とか、出家の場合、例えば七覚支の実践とかいうことが課題になってこよう。

そして正精進、正奮闘精進ということになるが、これは、今自分のできない事柄に対してよりいっそう努力しようとする、奮闘しようとする修行である。

例えば、わたしはこういう悪業があって、例えばわたしはタバコをやめられないのよと。これを奮闘する、闘うと。ということは、闘うまでの段階で、少なくとも正見解、正思惟、正語、正行為、正生活という五つは、ある程度できてないと闘うことはできないわけである。

で、六番目によって完全に悪法を断じ、善法を増大させて、そして正記憶修習述と入っていくと。この正記憶修習述は何かというと、より諸現象の実態を正確につかまえるということである。それは先程述べた、例えば四念処（しねんじょ）がそうであり、あるいは天界に対する思念や、人間界に対する思念や、あるいは解脱に対する思念がそうであると。

◉正サマディから正離解脱へ

これらの天界に対する思念、あるいは解脱に対する思念、あるいはこの身体に対する思念、あるいは感覚に対する思念、心の働きに対する思念、あるいは諸現象における法則に対する思念、これを修習することにより、その世界を経験すると。これが、その次のサマディである。正定である。

で、日本の仏教はこの八正道までしか説かないが、実際はその先は当然存在する。なぜかというと、サマディは結果ではないのである。これは入り口なのである。つまり、サマディによって如実に経験するのである。これはまあ、正精通という言葉を使っているわけだけどね、パーリ語では。ここによって、すべての世界、すべての原則の真の意味を理解し、そしてその原則から離解脱すると。

◉無明から始まる苦しみの生

この四諦(したい)八正道をまず、必ず真理勝者はお説きになる。そして、次に縁起の法をお説きになる。

まず、わたしたちがこの生を終えた後、わたしたちは無明へと没入すると。無明とは何かというと、闇である。完全なる暗闇である。なぜここで暗闇が強調されるかというと、もし光が存在していれば、わたしたちはこのような苦しみ多き人間の世界へ転生しないのである。もっともっと楽だけの世界がたくさん存在しているし、そこへ転生した方が当然幸福なのである。しかし、わたしたちは盲目なるがゆえに、暗闇と共存してるがゆえに、この人間の世界へ転生するのである。

では、これはどのような世界へ転生するのかと。それは、次にくる経験の蓄積、これを因として転生するのである。例えば、怒り、あるいは憎しみだけを修習している人は、その憎しみ多き世界へと転生する。例えば、人にものを施さず、貪っている人は貪り多き世界へ転生すると。例えば、性欲の修習だけを行なっている人は、その性欲の世界へと転生すると。もちろん、これは先程述べたドブの川と同じように、そこでは喜びもあるが、苦しみも当然存在していると。これが行なのである。

そして、そのいろいろな経験の中で、次は識別が生じてくると。これは先程述

べたいろいろな経験から、その例えば貪りが優位になるのか、あるいは愛著が優位になるのか、あるいは嫌悪が優位になるのか、邪悪心が優位になるのか、あるいは他の付属的な煩悩が優位になるのかによって、形成される肉体は違ってくるわけである。

これは、この次の名色という段階になる。ここでわたしたちは、アストラル・ボディーを形成する。そして、それには六処という、当然感覚器官が内在する。これは瞑想が進んでくると、この肉体と同じように、あるいはそれ以上に強い感覚器官が、わたしたちの内側に存在してるんだということが認識できる。この六処がそのアストラル世界と接するうちに感覚が生じ、そしてそれぞれの経験に応じて、粗雑な身体をつくる前段階である、世界の移行が生じてくる。

例えば、あるものは形状界へとどまり、あるものは欲界の低位にとどまるわけである。そして、この形状界にとどまるものは、そこで煩悩が少ないがゆえに、例えば何カルパとか、例えばそうだね、六カルパだとしたならば、それは約六百億年ぐらいだと考えたらいいわけだけど、六カルパとか、あるいは十カルパとか

五百カルパとか、長きにわたってそこで生存することになる。

ところが、よりいっそう粗雑なものを経験しようとするならば、そこから渇愛(かつあい)が生じてくる。つまり、この経験できない身体じゃ嫌だと。微細な身体じゃ嫌だと。もっと具体的に経験をしたいと。そして実際に、低位アストラルにおいてその経験が始まる。その経験が始まり出すと、そのときにわたしたちはとらわれが生じ、そして、そこで子宮へと転生するのである。これが、渇愛、取(しゅ)、有(う)なのである。そして生存すると。いいですか。

◉そして、遠離・離貪・解脱へ

生存することによって、わたしたちはそこで苦楽を経験し、老死を経験し、そして病を経験し、愁(しゅう)・悲(ひ)・苦(く)・憂(ゆう)・悩(のう)という心の苦しみを経験すると。

ところが、高い世界の記憶が残っている魂はそこで修行を始める。修行を始めることによって、まずクンダリニーを覚醒すると。クンダリニーを覚醒することによって、悦(えつ)が生じ、悦が生じることによってこの欲界の快楽より悦の方がいい

んだと思うようになる。そしてその悦は、心に喜びを形成すると。これは実際は、喜びというよりも明るさといった方が正しいとわたしは思います、経験からいうとね。で、明るさが生じてくると、身体が大変軽快になると。そして、完全なる意識の拡大、楽を経験すると。そのときサマディに入り、先程述べた正精通、つまり如実知見（にょじつちけん）に入り、そしてこの諸現象一切がわたしたちにとっては苦しみなんだということを理解し、遠離（おんり）し、離貪（りとん）し、そして解脱するのである。

　これらの法則はおそらく、今、在家の皆さんは聞いても、ある人はある程度わかり、ある人は少しわかり、ある人は全くわからないかもしれない。法とはそういうものである。よって、基本的な教学、これを徹底的に固めてください。それによって皆さんは、今日の説法の内容がより深く理解できるはずである。いいですか。

一九九一年十月八日　インド・サルナートにて

◆第十二話　無常の世界から脱却する第一の法

「正見解に重きを置け！」

◉このカルパの終わりに

ここはギッジャクータ山、皆様は、漢訳の「霊鷲山（りょうじゅせん）」という言葉で何度か読んだり聞いたりしたことがあるはずです。ここでは、サキャ神賢は、『法華経』や、あるいはその他の大乗経を説いたといわれています。しかし、それは真実でないという教えもあります。で、この賛否については大した問題ではない。少なくとも、上座部仏教においては大乗の思想がかなり発達していたことは事実だし、そしてそのテストケースとして、アーナンダがサキャ神賢のテストにあってたことも事実であると。

ここでサキャ神賢は、多くの法をお説きになりました。そしてそれは、クンダリニー・ヨーガの成就者に対して法をお説きになり、クンダリニー・ヨーガから煩悩破壊(ぼんのうはかい)という、つまり阿羅漢(あらはん)、そして阿羅漢から十力者に至る道、これをお説きになったわけです。

ここのヴァイブレーションは、わたしたちが一回目に来たとき、二回目に来たとき、三回目に来たときとと、どんどんエネルギーが強められています。そして、今回皆さんがここを、実際いらっしゃって、そして供養、それから瞑想をなさって、よりいっそうサキャ神賢をはじめとする真理勝者方と、そして皆さんとの縁は強くなったはずです。

もともと大乗思想の根本にあるものは何かというと、まず個が解脱すると。これは第一前提になります。そして、解脱した魂が、その解脱の状態、つまり自由・幸福・歓喜という三つの状態を捨て、すべての魂に対してその状態を説き明かし、そして多くの魂をその世界へ導き入れるということにあるわけです。

では、なぜそれが必要なのかというと、例えばいくらデーヴァへ生まれ変わっ

たとしても、このカルパの終わりには、この太陽系を含めた宇宙はすべて破壊されます。そして、破壊されたときに何も残りません。そのときには、デーヴァそのものもすべて、そのカルマに応じて、光音天界へ転生するか、あるいは、よほど質の悪い魂については他の宇宙の地獄へと至るわけです。ですから、いかに快楽を求めようとも、いかに楽しみを求めようとも、その快楽や楽しみというものは無常を根本としているわけです。

その無常を根本としているものを超越するためには、どうしたらいいのかと。もちろんそれは、光音天界以上の世界へ生まれ変われば、単純なるカルマにおける死というものは存在しません。しかし、やはりそこにおいても、例えば例を挙げるならば、空無辺の世界においては二万カルパの後、やはりカルマに応じて三悪趣へ転生しなければならないかもしれない。

◉無明から脱却するためには

では、そういうその無常を根本とした世界から脱却するための第一の法は何だ

ろうかと。それは正見解であるといえます。では、正見解とは現代語で訳したらなんだと。それは、真理のデータをたくさん知ること、記憶すること、これが正見解です。

で、ここで皆さんは一つ疑問が生じるかもしれない。では正見解と、正念つまり正記憶修習述との二つの違いは何だと。これはね、正見解というのは多くのいろんな法を記憶する、単純に記憶するだけなんだよ。ところが正記憶修習述というのは、一つのことを繰り返し繰り返し唱えて、それを記憶するということなんだね。

例えば、例を挙げるならば、有能神の世界はどういう世界である、有能神の世界はどういう世界である、有能神の世界はどういう世界であると、このような形で唱えるとか。あるいは、例えばわたしたちの身体は、まず骨は、頭蓋骨があって、頸骨があって、そして胸骨があって、肋骨があって云々というふうに、それを何度も何度も繰り返すと。これは記憶修習述と。ところが単純に、頭蓋骨、例えば頸椎、あるいは胸椎云々というふうに記憶していくこと、これは正見解に属

するわけだね。
　なぜ、じゃこの正見解が第一の法であり、すべてであるといえるかというと、正見解をもとに思索して初めて正思惟が成立します。もし正見解なくしては、正思惟は成立しません。つまり、根本となる教え、土台は何かというと、正見解であると。その正見解をもとにしてのみ、正思惟ができるわけであり、あるいは正しい反省、例えば慚愧の念に対するザンゲとかね、あるいは外側に対する、例えばグルに対する告白とか、そういうものが成立するわけです。もしこの正見解がなければ、一切そういうものは無意味になるわけです。
　ですから皆さんは、まず今生で解脱をしたい、あるいは今生で悟りを開きたい、あるいは今生で少なくとも高い世界へ転生したいんだと、そして来世より高い世界へ転生したいと考える人は、正見解にまず重きを置く。いいね。そしてその後、正思惟、そして最も実践しやすい正語へと移っていきなさい。いいね。
　そして、確かにヨーガ的な技法によってアラハットに到達すること、あるいはマハー・ムドラーを成就することは価値があります。しかし、それも正見解がな

ければ、その自分の状況というものが、逆に理解できないと。

確かに、コーザルへ没入するわけですから、二万カルパの長きにわたりその人は楽を得ることができるけども、しかし二万カルパといっても有、つまり有限に属します。有限に属するというものは、必ず終わりが来ると。つまり初めと終わり、瞬間瞬間をとらえるならば、二万カルパであろうとも、あるいは十年であろうとも変わらないわけだね。

これが仏教の無常を根本としている理由です。わかるかな、言っていることは。だから、そこをしっかりと理解しましょう。いいね。

◉絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜とは

そして、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜というのは、これはね、ゼロになることじゃないんだよ。絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜というのは、つまり、真我の意志によって自在にこの三界へ自分自身を現わし、そこで生活することができると。そして、必要なくなったらまた戻ってこれる、これが絶対自由であると。で、

絶対幸福というのは何かというと、これはすべてのカルマの制約を受けなくなっている状態。だから、悪業も善業もそのときには、もうその人は存在しないわけです。これは絶対幸福の状態であると。絶対歓喜というのは、その人の善や、あるいは徳が満ちて、何もしなくても本当に快感の状態でいられると。いつでも快感状態になれると。これが絶対歓喜であると。

つまり、これらはすべて論理的なんだね。例えばどういうことかというと、慣性の法則で、静止しているものに対して力を加えなければずっと静止している。そうだね。同じように、例えばエネルギーが循環し続けてそれに漏れがなければどうだ。永遠に減らないと。こういうことを、仏教やヨーガではいっているわけなんだよ。

だから、一般的に日本に伝わってきているような正しくない教えに対して決して耳を傾けない。いいね。君たちは最高の法を持っているわけだから。そして、この最高の法については、今回スリランカに行ったときも、例えば、ね、お坊さんたちがわたしに対して、悟りを開いている人とか、あるいは世界でただ一人仏

教の説ける人、あるいは世界でただ一人救済のできる人という、絶賛をしてくれたわけけど。あるいは、ある大臣が、わたしに対して阿羅漢であるという言葉を説いたりしていたわけだけど、それは、わたしの話している内容が、仏教の内容そのものであるということなんだね。

つまり、最も正確にパーリ語の読めるスリランカ人にとって、わたしの仏教は当たり前の仏教であると。しかも、それは当然の仏教であると。で、ただスリランカにはアラハットになった人は二人しかいなくて、一人はサンフランシスコで今法を説いていると。もう一人は、森で瞑想し続けているという話だ。

よって、君たちはそういう条件のもとで今真理を実践できるわけだから、それに対して確信を持ってしっかり頑張りましょう。いいね。

一九九一年十月七日　インド・ギッジャクータ山にて

◆第十三話　原始ヨーガから仏教へ

「サキャ神賢の系譜と同じラインを」

◉相対的真理から絶対的真理へ

オウム真理教の教えというものは、相対的真理と、そして絶対的真理の二つに分けることができます。そして、在家修行においては、その相対的真理の中に絶対的真理を見いだすという修行のプロセスをたどることになります。

これはどういうことかというと、絶対的真理とは、まずわたしたちが自己の本性、本質的な部分、つまりこれは、空ともあるいは真我ともいえる、まあパーリ語を使うならばアートマンの状態へ返ると。これが絶対的真理であり、これ以外の絶対的真理は存在せず、これ以上の絶対的真理も存在しません。しかし、在家

においては、その途上での教えを学び、そして功徳を積み、そして他の真理を実践すると。これが結果的には、わたしたちを現象界における幸福へと導くわけです。

例えば、例を挙げるならば、まあここにいるK君、あるいはサマナのU、その他の人たちを見て感じることですが、まず、例えば修行を進めていくと異性に対して大変もてるようになります。それは今回、例えば、わたしがシークレット・ヨーガを受けた中にもいくつかありました。で、これは人間の欲望の中の愛欲、特にかわいい人や素敵な人、美しい人と一緒にいたいとか、あるいは結婚したいとか、お付き合いしたいとかいう願望の現象化です。ところが、例えば現実生活においては、これすらできずに苦しんでいる方々がいらっしゃいます。

これはどういうことかというと、ムーラダーラ・チァクラからエネルギーが蓄えられ、スヴァディスターナまで蓄えられたエネルギーが、スヴァディスターナから漏れると、このような現象、もてるという現象が起きてきます。

次に例えば、学問によって成功したいという人は、それよりエネルギーを蓄え、

功徳を積み、善行をなすことにより、次はマニプーラ・チァクラから漏れるようになります。この人は、学問において大変な才能を発揮し、学者として、一代、有名な名を残す人となるでしょう。

そして次に、それよりもっとエネルギーが蓄えられてくると、アナハタ・チァクラにまでエネルギーが蓄えられ、そして、この人は権力や地位こそないが、あるいはお金こそないが、名誉を得るようになります。これが第四番目のアナハタ・チァクラです。

そして、それよりもエネルギーが蓄えられると、次はヴィシュッダ・チァクラで漏れるようになり、このとき地位、権力といったものが備わります。

そして、最終的にアージュニァー・チァクラまでエネルギーが蓄えられると、ある程度の神通力と、そしてこの現象を、現象界において思いのままに生きていける力が蓄えられてくるのです。

そして、これらを超越し、別の道、絶対の真理の道をたどった場合、それはサハスラーラから解脱としてエネルギーが漏れ、そして、わたしたちは神聖世界を

ぶち抜き、完全煩悩破壊をするのです。

ですから、言い方を換えるならば、修行を行なっていて結果の出ない修行は過ちであるということがいえるでしょう。

◉日本人に対する八正道の順番

では、どのようにしたら結果が出るのかと。それは先程も述べたとおり、まず正見解から始めればよろしい。日本人は貪りの多い国です。例えば、Kという宗教団体がありますが、ここの背景に使われている色は黄色と黒です。これは餓鬼と地獄を表わします。つまり、この会員は餓鬼と地獄の世界へ転生することを表わします。しかし、それは今の日本人にとって最も好ましい色であり、そして転生しやすい場所ともいうことができます。

で、このような貪りの強い日本人に対して、まず何を実践させたらいいのかと。それは、まず教学であると。というのは、日本人は知識を吸収することは大変好きです。ですから、教えをまず記憶させると。そして、お金のかからない正語の

実践から伝授すると。つまり、妄語・綺語・悪口・両舌をやめなさいよと。これぐらいだれだってできると。だから、まずそのアプローチから始めることにより、皆さんの肉親、あるいは友人、知人は、少しずつ徳を積むこととなるでしょう。

次の段階で、心において、愛著・迷妄・邪悪心といったものに対するアプローチをさせると。それにより煩悩が弱められ、そして行為における殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れるといった方向へと導きます。

これらの戒を具足させた後、次の段階で布施の実践へと入っていくわけです。その布施の実践もまず初めは安心施、つまり多くの人が苦しんでるとき、その人の苦しみをとってあげるという安心施から法を説く。そしてその後、財施、真理施の順番で法の実践に入っていくならば、スムーズに真理の実践ができるようになるでしょう。

ではなぜ、この順番でいけばスムーズに実践ができるようになるのか。それは、例えば言葉の統御をする段階において、わたしたちはアストラルが浄化され、そしてその恩恵を受けます。そして、心の浄化をすることにより、コーザルの浄化

が起き、その恩恵を受けます。そして、行為の浄化を行なうことにより、身・口・意、三つの恩恵を受けることになる。それにより、より心は柔軟となり、真理のデータが入りやすい状態となるのです。

ところが初めから、例えばオウム真理教の最も難しい法である解脱や、あるいは悟りや、あるいは出離といったような法を展開をしてしまうと、その人は何が何だかわからなくなります。というのは、その人には真理の法がまだ根付いていないわけですから、ちょうどそれは、ここに卵があったとして、その卵を孵化する際、熱い温度であればいいわということで、百度や二百度の熱を加えるのと同じです。あくまでも適当な温度によって孵化することこそが卵のかえる条件であり、それと同じように迷妄に悩んでいる魂を済度する場合は、法における順番というのがあります。

ですから、今の日本においては、間違いなく、言葉の統御、心の統御、行為の統御、そして布施の実践という順番で法を説きます。もちろん、その前に教学をさせることはいうまでもありません。これらの法の順番で丈夫調御された魂が、

少しずつ少しずつ魂が浄化され、そして煩悩を弱められ、現象として素晴らしい現象が生じてきます。

◉現象を正確に知る恩恵

もともとオウム真理教と他の宗教団体の違いは何かというと、それは煩悩を破壊することによってすべての現象を好転させようとしているのか、あるいは煩悩を強めることによってすべての現象を好転させようとしてるかの違いです。ここで一つ考えていただきたいことがある。ある現象があった場合、その現象に対して証智（しょうち）、つまり正確に知る、この正確に知ることができるかどうかということは、未来においてどのような恩恵があるだろうかと。

例えばここに一枚の地図があるとし、その地図を見ないで目的地に走ろうとする人と、しっかりとその地図を確認して目的地に着こうとする人とでは、当然、地図を見る時間、これは確かにマイナスかもしれません。それよりも目的地に至るまでのロスタイムというのは大幅に省かれ、そして目的地により早く達成する

ことができるはずです。これが、煩悩破壊における、あるいは煩悩を弱めることにおける現象を正しく見つめる力なんです。

例えば、事業について話をするならば、自分自身の会社運営におけるいろいろな動きに対してまず正確に知り、そしてその一つ一つに対して正確に処置していくと。これをなすならば、その事業家はどの国へ転生しようとも偉大なる事業家となるでしょう。

例えば、恋愛において、まず結婚する前に対象に対してしっかりと認識し、この人の長所はこうである、欠点はこうであるということを認識し、そしてお付き合いを進めていくならば、その欠点においての苦しみというのは生ぜず、長所における喜びだけが生じるようになるはずです。

例えば学問において、ある学問を達成したいとする場合、その学問の周辺の学問をいくらやっても結果は出ません。目的とする学問をひたすら集中することによってのみ、結果が出るはずです。

このように真理、仏教というものは明らかに科学なのです。そして、その仏教

の根本はどこにあるのかというと、それは原始ヨーガにその原本を見ることができます。現に、サキャ神賢の前生談の中でも、多くの生においてヒマラヤへ行かれ、そしてそこで神聖行をなし、そして煩悩破壊なさり、そして神聖天へ転生なさったという話が出てきます。これは、サキャ神賢の系譜が、原始ヨーガから真理をお説きになっていらっしゃったんだということの証明であると思います。

そして今、オウム真理教も同じように、原始ヨーガ、仏教のラインを採っています。これは、真理勝者に到達する魂は、必ず原始ヨーガ、仏教の道をたどるんだということの一つの証明でもあるでしょう。そして、ここにいる四百名の皆さんも、同じように原始ヨーガから真理、仏教の道を歩いています。

ですから、このカルパの終わり、確かにわたしはこの地球において真理を説き明かすでしょう。しかし、その後は皆さんが、同じように真理勝者として、供養値魂、最上正覚者として、あるいは無上の士として、最上善逝（さいじょうぜんぜい）としてこの地球へ転生し、あるいは他の惑星へ転生し、真理を説き明かし、そしてすべての魂を済度する、そういうカルマを必ずしょうはずです。そしてそのための、今回は偉

大な皆さんの功徳になったことは間違いありません。
このインドツアーも既に終わりました。これからは日本での救済活動。そして、日本でまた精いっぱい救済活動を行ない、より高い意識次元へと到達し、すべての魂を絶対的な至福の状態へ、皆さんと一緒に導いていきましょう。

一九九一年十月十一日　インド（デリー）・大説法祭にて

◆第十四話　この世界の楽しみよりも素晴らしいものが存在する！

「オウム真理教にのみ存在する実践法」

◉非神秘的な生活を求めると……

もともと非神秘力、この非神秘力がすべてを決定する。この非神秘力とは何か。例えば、この現実の生活において大金を持てば豊かである、何でもできると。あるいは、この現実の生活において、例えばいろんな享楽が楽しめる。これは素晴らしいと。これ以外のものは存在せず、これ以上のものも存在しないと考える。これから彼は、それに対するいろいろな知識を吸収し出す。これが邪悪見解である。

そして、それを達成するためにいろんな思索を始める。これが邪悪思惟である。

そして、それにのっとって行為を実践する。いいな。これが邪悪行為である。そして、その非神秘的な生活をより固定させる、固めるために努力する。一日中努力する。これが邪悪生活だと。そしてその達成できない部分、例えば給料が百万だったと。これを百万を百五十万にしようと努力する。奮闘努力する。これが邪悪奮闘である。そして記憶修習する。もっともっと大金持ちになりたい、もっともっと地位が欲しい、もっともっと高い権力が欲しいんだと。これが邪悪記憶修習である。そして邪悪サマディに入っていく。いいな。

◉高い世界の経験をしている魂は

しかしここに、高い世界を経験している魂がいて、あるいは、煩悩破壊（ぼんのうはかい）の経験をしてる魂がいて、その魂はこう考える。この世界は無常である、いかなるものも必ず死ななければならない、いかなるものも必ず変化するんだと。そして、この肉体と呼ばれるものは、骨によって構成され、筋肉によって構成され、脂肪によって構成され、血液によって構成され、あるいは胆汁（たんじゅう）、胃液等の粘液によっ

て構成されていると。そしてこの身体は、いくらわたしが愛着したとしても、必ず滅びるものであると。

では、滅びないものは存在するのか。より価値のあるものは存在するのか。ここで考える。八十年や百年で滅びないものはあるのか。あるいは、絶対的に滅びないものは存在するのか。あるいは、今この世界の楽しみ、これよりもより素晴らしいものは存在するのかと考える。それは存在する。どう考えても存在すると。

では、そのためにはどうしたらいいんだ。そこから学ぼうとする気持ちが出てくる。君たちの場合は、もうそれは機械的に、特別教学システム、あるいは多くの出版物、経典類があるから、そこに目を通すようになる。確かにこれは正しい、この教えは正しいと。昔も正しかったし、今も正しかったし、自分の考えにも合致している。

ただ、自分の煩悩とは合致していないから、そのデータが入ってくるとちょっと摩擦が起きる。しかしその摩擦が起きるということは、これは、自分の傾向である下向きのエネルギーとのぶつかり合いが生じているんだから、素晴らしいこ

とだと考える。そして、その正見解が根付いた段階で、解放、解脱に対する瞑想が始まる。これが十二縁起の法だ。

そして、心における害心、あるいは行為における残酷さ等を瞑想する。この害心や残酷さそのものが今の自分の心を形成し、そしてその記憶修習によって自分の肉体というものは痛んでいるんだと。

例えば、例を挙げよう。ここで、殴って喜ぶ人がいたら、その喜びと同時にその人は殴られるときの苦しみを経験しなければならない。もし君たちが非暴力になれば、撤すれば、君たちに苦しみはない。おやおや、尊師はまたおかしいことを言い出したなと。先程は、特別教学システムに入って真面目にやらない者については殴ってもいいと言ったじゃないかと。

ここで問題になってくるのは、四無量心の瞑想である。もし君たちの心の中に四無量心がしっかり根付き、その人のためにはどちらがいいかと。下向し、地獄へ落ちるぐらいだったら、ここで殴っても修行させ続けた方がいいんだという認識が生じれば、それは殴ってもいいということになる。

　まあこれは、例えば「ガティーカーラ経」やあるいは「イッリーサ・ジャータカ」などにその仏教の本質的な救済の意味合い、いかに力を使って救済しているかの意味合いが載っている。その場合は、ただし縁の深い者がやらなければならない。

　そして、こういう非暴力――いいですか、ここは大変重要なところだからね――例えば、相手を進めるために殴ったとして、当然自分には痛みとして返ってくる。で、その返ってきたときに、「あ、これはカルマが返ってきた。これによって彼は修行が進むだろうな」と考えられる人、このような状態になったら殴ってもよろしいという意味だ。そういう状況へ陥ることも含めてしっかりと思索すること、これが正思惟である。

◉身・口・意の悪業の捨断を

　そして、天界の神のような言葉を実践する。妄語を離れ、軽薄語を離れ、悪口を離れ、そして中傷を離れる。そして、四無量心のこもった、優しく綺麗な言葉

を絶えず実践する。あるいは、あるときは有能神のように威厳のこもった恐い言葉を実践する。これが正語である。
そして、行為において、殺生を離れ、偸盗を離れ、神聖行に赴かないことを離れる。殺生、偸盗、邪淫の捨断をする。これを実践することにより、生き物を慈しむ優しい態度、そして人にものを施す優しい態度、そして、堂々と生きるための邪淫の捨断といった行為を行なう。これが正行為ということになる。
そしてサマナ生活において、できるだけ多くの時間を、例えば初め三時間しか修行できなかった、あるいは奉仕ができなかったものを徐々に伸ばし、五時間、八時間、一日と増大させていく。これが正生活である。
そして、一つ一つの自分自身の行為や言葉や心の働きについて、より純粋な、より精密な、より崇高な状態へとつくり上げていこうとする努力、これを二正勤二正断といっているわけだけどね、実際には。つまり、今なしている善法を実践し続ける。今まだなすことのできない善法については、その決意を生じさせることによって実践する。今なしている悪業、捨断できてない悪業について捨断で

きるように決意を生じさせ、捨断に向かう。今捨断している悪業を、よりいっそう捨断するように努力する。

これらの奮闘、これをなした後、記憶修習によって、自分自身の身体、感覚、心、そして観念といった、あるいはいろいろな法則といったものに対して記憶修習を繰り返す。これをなすことによってサマディが生じる。そして、君たちは阿羅漢へと到達し、正精通に至り、そして離解脱するんだと。

◉これだけの修行環境の中で

この実践は、今このオウム真理教において実践することができる。というより、わたしは世界のいろんな仏教国を見て感じることだが、オウム真理教のみがその実践ができるのではないかと考えている。

例えば、君たちが修行生活に入ったとき、「ああ、食事をどうしようか」という心配は当然いらないはずだ。どうだこれは。例えば、君たちが修行生活に入ったときに、「ああ、この修行から出て会社を探さなければならないな」と。そう

いう思索も必要ないはずだ。どうだこれは。例えば、君たちがより深い探求をしたければ、当然それは時間的に提供しているはずだ。どうだそれは。

これらの修行環境が存在してるのに、寝る場所、それから食事、それから時間、これらの条件がそろっているのに、しかも教材も十分にあるよね。どうだそれは。この状態で修行できなかったら、どういう状態で修行するんだ。どうだそれは。

わたしは、グルの力は偉大だと考えている。そして、グルというものはいつこの世界からいなくなるかわからないわけだから、そう考えるならば、今、時間、教材、空間、そして食という、修行者に必要なものすべてがそろっている状況のもとで全力で修行することは、当然であると考えなければならない。

一九九一年十月十六日　富士山総本部にて

第二章　二千六百年前の経典が、今解き明かされる！

『南伝大蔵経』「道に関係づけられた経典」

【一】第一　非神秘力

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はサーヴァッティー（沸騰する腹部）のジェータ（勝利者）林にあるアナータピンディカ（貧しい人に施し物を与える人）の大庭園にとどまっておられた。

二　そこで、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに、呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ。」

「尊師よ。」

と、その向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。そこで、世尊はこう演説なさった。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、非神秘力が先立って、不善の法則が生起してからは後に続いて、慚愧がなく、良心がないのだ。

向煩悩滅尽多学男たちよ、無知の人には、非神秘力から誤謬見解が結果として生じる。誤謬見解から誤謬思惟が結果として生じる。誤謬思惟から誤謬語が結果として生じる。誤謬語から誤謬行為が結果として生じる。誤謬行為から誤謬生活が結果として生じる。誤謬生活から誤謬奮闘が結果として生じる。誤謬奮闘から誤謬記憶修習が結果として生

じる。誤謬記憶修習から誤謬サマディが結果として生じるのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、また、神秘力が先立って、善の法則が生起してからは後に続いて、慚愧と良心があるのだ。

　向煩悩滅尽多学男たちよ、知者には、神秘力から正見解が結果として生じる。正見解から正思惟が結果として生じる。正思惟から正語が結果として生じる。正語から正行為が結果として生じる。正行為から正生活が結果として生じる。正生活から正奮闘が結果として生じる。正奮闘から正記憶修習が結果として生じる。正記憶修習から正サマディが結果として生じるのである。」

【七】第七　ある向煩悩滅尽多学男（二）

一　サーヴァッティーの地にて。

二　そのとき、ある向煩悩滅尽多学男が、世尊の所に行った。行くと、世尊を敬礼してそばに座った。

三　そばに座って、その向煩悩滅尽多学男は、世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、愛著の除去・邪悪心の除去・迷妄の除去と言われますが、尊師よ、一体この

愛著の除去・邪悪心の除去・迷妄の除去とは、何の象徴物なのでしょうか。」

「向煩悩滅尽多学男よ、この愛著の除去・邪悪心の除去・迷妄の除去とは、煩悩破壊界の象徴物なのだ。それによって、種々の漏(ろ)の破壊といわれるのである。」

四　このように言われたとき、その向煩悩滅尽多学男は、世尊にこう申し上げた。「尊師よ、不死、不死と言われますが、尊師よ、一体どのようなことが不死なのでしょうか。どのようなことが不死に至る道なのでしょうか。」

「向煩悩滅尽多学男よ、愛著の破壊・邪悪心の破壊・迷妄の破壊、これが不死といわれるのである。この不死に至る道とは、まさに聖なる八段階の道のことなのだ。つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディのことである。」

【八】第八　分別

一　サーヴァッティーの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、君たちに聖なる八段階の道を指し示し分別しよう。それを聴いて、完璧に作意(さい)しなさい。わたしは説こう。」

「わかりました、尊師よ。」

と、その向煩悩滅尽多学男たちは世尊に承諾し申し上げた。世尊はこう演説なさった。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、聖なる八段階の道とは何であろうか。

つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディのことである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正見解とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、苦しみにおける精通(せいつう)・苦しみの生起における精通・苦しみの滅尽における精通・苦しみの滅尽に至る方法における精通、向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正見解というのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正思惟とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、解放の思惟・非害心の思惟・非残酷の思惟、向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正思惟というのである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正語とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、虚言をやめること・中傷をやめること・悪口をやめること・軽薄語をやめること、向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正語というのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正行為とは何であろうか。向煩悩滅尽多学男たちよ、殺生をやめること・窃盗をやめること・非神聖行をやめること、向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正行為というのである。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正生活とは何であろうか。向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで聖なる多学の弟子は、誤謬生活を捨断して、正生活によって生活する。これを正生活というのである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正奮闘とは何であろうか。向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、生じていない悪不善の法則が生じないように、決意を作り出し、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。生じた悪不善の法則を捨断するために、決意を作り出し、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。生じていない善の法則が生じるように、決意を作り出し、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。生じた善の法則を集中継続し、混乱することなく、さらに多く学び、充実し、修習し、完全にするために、決意を作り出し、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正奮闘というのである。

一〇　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正記憶修習とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智(しょうち)し記憶修習して、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正記憶修習というのである。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、正サマディとは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、種々の愛欲を遠離(おんり)し、不善の法則を遠離して、有熟考有吟味(うじゅっこううぎんみ)にして、遠離から生じる喜と楽とがある、第一静慮(じょうりょ)を達成してとどまる。

熟考と吟味を静止し、心の中を落ち着かせ、心が一点に集中し、無熟考無吟味にして、サマディから生じる喜と楽とがある、第二静慮を達成してとどまる。

喜から離愛著し、無頓着となってとどまり、記憶修習し正智して、身によって楽を覚え、聖人たちが『無頓着にして記憶修習がある楽の時を過ごす』と明かす、第三静慮を達成してとどまる。

楽を捨断し苦しみを捨断して、以前の幸福と落胆とを全滅したことから、不苦不楽にして、無頓着と記憶修習による純粋とがある、第四静慮を達成してとどまる。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正サマディというのである。」

【二九】第九　感覚

一、二　サーヴァッティー。そこで、演説なさった。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、三つの感覚がある。三つとは何であろうか。楽の感覚・苦しみの感覚・不苦不楽の感覚のことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが三つの感覚なのだ。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの感覚を理解することによって、聖なる八段

階の道を修習しなさい。聖なる八段階の道とは何であろうか。
つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディのことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの感覚を理解することによって、聖なる八段階の道を修習しなさい。」

【三〇】第十　ウッティヤ、あるいはウッティカ

一、二　サーヴァッティー。
三　そのとき、聖者ウッティヤ（説法者）は世尊の所に行った。行くと、世尊を敬礼してそばに座った。
四　そばに座った。聖者ウッティヤは、世尊にこう申し上げた。
「尊師よ、わたしは人里離れた所で独居していると、心にこのような考えが生じました。『世尊によって五つの愛欲の構成部分が言われました。世尊は一体何を五つの愛欲の構成部分としたのでしょうか』と。」
五　「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、ウッティヤよ。ウッティヤよ、確かに、わたしによって、この五つの愛欲の構成部分が言われた。五つとは何であろうか。

眼によって識別される形状‐容姿は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・快いこと・愛着することと・欲求することであり、耳によって識別される声は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・快いこと・愛着すること・欲求することであり、鼻によって識別される香りは、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・快いこと・愛着すること・欲求することであり、舌によって識別される味は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・快いこと・愛着すること・欲求することであり、身によって識別される接触は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・快いこと・愛着すること・欲求することなのである。

ウッティヤよ、この五つの愛欲の構成部分は、わたしによって言われたのだ。

六　ウッティヤよ、この五つの愛欲の構成部分を捨断することによって、聖なる八段階の道を修習しなさい。聖なる八段階の道とは何であろうか。

つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディのことである。ウッティヤよ、この五つの愛欲の構成部分を捨断することによって、この聖なる八段階の道を修習しなさい。」



【五五】第七　真理にのっとり——遠離を目的とする

一　サーヴァッティーの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、太陽が昇天するとき、これに先立ち、この前兆となるのは、すなわち日の出のことなのだ。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男が聖なる八段階の道を生じるとき、これに先立ち、この前兆となるのは、すなわち真理にのっとり作意することの獲得なのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、真理にのっとり作意することを獲得した向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、それではどのようにして、向煩悩滅尽多学男は、真理にのっとり作意することを獲得して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向（えこう）する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習

する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このようにして、向煩悩滅尽多学男は、真理にのっとり作意することを獲得して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのである。」

【六三】第一　素晴らしき友（一）——遠離を目的とする

一　サーヴァッティーの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、聖なる八段階の道を生じさせるのに数多く貢献する一つの法則がある。一つの法則とは何であろうか。すなわち、素晴らしき友であることなのだ。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、素晴らしき友である向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、それではどのようにして、素晴らしき友である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このようにして、素晴らしき友である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのである。」

【八四】第一　素晴らしき友（二）――愛著除去

一　サーヴァッティーの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、まだ生じていない聖なる八段階の道が生じ、生じた聖なる八段階の道が修習され完全になるという法則を、わたしは他に一つも認めたことがない。向煩悩滅尽多学男たちよ、言い換えれば、素晴らしき友であることなのだ。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、素晴らしき友である向煩悩滅尽多学男は、道を真面目に行なうことを望むのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正見解を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正思惟を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正語を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正行為を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正生活を修習する。

る。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正奮闘を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正記憶修習を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このようにして、向煩悩滅尽多学男は素晴らしき友であり、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのである。」

【一三九】第一　真理勝者

一　遠離を目的とする

一　サーヴァッティーの地にて。

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、種々の生命体で、足のないもの、あるいは二本足のもの、あるいは四本足のもの、あるいは数多くの足があるもの、あるいは形状 - 容姿を持つも

の、あるいは形状-容姿を持たないもの、あるいは認知を持つもの、あるいは認知を持たないもの、あるいは非認知非非認知を持つものについては、供養値魂・最上正覚者である真理勝者が、その最上であると言明されるのだ。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、どのような善の法則もすべて、怠惰でないことを根本とし、怠惰でないことと結び付き、怠惰でないことはそれらの諸法則の最上であると言明されるのである。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、それではどのようにして、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのであろうか。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習す

る。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのである。

後ほど三つの経について詳しくするつもりだ。」

二　愛著除去

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正見解を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正思惟を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正語を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正行為を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正生活を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正奮闘を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正記憶修習を修習する。

愛著の除去に完達し、邪悪心の除去に完達し、迷妄の除去に完達する正サマディを修習する。



三　不死直結

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正見解を修習する。

不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正思惟を修習する。
不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正語を修習する。
不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正行為を修習する。
不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正生活を修習する。
不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正奮闘を修習する。
不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正記憶修習を修習する。
不死に直結し、不死を最終地点とし、不死に完達する正サマディを修習する。

四　煩悩破壊に下る

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正見解を修習する。

煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正思惟を修習する。

煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正語を修習する。
煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正行為を修習する。
煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正生活を修習する。
煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正奮闘を修習する。
煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正記憶修習を修習する。
煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至る正サマディを修習する。

【一四九】第一　力

一　サーヴァッティーの地にて。

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、力でなすべき仕事がなされるのは、すべて大地によって大地に確立するのであって、このように、力でなすべき仕事はなされるのだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、それではどのようにして、向煩悩滅尽多学男は戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのであろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを

修習する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このようにして、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうのである。」

以上がガンガ（大変速い河）の復誦（ふくしょう）を記述することにより、完全な経になるという詳しいやり方である。

【一五〇】第二　種子

一　サーヴァッティーの地にて。

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、どのような種子の群や草木であっても、発達し成長し充実するようになるのは、すべてそれらは大地によって大地に確立するのであって、このように、これらの種子の群や草木は発達し成長し充実するようになるのだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、諸法則において、発達し成長し充実するのを得るのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、それではどのように、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道

を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、諸法則において、発達し成長し充実するのを得るのであろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を

修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。
向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、諸法則において、発達し成長し充実するのを得るのである。」

【一五二】第三　龍

一　サーヴァッティーの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、龍は山の王雪山によって、身を発達させて力を持つ。そこで、彼らは身を発達させ力を持って、小さな池に降りる。小さな池に降りて、大きな池に降りる。大きな池に降りて、小さな川に降りる。小さな川に降りて、大きな川に降りる。大きな川に降りて、大海や大洋に降りる。そこで、彼らは身が大きくなり、充実するようになるのだ。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立

して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、法則において大きくなり、充実するのを得るのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、それではどのように、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、法則において大きくなり、充実するのを得るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、法則において大きくなり、充実するのを得るのである。」

【一五五】第七　空

一　サーヴァッティーの地にて。

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、空には様々な風が吹く。東の風が吹き、西の風が吹き、北の風が吹き、南の風が吹き、塵を持っている風が吹き、塵のない風が吹き、涼しい風が吹き、熱い風が吹き、小さな風が吹き、甚だしい風が吹く。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男が聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、四つの記憶修習述の修習は完全に広がり、二正断二正勤（にしょうだんにしょうごん）の修習は完全に広がり、四つの如意（にょい）の基礎の修習は完全に広がり、五つの潜在性の修習は完全に広がり、五つの能力の修習は完全に広がり、七つの覚醒段階（かくせいだんかい）の修習は完全に広がるのである。

　向煩悩滅尽多学男たちよ、それではどのように、向煩悩滅尽多学男が聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、四つの記憶修習述、二正断二正勤、四つの如意の基礎、五つの潜在性、五つの能力、七つの覚醒段階の修習は完全に広がるのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

　遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

　遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、向煩悩滅尽多学男が聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、四つの記憶修習述、二正断二正勤、四つの如意の基礎、五つの潜在性、五つの能力、七つの覚醒段階の修習は完全に広がるのである。」

【一五九】第十一　滞在客

一　サーヴァッティーの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、滞在客用の会館があり、そこには東の方角から来て宿泊し、西の方角から来て宿泊し、北の方角から来て宿泊し、南の方角から来て宿泊し、武人階級が来て宿泊し、祭司階級が来て宿泊し、庶民階級が来て宿泊し、奴隷階級が来て宿泊する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、証智して理解できる諸法則を証智して理解し、証智して捨断できる諸法則を証智して捨断し、証智して現証できる諸法則を証智して現証し、証智して修習できる諸法則を証智して修習するのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、どのような法則が証智して理解できるものなのだろうか。それは、五つのとらわれの集積であると発言できる。五つとは何であろうか。つまり、形状・容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積のことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの諸法則が証智して理解できるものである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、どのような法則が証智して捨断できるものなのだろうか。非神秘力と生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの諸法則が証智して捨断できるものである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、どのような法則が証智して現証できるものなのだろうか。神秘力と離解脱である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの諸法則が証智して現証できるものである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、どのような法が証智して修習できるものなのだろうか。寂止と正観である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの諸法則が証智して修習できるものである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、それでは、どのように、向煩悩滅尽多学男は、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、証智して理解できる諸法則を証智して理解し、証智して捨断できる諸法則を証智して捨断し、証智して現証できる諸法則を証智して現証し、証智して修習できる諸法則を証智して修習するのであろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、遠離を目的とし、離愛著を

目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正奮闘を修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。
遠離を目的とし、離愛著を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、向煩悩滅尽多学男は、聖なる八段階の道を修習し、聖なる八段階の道を真面目に行なうことによって、証智して理解できる諸法則を証智して理解し、証智して捨断できる諸法則を証智して捨断し、証智して現証できる諸法則を証智して現証し、証智して修習できる諸法則を証智して修習するのである。」

仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

INITIATION

イニシエーション

麻原彰晃著

この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、
最高の修行法を伝授する。
本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀――
ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、
誕生した三五〇名の解脱者が証明する。
さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、
農作物輸入自由化など、
今日の世界と日本の動向を正確に予言している、
驚くべき記述の数々！



武田　健さん（東京都／学生）
「末法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／警備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本　勇さん（石川県／会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県／店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県／主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都／経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。

◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。
◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。
◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。
◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱――それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!



解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ（巻頭カラー8ページ） 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 （本　社）〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03（3439）6043 郵便振替 東京2-109325
（営業部）〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03（5370）1598

麻原彰晃の世界 シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

絶賛発売中!!

PART-1



幸福に至る四つの実践
B6判　定価2500円

仏教の基本ともいえる「四預流支」。多彩な側面から縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人にはもちろんのこと、幸福な人生を求めるすべての人に本当の生き方を指し示す。

PART-2



尊師、麻原彰晃が斬る！
B6判　定価980円

願望成就の秘訣、UFO＆宇宙人、医学、幼児教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原彰晃尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手、鹿島とも子さんとの対談も加わって、ますます充実。

PART-8
仏教真理・六波羅蜜
B6判 予価550円

近日発刊予定

PART-5


絶対の真理
B6判 定価980円

善業も悪業もなしたことが必ず返ってくる―― 幸福・不幸の根本原因であるカルマの法則を多くの実証例を交えて説く。

PART-6

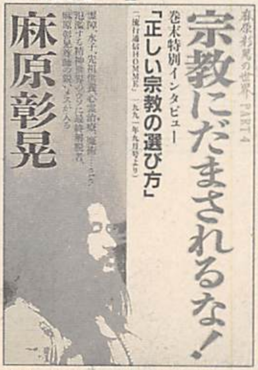

願望成就の秘法
B6判 定価980円

安全で確実な願望成就の秘法とは？ 仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。

PART-3


真実！六道輪廻
B6判 定価980円

永遠の真実"六道輪廻"。すなわち、わたしたちはこのサムサーラ（苦界）をさまよい、苦しみ続けているのだ。果たして、ここから抜け出すことはできるのか？臨死体験・大霊界・チャネリングなど、間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

PART-4


宗教にだまされるな！
B6判 定価980円

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい道を説き示す麻原彰晃尊師。本当の幸福と心のやすらぎを得たいあなたに。

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

● 全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版
本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL03(5370)1598

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝ＥＨ会員〟になることができます。ＥＨ会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。
お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。

◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！

◉成就者との対面および電話による悩み相談。

◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（ＥＨ会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとＥＨ会員となります。
なお、定期購読の申込みは６カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。



至福の未来をあなたの手に

オウム真理教

AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい



……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。
日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。
素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか？

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

麻原彰晃の世界PART7

資料請求券

◆各道場のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
布施精舎　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. ＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany

麻原彰晃の世界 PART 7
『仏教真理・八正道』
1991年12月 7日　初版発行
定　価　800円（本体776円）
発行者　松本知子　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2—8—17
電話　03（3439）6043　振替　東京2—109325

ISBN 4—900497—84—3　C0014　P800E
※乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

麻原彰晃の世界PART7



仏教真理・八正道

麻原彰晃

ISBN4-900497-84-3 C0014 P800E 定価800円(本体776円)